

「さ」と、ダントンが口を入れた。

「そして、その男は自分以外の人間がラントナックをやつゝけるのを、快く思つてゐないんだ。ヴァンデー戦争で困つたことは、かういふ競争心なんだ。統一のつかない英雄連といふのが、我々の軍隊なんだ。騎兵の一大尉であるシャンボンは、進軍喇叭を鳴らしてソームユールに入り、ソームユールを占領してしまつた。更に進んでショロを取ること出来たのだが、命令を受けてゐないといふので進軍を止めてしまつた。ヴァンデーでは各地の隊長の間に統一をつけなけりやならない。主力が離れ離れになつてゐる、軍隊が散りくになつてゐる。さう散らばつてゐるは、軍隊としての力は麻痺してしまふ。まるで埃の中に轉げこんだ岩のやうなものだ。パラメの陣地にはもうテントの影が見えないし、トレギエとディナンの間には、不必要な小部隊が百箇所にも駐屯してゐるが、これを集結すれば、僅に海岸線全體を警備出来る一箇師團ぐらゐの兵力になるんだ。ところが、レシエルはパラスと一緒に、南部海岸を警備するといふ口實で北部の海岸を開けつばなしにして、英軍に佛蘭西侵入の道をあけてやつてゐる。ラントナックの計畫は五十萬人の百姓を蜂起させることと、英軍を上陸させることなんだ。派遣軍の青年隊長はレシエルの許可なしにラントナックに肉迫し、猛烈にやつつけてゐる。ところが、レシエルはその上長官なので、それを命令違反の廉で申告して來てゐるんだ。しかし、その處分については意見は區々になつてゐる。レシエルは彼を銃殺したいと思つてゐるし、ブリュール・ド・ラ・マルヌは副司令官にしようと思つてゐるんだ」

「その青年はなか／＼素晴らしい素質をもつてゐるやうだ」と、シムールダンがいつた。

「しかし、一つ缺點があるぜ」邪魔を入れたのはマラーであつた。

「どういふ缺點だね？」と、シムールダンが問ひ返した。

「慈悲だよ」と、マラーがいつた。それから更に言葉を續けて、

「あの男は戦争となれば強いものだが、後になると軟化しちやうんだ。氣持が寛大になつてしまつて、敵を許したり、釋放したりするんだ。信心家や尼さんなどを保護したり、貴族の妻君や娘を助け、捕虜を放免したり、僧侶を逃がしたりするんだ」

「重大な過失だ」シムールダンがいつた。

「罪悪だよ」と、マラーがいひ放つた。

「時によるとね」と、ダントンがいつた。

「大抵の場合にはだ」と、ロベスピエールがいつた。

「殆んどどんな場合でもさ」と、マラーがいつた。

「國家の敵に對つてゐる場合には、如何なる場合にでもだ」と、シムールダンがいつた。マラーはシムールダンの方を向いて、

「それぢや、王黨の首領を逃がしてやつた共和黨の指揮官を、君はどう處分するかい？」
「僕はレシエルと同じ意見だ、銃殺しちやうさ」

「でなきや、斷頭臺にかけるんだ」と、マラーがいつた。

「當人の望み次第で」と、シムールダンが答へる。

ダントンは笑ひ出して、「僕はどつちでも結構だ」

「お前は、どつちかでやられるに違ひないぞ」と、マラーが呻くやうにいつた。

そして、チラとダントンの顔を見てから、またシムールダンの方を向いて、「ぢや、シムールダン市民、君は、もし共和黨の首領が間違ひをやつたら、首をチョン切つてしまはうといふんだね？」

「二十四時間以内に」

「そんなら、俺もロベスピエールに賛成する。シムールダン市民を海岸警備隊の討伐隊司令官附公安委員會特派代表として派遣すべしだ。で、その隊長の名はなんといつたつけね？」と、マラーが訊ねた。

ロベスピエールはそれに答へて、「あれは舊貴族だよ」と、いひながら書類を引繰り返し始めた。

「僧侶に貴族の番をさせようや、僧侶が一人であるんでは安心が出来ぬし、貴族が一人であるのも信用が出来ない。僧侶と貴族が一緒にあるところで、初めて心配がなくなるんだ、お互が相手を警戒しながらやつて行くから、うまく行くんだね」と、ダントンがいつた。

シムールダンの眉根に刻まれた憤怒の筋は峻しくなつたが、彼の意見の無理もないことがよく呑込めたと見えて、ダントンの方は見向もせず、一段と聲を勵ましていひ切つた。

「僕が預つた共和黨の指揮官が、もし一度でも間違ひを仕出来したら直ぐに死刑だ」

ロベスピエールは書類を見ながらいつた。

「名前は此處にあつた。シムールダン市民、君がこれから全權を揮ふことになる相手の指揮官は元の子爵で、名はゴーヴァンていふんだ」

シムールダンは忽ち顔色を變へて、「ゴーヴァン！」と、叫んだ。

マラーは、シムールダンが顔色を變へたのを見逃さなかつた。

「ゴーヴァン子爵！」シムールダンはまた繰り返した。

「さうだ」ロベスピエールがいつた。

「それでどうだね？」と、マラーは、シムールダンを凝視めながらいつた。それからちよつと間を置いて、また口を切つた。「シムールダン市民、君自身で聲明した條件で、ゴーヴァン司令官附の特派代表の任を引受けるかね？ 確かに承知したね？」

「承知した」と、シムールダンは答へたが、顔色は益々青くなつた。

ロベスピエールは傍にあつたペンを取り上げ、上の方に「公安委員會」と刷り込んだ用紙に、ゆつくりした、几帳面な書體で四行の文字を書いて署名し、紙とペンをダントンに渡した。ダントンも署名した。シムールダンの青ざめた顔から眼を放さずにあつたマラーも、ダントンに續いて署名した。

ロベスピエールは再びその用紙を受取り、日附を記入してシムールダンの手に渡した。シムールダ

ンは讀んだ。

共和第二年

海岸警備隊所屬討伐隊司令官ゴーヴァン市民附公安委員會特派代表シムールダン市民に全權を賦與するものなり

ロベスピエール　ダントン　マラー

一七九三年六月二十八日

この日附が、三人の署名の次に書込んである。

民曆とも呼ばれる革命曆は、その當時はまだ公に用ひられてゐなかつた。革命曆は、ロンムの提案に基づき、一七九三年十月五日に至つて議會で採擇されたのである。

シムールダンがその辭令を讀んでゐる間、マラーはヂツとその顔を凝視してゐた。そして、獨語のやうに、低い聲でつぶやいた。

「これや、議會の議決か、公安委員會の特別命令で確認しなけりやなるまい。このまゝぢや、手續が缺けてゐる」

「シムールダン市民、君はどこに住んでゐるんだね？」と、ロベスピエールが訊いた。

「クール・デュ・コンメルスに」

「さうか、僕もそこなんだ。こりやお隣同志だつたんだね」と、ダントンのいつた。

ロベスピエールは言葉を續けて、

「一刻も猶豫は出来ない。明日は公安委員全部の署名した正式の全權委任状をお渡ししよう。これは、フィリポーやブリュール・ド・ラ・マルヌ、ルコアントル、アルキエその他の特派代理委員達に對して、特に君の權限を保障する證明書なんだ。僕等は、君がどんな人間だか知つてゐる。君の權限は無敵だ。君はゴーヴァンを將軍にすることも出来れば、斷頭臺にかけることも出来るのだ。明日の三時には、全權委任状をお渡しすることが出来やう。で、出發は何時にするかね？」

「四時に」と、シムールダンが答へた。

そして一同は別れた。マラーは家へ歸ると、妾のシモンヌ・エヴラールに、明日は議會へ行かなけりやならないと語つた。

第三篇 革命議會

一、革命議會

一の一

我々は今、威容堂々たる山嶺に近づいた。

あの革命議會の姿を見よ。この絶頂が現れたので、人々の眼には目標がはつきりとして來た。

人類の地平線上に、かつてこれほど高いものが現はれたことはなかつた。ヒマラヤ山は高い。けれどもそれにも勝るものは革命である。革命議會は、恐らく歴史の絶頂であらう。

革命議會の生存してゐる間は——議會も生命をもつてゐた、——はつきりその意義を擲んだ者はない。その當時の人にわからなかつたものは、議會の偉大さであつた。人々にはあまり驚いてゐたので感謝する餘裕がなかつたのだ。偉大なるものは、すべて神聖な恐怖を與へる。ありふれたものや、小さな山などを歎賞するのはやさしいことだ。しかし、人間の天才にせよ、自然の山岳にせよ、極度に高いものをあまり近くから見ると、いひ知れぬ驚愕に打たれるものだ。巨匠の傑作もさうだが、この革命議會も正にその通りである。恐ろしい程の高さは一種の誇張のやうに見える。それを禁じらうとすれば疲びれる。斷崖にかゝれば息が切れるし、急坂では足を踏み滑らし、本來は美しいものである斷り立つた岩山では、怪我をする。泡立つ激流は斷崖のあることを知らせ、雲は山の頂を隠してゐる。一足飛びに飛上るのは、急な降りと同じやうに恐ろしいものだ。だから、歎美の情よりも恐怖の感じの方が大きくなる。そして偉大なものを嫌ふといふ、一種不思議な感情が起つて来る。深い溪谷を見ても、壯大な美はどこへやら行つてしまふ。人はその怪異な姿を見て、眞の偉大さを味識しないのだ。革命議會も、最初のうちはさういふやうに見られてゐた。鴛の眼で見ると、眞の偉大さを味識は、あき盲目のために輕侮の眼で見られてゐたのだ。

今日では、その革命議會も遙か遠くに眺められる。そして眼路も遙かに澄み渡つた大空一面に、或る時は和やかに晴れ渡り、或る時は悲しみに曇つた蒼穹を背景として、佛蘭西革命の偉大なる輪廓を浮き出している。

一の一

七月十四日は解放した。

(譯註) バスチーユの陥落)

八月十日は打ち倒した。

(譯註) 王の幽閉と共に王政轉覆)

九月二十一日は建設した。

九月二十一日は秋分であり、平分の日である。天秤座といへば、秤のことである。ロムムの主張に従ひ、この平等と正義の象徴の下に、共和國は宣布されたのだ。一つの星座がその先驅をつとめたのであつた。

革命議會は、民衆の最初の化身であつた。そして、この議會とともに偉大なる新らしき頁は開かれ、今日といふ將來が始められたのだ。

どんな思想にも眼に見える姿が要る。どんな主義にも住居が必要だ。教會堂は四つの壁に圍まれた神である。どんな信條にも寺院が要る。革命議會が成立した時にも、最初に起つた問題は議院をどこにしようかといふ問題であつた。

最初はマノージュの乗馬學校が選ばれたが、間もなくチュイルリー王宮に移された。チュイルリー

王宮の窓枠は塗替へられ、裝飾が施される。壁にはダヴィッドの筆になる、浮彫りに似せた大きな鼠色の繪が掲げられ、均勢のとれた議席と四角な演壇が設けられる。その兩側には、斷頭臺に似た臺石の上に竝行した圓柱を立て、そこから眞直ぐな欄干が伸びてゐる。長方形の傍聽席は、民衆席と稱へられ、群集が詰めかけるやうになつてゐる。そこに古代羅馬劇場の日除けを張つたり、希臘風の敷物を敷いたりしてある議場は、この直角と直線の間に設けられた。この幾何線の中に、騒が捲き起らうといふわけである。演壇の上には革命の赤頭布が鼠色に畫いてあつた。王黨員はこの鼠色の赤頭布や、お體裁だけの議場、堅紙でつくつた記念碑、紙玉で拵へた聖殿、坭と唾でつくつた聖廟を嘲弄し始めた。こんなものはすぐにも消えて失くなりさうに思へた。柱は酒樽の板をぶつつけたものだし、天井は薄板張りで、浮彫りは壁土の細工だし、椅子やテーブルは杉である。像は石膏で、大理石は繪に描いたもの、壁といへば布を張つただけの頗るお粗末なものである。しかし佛蘭西は、かういふ假の宿から永遠の住居を作り出したのである。

議會がいよく蓋を開けた時、マノー・ジュの廣間の壁は、國王がヴァレンヌから連戻された當時巴里市内到る處に貼り出されたいろ／＼なポスターで埋まつてゐた。中には——「國王は歸る。國王を歡呼する者は笞打ち、國王を侮辱するものは絞殺すべし」といふのや、——「もうこれで平和だ。帽子を冠れ。彼は裁判の座に据ゑられるのだ」といふのや、——「王は國民を狙つた。彼は長い間發砲し續けた。今度は國民の番だ」といふのがあり、また——「法律だ、法律だ」といふのもあつた。

革命議會がルイ十六世を裁判したのは、かういふ壁の間であつた。

一七九三年の五月十日から議會が引越したチュイルリー王宮は、それ以來國民宮殿と呼ばれ、議場は、統一の間と改稱された時計の間と、自由の間と命名されたマルサンの間との廣間全體を占めてゐた。花の間は平等の間と改められた。議場へは、ジャン・ブエランの大階段を昇つて行くやうになつてゐた。議場に充てられた二階の下は全部打ち抜いた衛兵詰所になつてをり、議會を警衛する各種の兵科の衛兵の露營用寢臺や携帶品でこたく／＼してゐた。議會の衛兵は「議會の擲彈兵」といふ特別の名稱をもつてゐた。

三色章が、宮殿内の議會のある場所と、自由に民衆が出入り出来る庭園との境を區切つてゐた。

一の三

さて、議場の模様はどうであつたかを述べて見よう。この恐るべき場所には、一として興味を惹かぬものはなかつた。

議場に入つて眞先に眼につくのは、大きな二つの窓の間にある巨大な自由の像である。最初は國王の劇場であつたが、今は革命の劇場となつたこの廣間は、長さ八十二米、幅十米、高さ十一米といふ廣さである。この壯麗華美な廣間は、廷臣達のためにヴィクラニが建築したものであるが、九十三年には粗末な材木をぶつ／＼けて、民衆の重量を支へるやうに改造された。

一七九三年五月十日に議會が開かれたこの廣間の建築家は、巨大な抽出しをモデルに建築したものと見える。廣間は長く、高く、平べつたものであつた。そして並行四邊形の長邊の一邊に大きな半圓形がついてゐた。この圓戯場のやうな部分が議席であるが、そこにはテーブルも机もない。多くの著書を出したガラン・クローンは膝の上で書物をしてゐた。議席の前には演壇があり、演壇の前にはペルチエ・サンファルジョーの胸像が置かれ、演壇の後には議長席がある。胸像の頭が少々演壇の上に出てゐるといふので、像はそれから後他の場所に移された。

半圓形の中には、同じく半圓形をなした議席が十九並んでゐて、その端は議場の兩隅に達してゐた。演壇の下の馬蹄形の中には守衛が控へてゐる。演壇の片方の側には、壁に打ちつけた黒い木製の框の中に、高さ九尺からある揭示が張出してあるが、それは眞中を王笏のやうなもので仕切り、兩面に互つて人權宣言を書出したものである。もう一方の側にもそれと同じ揭示板が空のまゝで掛けてあつた。こつちの方には、後に革命第二年の憲法が掲げられが、眞中の仕切りも今度は劍の圖に變つてゐた。演壇の上、演説者の頭の上には、いつも満員續きの、奥行の深い二室打ち抜き傍聴席から殆んど水平に突き出てゐる三旒の大きな三色旗が翻つてゐる。この三色旗はいづれも一つの聖壇にたてゝあるのだが、その聖壇の上には「法律」といふ文字が書いてある。この聖壇の後には、丁度言論の自由の護衛兵のやうに、大圓柱のやうに見えるやうな古代羅馬の儀仗鉞束が立つてゐた。幾つもの大きな像が、議席の方を向いて壁際に並んでゐる。議長の右手にはリカルガス、左手にはソロンが立つてをり、過激派の頭の上にはプラトーンが立つてゐる。

でゐる。議長の右手にはリカルガス、左手にはソロンが立つてをり、過激派の頭の上にはプラトーンが立つてゐる。

長い蛇腹が廣間の中を一周して、民衆と議席との間を仕切つてゐたが、これ等の像は、その蛇腹の上に置かれた白木の臺に立つてゐた。傍聴人はその蛇腹に肘をつけるやうになつてゐた。

人權宣言の揭示の木の黒框は蛇腹の上までくつついてゐるので、規則正しい直線美を傷つけること夥しい。シャボはそれを指して「醜いね」と、ヴァデイエにさゝやいたものだ。

像の頭には、櫛の葉や桂の冠が載せてあつた。綠色の地に濃い緑で冠を描き出した掛布が、周りの蛇腹から重々しく垂れ下つて、議席のある地階の壁全部を掩うてゐる。この掛布のかゝつてゐない上の方は白壁で、露出になつてゐた。この壁の中に、形もとらずに巨大な斧で掘つたやうな、何の飾もない、二段の民衆傍聴席が作つてある。下段は四角で、上の壇は圓い。建築の法則に従つて、節迫縁は臺輪の上に置いてある。廣間の兩側には各々十づゝの傍聴席があり、その西端には大きな幾敷が二つ設けてあるから、都合二十四になる。民衆はその中にギッシリ詰めかけるのだ。議場は僅に二千人の人を容れることが出来た。騒擾のありさうな日などには三千人からも入つた。

議會の議事は晝と夜間の二回になつてゐた。

議長の椅子は背が圓く曲つて、金色の釘で留めてある。テーブルは、革命のお手傳ひをするために
黙示録からでも飛出して来たやうな、一本脚の羽の生えた四頭の獸で支へられてある。

議長のテーブルの上には、寺院の鐘でも勤まりさうな大きな振鈴と、これも大きな銅のインキ壺と、
羊皮の表紙の議事録が載せてある。このテーブルの上には、槍の先に突き刺した生々しい人間の首か
ら血が滴り落ちたことが幾度もあつた。

演壇に登る階段は九段になつてゐた。この階段は高くて急で、頗る登りにくい。

廣間の隅々は餘り露出しになつてゐるので、建築家は裝飾として古代羅馬の鉞束を、鉞の刃を民
衆の方に向けて据ゑて置いた。

演壇の左右には、高さ十二呎の燭臺が四角な臺の上に立つてゐて、各々四對の洋燈が點されて
ある。傍聴席の一つ一つにも、それと同じ燭臺が一基づつ置いてある。燭臺の臺には丸形が幾つも
彫つてあつたが、民衆はそれを「ギロチンの首飾」と呼んでゐた。

議席の腰掛は、後の方に行くに従つて殆んど傍聴席の蛇腹と擦れんゝになるほど高くなつてゐたの
で、議員と民衆は話をする事が出来た。

傍聴席の出口は暗い迷路のやうな廊下になつてゐて、よく物凄く喚き聲が起つた。

議會は宮殿を占領したばかりでなく、ロングヴェイルやコアニー等の近所の大邸宅にまで溢れ出し
た。ブラッドフォード卿の書簡がほんたうだとすると、八月十日の後、王室の家具を移した先はコ

アニー邸だつたといふことである。チュイルリー王宮を空にするには二箇月もかゝつた。

各種の委員會はいづれも議場の近くにあつた。平等の間には、立法、農業、商業の委員會があり、
自由の間には、海軍、植民、財政、法紙幣、公安の諸委員會があり、統一の間には陸軍委員會があ
つた。保安委員會は薄い廊下で公安委員會と直接に聯絡してゐた。この廊下には、夜でも晝でも反射
鏡ランプが一つ點されてあり、各黨の密偵が盛に往來してゐた。人々の話聲も、ここだけはみんなヒ
ソヒソ聲であつた。議會内の審問席は何度も位置を變へたが、大抵は議長席の右手になつてゐた。

この半圓形の議場の前面、直線の邊の兩端と壁の間には、二條の狭くて深い通路が作つてあり、そ
の突當りが各々暗い四角な扉になつてゐる。

議員連はフレイヤンの庭園に通ずる扉口から直接に議場に入出した。

議場は、深く引込んだ窓から光が入るだけで晝でも薄暗かつたが、夕方になつて暗いランプが點さ
れると、そこには異様な夜景が展開された。ランプの薄暗い光は一層夜の影を濃くし、ランプの下
の會議はいよゝ陰氣になつた。人の顔さへ見わけける事が出来ない。その中を議場のこつち側からあ
つち側へ、右から左へと、團つた一團の顔がお互に怒聲罵聲を交換してゐた。そんなわけで人と擦
れ違つたところで相手の顔などは殆どわかりつこない。

最後に、議長席の左右には二つの特別傍聴席があり、革命議會としては妙な話であるが、そこへは
特權をもつた傍聴人を入れることになつてゐた。そして、この席にだけは幕が下してあり、臺輪の眞

中に二つの金の房があつて、その緞帳を絞り上げてゐる。民衆の傍聴席には何にも掛けてたかつた。議場全体は一種獨特な野生的な感じを與へるが、しかもすべてが整然としてゐた。野蠻の中の齊整こそ、反つて革命の典型といふべきである。革命議會の議場は後世の建築家が「メッシドル建築」と稱する様式の完全な典型である。それはどつしりとしてゐるが、見かけによらず脆弱であつた。當時の建築家は、感違ひして均齊を美だと思つてゐたのだ。政治的空氣は抜きにして、たゞこの議場の建築を見たゞけでも、覺えず身氈ひをさせる何ものかゞ漂つてゐる。昔の華かな劇場時代に、美々しく飾り立てられた棧敷や、青と紫の天井、切子細工の燭臺、ダイヤモンドのやうに光まばゆい枝燭臺や、鳩色の壁、窓掛や掛布に描き出された美少年の姿のあでやかさ、その他數々の王室祕藏の繪畫や彫刻、置物までが、研を競うてきらびやかに、この薄暗い廣間を照してゐたさまを思ひ浮べながら、今眼の前に横はるその廣間を見渡せば、どの隅もどの隅も、鋼鐵のやうに冷く鋭い直角ばかりなのだ。

一の四

議事の様子を見た者は、議場のことなどは忘れてしまふ。劇に夢中になつてゐるものは、劇場の様子などは覺えてゐないのだ。この議場ほど混沌たる、しかも崇高なものはない。英雄の群と卑怯者の集團が相對し、鹿は山の上に、蛇は沼の中に陣取つてゐた。(譯註 過激派ジャコバン黨の議席は)

議場の一番左側の高い所にあるので山嶽黨の綽名あり、議場の中央最も低い議席を占めたのは最多數派であるが主義甚だ曖昧で、平原黨、或ひは腹黨、沼澤黨の異名あり、時には輕蔑して「沼の蛙」と呼ばれた。その議場の中で、今はみな亡き數に入つた闘士達が、罵り交し、肘つき合ひ、挑戦し、脅かし、争ひつゝ生きてゐたのである。巨人達の集りだ。

右方には思想家の集りであるジロンド黨員が席を占め、左側には剛の者の集り山嶽黨員が陣取つてゐる。ジロンド黨の席には、バスチーユ牢獄の鍵を受取つたブリッソ、地方で一番の精銳であるマルセーユ隊の司令官バルバルー、巴里のフオーブール、サン・マルソーに屯營してゐるブレスト大隊の司令官ケルヴェンガン、議會は各司令官に對して指揮權を持つことを規定したジャンソネ、或る夜チユイルリー王宮で皇后に眠つてゐる皇太子を見せられたといふ因縁のあるゴデー、このゴデーはその時皇太子の額に接吻したが、後には王の首を刎ねさせた人物である。それから、山嶽黨が奧太利と通じてゐると誣告した頭の變なサール、左黨に覺のクートンあるに對して右黨には跛者のシレリーあり、或新聞記者に惡漢呼ばゝりをされて、「君が惡漢といふのは、たゞ君と意見を異にする人間といふことなんだね」といつて、その記者を午餐に招待したローズ・デュブレがある。一七九〇年史を編纂して、その冒頭に、「革命は終つた」と書いたラボー・サンテチエヌヌ、ルイ十六世を仆した一人であるキネット、僧族民法を起草し、パリー助祭の奇蹟を信じ、寢室の壁に釘づけにした高さ七

吠のキリストの像の前に毎朝跪いたジャンゼニウス派の僧侶カミーユ、カミーユ・デムーランと共に七月十四日（譯註　バスチーユ牢獄の攻落）を行つた僧侶フォーシエ、ブルンスウィックが「巴里は焼けてしまふだらう」といつてゐる時、「巴里は破壊されるだらう」といつて罪に問はれたイスナール、眞先に「俺は無神論者だ」といつて、ロベスピエールに「無神論は貴族的だ」とやりこめられたジャコブ・デュボン、嚴格で分別があつて、勇猛果敢なブルターニユ人のランジュイネー、ポアイエフォンフレードの一派のデユコス、バルバルーの友人のルベッキ、このルベッキが辭職したのは、ロベスピエールがまだギロチンにかけられなかつたからである。議會委員會の常置に反對したりシヨト、「感謝する國民は禍たる哉」といふ亂暴な格言を飛ばし、後に斷頭臺の下に立つては、「我々は民衆が眠つてゐるから死ぬのだ、君達は民衆が眼ざめたために死ぬだらう」と前とは矛盾した、高飛車な冷罵をモンターニユ黨員に浴びせかけたラスールス、議員の身體の不可侵權廢止を決議させたピロトーは、そこまでは氣がつかかなかつたが、いはゞ斧を作る鍛冶職のやうなもので、とう／＼自分のための斷頭臺を作る結果になつてしまつた。「劍の下で投票はしない」と抗議して、良心を護り通したシャール・ヴィエツト、「フオーブラス」の著者で、ロドイスカを帳場に据ゑ、パレー・ロワイヤルの本屋で終つたルーヴェ、「巴里圖繪」の著者で、「一月二十一日、世界のあらゆる王は頸の後を擦つて見た」と叫んだメルシエ、「舊勢力の謀叛」を憂慮してゐたマレック、斷頭臺の下で斷首役の男に、「死ぬのは残念だなあ、俺はこの續きが見たかつたよ」といつた新聞記者のカラ・メイエンヌ。

エ・ロアール第二大隊の擲弾兵だと稱するヴィジエーは、傍聴席から脅かされて、「傍聴席で愚圖々々いふなら、一同議場を引揚げ、劍を手にしてヴェルサイエへ押掛けることを提議する」と叫んだ。飢渴の裡に窮死したビュゾ、我と我が短刀で命を絶つべき運命に置かれたヴァラゼ、股肱とたのむオラス等に裏切られ、今はブール・エガリテと呼ばれてゐるブール・ラ・レーヌで死んだコンドルセ、一七九二年には民衆に禮讃され、一七九四年には狼に喰はれるといふ星をもつた巴里市長のペチオン、その他に黨員二十名、首領として、ヴェルニヨールといふバルナーヴのやうな人物が控へてゐた。この一派に對する山嶽黨の席には、アントアン・ルイ、レオン、フロレル・ド・サン・ジュストがある。サン・ジュストは顔色蒼白で、額は狭く、端麗な容貌に神祕的な眼を輝かせ、深い憂悶を浮べてゐる年齒僅かに二十三の青年であつた。ルラン・ド・チオンヴィルは獨逸人に「熱火の惡魔」と呼ばれる人、メルラン・ド・ドゥーエーは罪の深い嫌疑者取締法の起草者であつた。スーブラニーは五月二十日に巴里市民によつて將軍に推された。元僧侶のルボンが聖水を撒いた其手に劍を握つた。ピヨール・ヴァレンヌは裁判官とか調停者等のない、將來の政府を豫想してゐた。文士のファールデ克蘭チーヌは、ルージェ・ド・リルが「ラ・マルセイユーズ」といふ無二の崇高な靈感を得たやうに、共和暦といふ思ひ設けぬ愉快な幸福にぶつつかつた。その後どんな人が現れても、まだその右に出るものを作つた例はない。マニユエルはコンミュニンの檢事で、「國王が死んでも人間一人減つたのではない」といつた。ゲージョンはトリプシユタットやノイシユタット、シユピールに侵入して

普魯西軍の敗走を眼のあたりに見た。ラクロアは辯護士から武將に轉じ、八月十日の六日前にサン・ルイ爵士を授けられた。フレロン・テルジートはフレロン・ゾイルの息子であり、リコールは鐵の壓搾機のやうな頑固屋で偉大な共和國の自殺のお先棒を擔いでゐた。彼は共和國の倒れたと同じ日に自殺せねばならなかつたのだ。フーシェは惡魔の魂をもち死人の顔をした男、カンブーラスはギロチン(譯註 斷頭臺の發明者)に對つて「お前はフアイヤン黨員だが、お前の娘はジャコバン黨員だ！」といつたベール・デュシェーヌの友人である。ジャゴは囚人が着物がなく困つてゐると訴へて來た者に、「牢屋は石の着物ぢやないか」と放言した。ジャヴオーグはサンドニの墓を發した恐ろしい男、オウストランは追放の刑に處せられた男で、以前シャリー夫人といふ追放犯を自分の家に匿つてゐた。ベントボルは、議長席に就いてゐる時、拍手したらいゝか罵倒したらいゝかを傍聴席の方に合圖した。ロベールは新聞記者で、「ロベスピエールもマラーもわたしの家には見えない。ロベスピエールは來た時には來るかも知れないが、マラーは決して來ないだらう」と書いたケラリオ嬢の夫である。ガラソン・クローンは、西班牙がルイ十六世の裁判に干渉して來たに對し、議會は國王から國王のために送られた手紙などの朗讀を許してはいけなと、昂然として主張した。グレゴアールは僧侶で最初は田舎の寺院で相當勢力をもつてゐたが、帝政時代になつてからグレゴアール伯となり、共和黨を脱した。アマールは、「地球全體がルイ十六世の有罪を宣告してゐる。然らば誰に控訴したらいゝか?」他の遊星にか?」といつた人、ルイイエは一月二十一日、「王の首が落ちる時だつて、他の人間の首が落ち

る時より大きな音を立てゝはたらかない」といつて、ボン・ヌーフの砲撃に反對した。アンドレの兄弟のシエニエ、演壇の上にピストルを並べる仲間の一人ヴァディエ・タニスがモモロに、「マラーとロベスピエールが俺の家のテーブルで抱合つて呉れゝばいゝがなあ」といふと、モモロは「お前はどこに住んでゐるんだい?」「シャラントンさ」「そんな場所でもなけりや、それこそ此方が吃驚するよ」と、モモロがいつた。ルジャンドルは、英吉利の革命家中にも肉屋プライドがあつたやうに、佛蘭西革命に於ける屠殺業者であつた。ルジャンドルが「來いっ! 叩きのめしてやるから」とランジュイネーに怒鳴りつけたら、ランジュイネーは竹箆返しに、「俺が牛だといふことを決議させてからにしろ!」とやつた。コロ・デルポアは贊成と反對を使い分ける二つの口の古風な面を冠つたやうな顔をした、陰鬱な喜劇役者で、片方の口で贊成して置いて、もう一方の口では平氣で惡口をいつてゐる。ナントではカリエに汚名をきせ、リオンではシャリエを神のやりに崇め、ロベスピエールを斷頭臺へ送つた。マラーを聖廟パンテオンに葬つたりした人物である。ジェニッシュューは「殉教のルイ十六世」の像牌を所持する者を悉く死刑に處すべしと主張した。レオナルド・ブルドンは小學校の校長で、自分の邸をモン・ジュラの老人達に提供した。トブサンは水夫上りで、グーピョーは辯護士、ロラン・ルコアンドルは商人、デュアスは醫者、セルジャンは彫刻師、ダヴィッドは古典派畫家、ジョゼフ・エガリテは元公爵である。その他にもまだある。ルコアント・ピユイラヴォーはマラーが狂人だといふことを決議せよと主張し、ロベール・ランデは、頭が公安委員會で、革命委員會と呼ぶ二

萬一千本の足で全佛蘭西に吸ひついた厄介な大蝟の創造者であつた。ルブーフについては、ジレ・デュブレが、その詩「以而非愛國者のクリスマス」の中に次の一句を挿んでゐる。

ルブーフはルジャンドルを見てモーと啼いた（譯註　ルブーフは牛に通ずる）

米國人トマス・ペーンはおとなしい人物である。アナシャルシス・クルーツは獨逸人の男爵で、百萬長者で、無神論者で、エペール黨員で、開放的な人であつた。清廉なルバはデュブレの友人、ロヴェールは藝術を愛するがための藝術が人の想像以上に存在するやうに、悪のために敢て悪をなすといふ不可思議な人物の一人である。シャルリエは貴族を呼ぶのに普通の「あなた」を用ひることゝしたいと主張した。タリアンは悲憤慷慨家で、性狂暴、遂に自分の好みからテルミドル九日を演ずる男である。カンバセーは検事で、後に公爵となる。カリエも検事で、後に虎と恐れられた人、ラプランシユは、それから後の或日のこと「警砲の優先を主張する」と叫んだ人、チュリオは革命裁判所の陪審官の決議を口頭ですることを主張した。オアーズ縣のブルドンはシャンボンに決闘を申し込み、ペーンを弾劾して、遂には自分がエペールに弾劾された。ファイヨはヴァンデーへ「放火隊を派遣すること」を主張した。タヴォーは四月十三日（譯註　一七九三年議會マラーを革命裁判所の公判に附する決議をなす）には、ジロンド黨とモンターニュ黨の仲裁者のやうな役をつとめた。ヴェルニエは、ジロンド黨の領袖もモンターニュ黨の領袖も普通の兵士として出征すべきことを主張した。リュールはマイヤンスへ隠退した。ブルポットはソーミュール占領の時に愛馬を乗り潰した人、

ガンベルトーはシエルプール海岸警備隊の指揮にあたり、ジャール・パンヴィリエはラ・ロシエルの海岸警備隊を指揮し、ルカルパンチエはカンカール艦隊の司令官であつた。ロベルジョは既にラシタットの伏兵に待伏をかけられてゐた。プリユール・ド・ラ・マルヌは、軍隊の中ではもとの階級である騎兵中隊長の肩章をつけてゐた。ルヴァツサール・ド・ラ・サルトは、たつた一言の命令でサンタマシオン大隊長のセラランに自殺する決心をさせた。その外、ルヴェルシオンや、モトル、ベルナール・ド・サント、シャルル・リシャルヤルキニオがあり、この一黨の首領として、ミラポーともいふべきダントンが控へてゐた。

この二派の外に立つて、その何れをも畏怖せしむるものにロベスピエールなる人物があつた。

一の五

下段の方には、貴いものであるかも知れない狼狽や、卑しむべき恐怖が蹲まつてゐた。熱情の下に、英雄氣質の下に、獻身的奮闘の下に、憤激の下には無名の人々の陰鬱な一團があつた。議場の底部は平野と呼ばれてゐる。そこに集つた人々はどれもこれもふわ／＼してゐた。或ひは疑深い者や、躊躇らふ者、尻込みする者や、延期する者、機を待つ者など、しかも誰でもが誰かを恐れてゐた。モンターニュ黨は選り抜きの集團であるが、平原黨は有象無象の群集であつた。平原黨はシーエス一人に要約し、壓縮することが出来る。シーエスは元來深慮の男であつたが、その時は既に一個の妄想家にな

つてゐた。彼は庶民階級に止まつて、思切つて民衆になり切ることが出来なかつた。人間の中には、絶えずどつちつかずの態度をとるものが相當にある。シーエスはロベスピエールを虎と呼んだが、ロベスピエールは彼を土龍と呼んでゐた。この哲學者は分別ではなくて、警戒心の上に乗上げてしまつた。彼は革命に於ける廷臣とでもいふべき人物で、眞の革命の下僕ではない。シャン・ド・マルスでは民衆と共にシャベルを持つて働き、またアレキサンドル・ド・ボーアルネーとも同車する人物であつた。他人には勇氣を鼓舞したが、自分ではそれを示したことがない。彼はジロンド黨員に、「君達の側に大砲を据ゑろ」といつてゐた。中には鬭争的な思想家連もあつた。コンドルセのやうにヴェルニヨールの許に走つたり、カミーユ・デムーランのやうにダントンと行動を共にしたやうな人々がその一派で、たゞ生き永らへることが目的の思想家連はみなシーエスに従つてゐた。

一番よく使はれる葡萄酒樽にも渣滓はある。「平野」のまたその下には「沼」がある。醜惡な水溜りで、淺ましい利己主義の見えすく場所であつた。そこには、戦々競々たる連中が沈黙の期待を抱きながら戦つてゐた。これほど卑しいものがまたとあらうか。あらゆる悪事を行つて、恬として恥ぢず、怒を抑制し、服従の裏に反抗を潜めてゐる。彼等は犬のやうに恐れ、卑怯者の棄鉢氣分を遺憾なく發揮した。或ひはジロンド黨につき、反對にモンターニュ黨に味方したりして、最後の大變局を齎したのは彼等である。彼等は常に旗色のいゝ方の肩を持つた。彼等はルイ十六世をヴェルニヨールに引渡し、ヴェルニヨールをダントンに、ダントンをロベスピエールに、そして遂にロベスピエールをタリ

ヤンに引渡した。彼等はマラーが生きてゐる間は罪人扱ひにして、死んだ後には神様扱ひにした。彼等は誰かを押立て、機會到來と見るや直ちにそれを打倒した。彼等はどんなものでもよろめいてさへゐれば、それに最後の一笑を呉れる本能を持つてゐた。彼等は基礎が鞏固だといふ條件の下に働くことを常としてゐたので、動揺するものは、彼等の眼には裏切者のやうに映つたのである。彼等は多數であつた、従つて一大勢力を成してゐた。しかも彼等は恐怖の塊であつた。奸佞邪智な無道を敢てしたのは、さういふ性質からである。

五月三十一日(譯註) 一七九三年ジャコバン黨がジロンド黨を壊滅させたクーデターの第一日)や萌芽の月十一日(譯註) 翌年三月三十一日、ロベスピエールがダントンとその黨員を捕縛した日)やロベスピエールが仆された炎熱の月九日などが起つたのはそこからである。それこそ巨人達が綱ひ合せて、小人共がバラ／＼にした悲劇であつた。

一の六

かういふ情熱家の群の間に、夢想家も澤山混つてゐた。そこにはあらゆる形をしたユトピアがあつた。斷頭臺をも認める鬭争的なユトピアや、死刑の廢止を主張する温和なユトピアもある。それは王室に對つては亡靈の如く、民衆に顔を向ければ天使の如き姿をしてゐた。鬭争に没頭する人々と並んで、思案に耽つてゐる人達もある。或る者は戦争のことを考へ、或る者は平和を頭に描いてゐ

た。カルノは十四部隊の軍隊を編成した。ジャン・デブリは世界民主聯盟の組織を夢想してゐた。この激越な雄辯や罵聲叫喚の渦の中にも、意義ある沈黙があつた。ラカナルは一度も發言せず、ゐたが、その間に國民教育制度を立案した。藝術家も、雄辯家も、豫言者も、ダントンのやうな巨人も、クルーツのやうな小人も、劍客も、哲學者も、すべてが進歩といふ同一の目標に向つて進んだ。何も彼等の進行を妨げるものはなかつた。革命議會の偉大さは、人が不可能と呼んでゐるもの、中にどれだけの現實を擱み得たかといふところにある。一方の端にはロベスピエールが控へて、デットと權利を見据えてゐた。もう一方の端には、コンドルセが義務を見守つてゐた。

コンドルセは明敏な幻想の人であつた。ロベスピエールは實行の人であつた。そして、舊社會の斷末魔の危機には、その實行は往々にして殺戮といふことと選ぶところがなかつた。革命には、上りと下りの二つの斜面がある。そして、この斜面には、氷の結ぶ嚴寒から蕾の開く陽春まで、四季とどりの段階がある。その斜面の各地帯は、太陽の中に生きる人から雷鳴の間に住む人まで、それと氣候に適する人物を創り出すものである。

一の七

左手の廊下の凹んだ場所は、ロベスピエールが、クラヴィエールの友人のガラノ耳許で、「クラヴィエールは呼吸する度に陰謀を企てゝゐる」といふ恐ろしい警句をささやいた場所で、民衆はよくそ

こを指し合つたものだ。そこはヒソヒソと話や人を避けて内密話をするのに誂へ向な場所、共和曆の命名者ファール・デクランチヌがロナムと喧嘩して、彼が曆の十一月フェルヴァイドールをテルミドール（譯註 いづれも炎熱の月の意）と改竄した事を詰つた。また或る角の席には、オート・ガロンヌ縣選出の七人の代議士が肘つき合せて居並び、眞先にルイ十六世の判決を問はれて、七人が七人順々に「死刑」と宣告した。すべての歴史に充ち満ちてゐるこの久遠の餘韻、そして人類の正義が樹てられて此方、常に裁判所の壁に墓場の反響を瀾したその餘韻。民衆は、その恐ろしい形相をした人々の中で、この哀しい言葉を吐出した人達を一人残らず指してゐた。パガネルは「死刑、王は死んでこそ初めて役に立つんだ」といつた。ミヨは「もし死刑といふものがなかつたとしたら、今日こそこれを發明しなければならぬ」といつた。ラフロン・デュ・ツルイエは「即時死刑」を主張した。グーピヨは「直ぐに斷頭臺へ。愚圖々々してゐると死刑が一層重くなる」と叫んだ。シーエスは唯一言、はつきりと「死刑」といつた。チュリオは、ピュヅの提案した民衆に訴へるといふ案を排して、「なに！ 第一院としてだつて？ なに！ 四萬四千の裁判所だつて？ そんなことをしてちや、事件はいつまで経つたつてきりがつかない。ルイ十六世の首は、落ちる前に白髪になつちまふだらう」と叫んだ。オーギュスタン・ボン・ロベスピエールは、兄に續いて叫んだ。「民衆の首を斬り、暴君を助ける人道といふものは聞いたことがない。死刑だ！ 再審を要求することは、民衆の裁判に訴へる代りに暴君共の裁判を受けることになるんだ」。フースドアールはベルナルダン・ド・

サン・ピエールの亞流で、「余は人間の血を流すことは嫌ひだ。しかし、王の血は人間の血ではない。死刑だ」と叫んだ。ジャン・ボン・サン・タンドレは「暴君が死ななければ、自由な民衆はあり得ない」といつた。ラヴィエントリは「暴君が呼吸してゐる間は、自由は窒息してゐる。死刑」といふ名言を吐いた。シャトー・ランドンは「最後のルイに死を與へろ」と叫んだ。ギユアルダン「倒れた柵を處刑しろ」といつた。倒れた柵とは玉座の柵のことである。テリエは「ルイ十六世の頭と同じ口径の大砲を鑄て、敵に打放せ」といつた。それから少し穩健な人々の中では、ジャンチは「本員は幽閉を主張する。チャールス一世をつくることはクロムウエルをつくることだ」といつた。パンカルは「追放だ。世界に冠たる國王が、命をつなぐために働く恰好を見たいものだ」といつた。アルブーイスは「流島だ。この生きた亡靈に、方々の國の玉座のまはりをさまよひ歩かせるといふ」といつた。ザンジャコミは「監禁だ。カベ（譯註）ルイ十六世を呼葉にした名）を生きたまゝ、采山子にしてとつて置かう」といつた。シャイヨンは「生かして置かう。羅馬が聖徒に祭上げるやうな死人はつくりたくない」といつた。かういふ判決が兇暴な口から叫び出され、次から次と歴史に刻まれて行つてゐる時、議員名簿を手にし、デコルテを著て寶石で飾り立てた傍聴席の婦人達は、一々その聲を勘定してピンでしるしをつけてゐた。

悲劇の起つた後には恐怖と憐愍が残るものである。革命議會は、そのある間いつ見ても、カベ王朝最後の王の裁判をまさしくと眼に浮ばせた。一月二

十一日の物語（譯註）一七九三年ルイ十六世の死刑執行は議會の總ての行動に絡みついてゐたやうに見える。この恐るべき議會には、十八世紀間に互つて點り續けた由緒深い王政の炬火を吹塵かせ、遂に吹き消した宿命的な息が充ち満ちてゐた。一國王に對する判決によつて、全世界の王を裁いた決定的審判は、過去に對する一大戦争の出發點のやうなものであつた。革命議會の何な會議を見ても、ルイ十六世の斷頭臺の影が歴然と映つてゐた。傍聴人達は、ケルサンや、ローラン、デュシャテル等の辭職の噂をし合つてゐた。セーヴル第二區選出のデヤシャテルは重態で寢臺の儘擔ぎ込まれ、自分が死にさうになつてゐるのに王の死刑には反對を聲明した。マラーはその様子を笑つたものだ。それからまた、歴史には傳はつてゐないが、三十七時間ぶつ續けの議事で疲勞困憊その極に達し、議席に引繰返つた儘寢込んでゐたが、票決の番が來て守衛に起され、眼も判然開けずに「死刑」と一言いつて、また昏々と眼に落ちた議員があつたが、それは一體誰だらうと、傍聴人達は頻りに物色したりしたものだ。ルイ十六世が死刑の宣告を受けたその瞬間からは、ロベスピエールは十八ヶ月の命しかなくつた。ダントンは十ヶ月、ヴェルニヨールは九ヶ月、マラーは五ヶ月と三週間、ルベルチエに至つては僅か一日の命しかなくつたのだ。あゝ何といふ慌だしい恐ろしい人間の息であつたらう！

民衆は議場に對つて開いた窓をもつてゐた。公衆傍聴席がそれである。しかし、窓で足りない時に

は扉を開いて、町中が議場へ押入つた。群集がこんな風に議會へ侵入したことは、史上最も稀有な事件の一つである。この侵入も普通の場合には穩かであつた。市場のやうな席に雜然としてゐる民衆は、議席に納つてゐる議員連と親しかつた。しかしこの民衆の示した親しさといふものは、底の知れぬ恐るべきものであつた。彼等は或る日、僅か三時間の中に、老兵院の大砲を奪ひ、更に四萬挺の銃を奪つたといふ恐ろしい勢力だからである。時を選ばず町の群集が入つて来ては議事を妨害した。それは、清願や、表彰や、贈物の代表連中である。貧民窟の女達か、オーブール・サン・ダントアンヌの名譽の槍を擔ぎ込んで来る。或る英國人からは、兵士が素足であるといふのに同情して二萬足の靴を送つて来る。巴里各區の代表者達は、澤山の皿や、聖體を置く金屬祭皿、聖餐杯や、金銀塊、瑛器などを、手押車で搬び込んで貧民から國家への贈物となし、その代償として議會の前でカルマニヨル踊を踊る許可を願ひ出た。シュナールとナルボンヌとヴァリエールは、山嶽黨の頌詩を歌ひに來た。モンブラン區からはルベルチエの胸像を持つて來たが、或る女は自分に接吻した議長の頭に赤頭布を冠せた。「マイユ區の女市民連」は「立法者達」に花をふりかけた。「國家の學徒」等は音樂隊を先頭に立て、「世紀の隆昌の基礎を定めた」議會に感謝するために繰込んだ。ガルド・フランセーズの婦人達は薔薇を贈つた。ジャン・ゼリゼー區の婦人達は櫛の葉の冠を贈つた。タンブル區の婦人達は、「本當の共和主義者とのみ提携すること」を誓ふためにやつて來た。モリエール區からは、米國の獨立戰爭に佛蘭西人の援助を求めに來たフランクリンのメダルを贈つた。議會は決議によつて、これを自由

の像の冠に掛けることにした。棄兒は共和國の子と名づけられ、制服を着て行列して歩いた。九十二年區の若い娘達は長い純白の衣裳をつけて來場した。翌日のモニター紙は「議長は、若い美人の淨らかな手から花束を受取つた」と報じた。演説者は民衆に挨拶した。時には民衆の氣嫌を取つたりした。或る者は民衆に對つて、「民衆よ、諸君は不撓不屈の勇氣を持ち、諸君は非の打ちどころがなく、諸君は實に崇高だ」と賞めちぎつた。民衆には子供らしい一面があるので、かうした甘い言葉がお氣に召した。時としては暴徒が議場に雪崩れ込んだこともあつた。そして入つて來る時はどんなに狂暴でも、常におとなしくなつて歸つて行く。丁度、レマン湖に注ぐローヌ河のやうに、入る時は泥水でも、流れ出る時は澄みきつた藍色になつてゐた。しかし時には餘り穩かでないこともあつた。アンリオなどは、ピストルを携帯してチュイルリー王宮の門をくぐらねばならぬこともあつた。

一の九

この議會は革命を担つち上げたと同時に、文明を創り出した。恐怖の發酵してゐるこの穴倉の中で、進歩が芽生えてゐたのだ。この混沌たる陰影の交錯と、騒々しい雲の飛び交ひを貫いて、永遠の法則に副つた偉大な陽光が差し始めた。この光線は地平線にかゝつて、永久に民衆の空に光茫を放つてゐる。その一つは正義、一つは寛容、一つは善意、一つは理性、一つは眞理、一つは愛であつ

た。革命議會は「各市民の自由は他の人民の自由の始まる所で終る」といふ大原則を公布した。これは僅か二行を以て人間社會のあらゆる法則をいひ表はしたものである。議會は貧窮を神聖なものと宣言した。盲人や聾啞者に國家の保護を與へて、不具者を神聖なものとした。私生兒を生んだ母を慰め助けて、母性を神聖なものとし、孤兒を國家で引取ることにして幼兒の神聖を宣し、無罪放免となつた嫌疑者に補償を與へて冤罪者を神聖なものとした。議會はまた黒奴賣買を禁止し、奴隷を廢止した。市民の連帶主義を宣言した。巴里に師範學校を設立し、各主要都市に中央學校を置き、市町村には小學校を設けて、國民教育の制度を樹てた。音樂學校を設け、博物館を建てる。法典の統一、度量衡の統一、十進法に基づく算數の統一を行つた。佛蘭西財政を建て直し、永年に亙る王朝の破産状態の後に國家的信用を築き上げ、電信の制度を創め、老人のためには養老院を設け、病人のためには清潔な病院を建て、教育の方面では工科大學を、科學の方面では緯度觀測所を、人智の啓發のためには學士院を設立した。これ等の事業は國家的事業であると同時に、世界的事業でもある。革命議會の一萬一千二百十個の決議の中、三分の一は政治上の目的を有するもので、三分の二は人道的な目的を持つたものである。議會はまた社會の根幹である普遍的道德と、法律の基調である普遍的良心とを宣言した。かくして議會は、奴隷制度の廢止や、友愛の宣言、人道的保護制度や、人類の良心の矯正、勞働を權利に變へ、厄介なものを名譽なものに轉じた法律、國富の累積、兒童の教育や保護の制度、文學や科學の普及、到る處の高みに新設した街燈、すべての苦しめる者に對する補助、あらゆる原則の公

布を成し就げた。しかも議會は、腹中にヴァンデーといふ九頭の怪物を藏し、肩には諸國の王といふ猛虎の群を擔ひながら、これ等すべての偉業を果したのであつた。

一の十

人々の魂は風のまにまに弄ばれる。

しかし、この風は奇蹟のやうな力をもつた風であつた。これは最も偉大な議員達革命議會の議員となることは、大洋の中の一つの波になることであつた。これは最も偉大な議員達についてさへ、同様にいひ得ることだ。衝動の力は遙か高い所から生じてゐる。議會には全體の意志でありながら、個々に見れば何人のものでない意志があつた。この意志は一個の思想である。この思想は、不撓不屈廣大無邊なもので、天の頂から下界の暗の中まで吹渡つてゐた。我々はそれを革命と呼ぶ。この思想の過ぐる所、必ず或る者を倒し、他の者を起たしめた。或る人間を泡沫の如く散らしてしまふかと思ふと、或る者を巨岩の上に叩きつけた。この思想は自分の行先を心得てゐて、渦卷をその前に押し進んで行くのだ。革命を人の力に歸するのは、潮流を波の力に歸するに等しい。

革命は「知られざる力」の一つである。それを善となすか悪と呼ぶかは、未來に撞撞するか過去に執着するかに従つて、人の勝手に定めるところであるが、その成果は革命そのものを煮き起した力に

歸すべきである。革命は大きな事件と偉大な人物が一緒にやつた共同事業のやうに見えるが、實際は、たゞ事業の結果に過ぎないのだ。事件が起つて、人間が苦しむ。事件が口授して、人間が署名するのだ。しかし、デムーランも、ダントンも、マラーも、グレゴアールも、ロベスピエールも、みな單なる筆耕に過ぎなかつた。この偉大な數頁を書下した神祕的な大作者は、その名は神といひ、運命といふ假面をつけてゐた。ロベスピエールは神を信じてゐた。正しくさうだ！
革命はあらゆる方面から人間に押し迫つて来る永久的現象の一形式であつて、我々はそれを「必然」と名づける。

一の十一

この巨大な革命議會は大體かういふものであつた。一時にあらゆる暗闇の力に襲はれて、人類から切離された陣營であり、包圍された「理想」の軍勢の篝火であり、斷崖の絶端に起つ理性の大野營地であつた。この一團の人々に比すべきものは、史上どこを探してもまたとない。一國の元老であると同時に民衆であり、祕密會議であると同時に四つ角の集りであり、最高法院であると同時に民衆の廣場であり、裁判所である一方被告でもあつた。

革命議會はいつでも風に靡いた。しかし、この風は民衆の口から出た神の息吹である。そして、八十年も経つた今日、何人かの脳裡にこの革命議會が浮かんで来る時、それが歴史家であ

ると哲學者であるとを問はず、どんな人間でも、みな靜かに默想に耽るのである。この偉大な幻影の過ぎて行つた跡を、誰でも感慨深く見守らずにはゐられないのであらう。

二、樂屋でのマラー

マラーは、妾のシモンヌ・エヴラールにいつて置いた通り、デユ・パン町の會議の翌朝は議會に出掛けて行つた。

議會にはルイ・ド・モントーといふマラー派の侯爵がゐた。これは後にマラーの胸像を飾つた十日捲き時計を議會へ贈つた人である。

マラーが入つて来た時、ちやうどシャボがド・モントーのはうに近寄つて行つて、なにか話してゐた。

マラーは左手の廊下で立止つて、モントーとシャボの様子を見てゐた。

マラーが議場に入つて来るごとに、そこちちに私語が起つた。しかしそれは遠くの方でのことで、周囲の人々はみんな黙つてゐた。マラーはそんなことは少しも氣に留めない。彼は「沼のざわめき」と輕蔑してゐたのだ。

下段の方のうす暗い議席では、オアーズ縣のコンベ・ド・ロアーズや、プリユネル僧正で後に佛蘭西翰林院の會員になつたヴィラール、ブートルー、プチ、ブレイシャール、ボネ、チボードー、ダ

アドリユーシユなどが、交るべくマラーを指してゐる。

「おい！ マラーだよ！」。「それぢや、病氣ぢやないんだね？」。「いや、部屋着であるから、病氣らしいね。」。「部屋着だつて！」。「さうとも！」。「奴はなんでも勝手なことをしやがるんだな。」。「あんな恰好して、よくも議會に出て來られるな。」。「桂の冠を冠つて來たことさへあるんだから、部屋着ぐらゐは平氣だらうさ！」。「銅色の顔に、青黒い齒をしてるな。」。「奴の部屋着は新しいやうだね。」。「物はなんだらう？」。「レプス織だよ。」。「縞がついてるな。」。「裏を見ろよ。」。「皮だね。」。「虎だね。」。「いゝや、貂だよ。」。「人造さ。」。「それに靴下をはいてるね！」。「それは珍らしいな。」。「留金のついた靴も。」。「銀の留金だ！」。「カンブラスの木靴ぢや、あんな眞似は出來ないな。」

他の議席ではマラーを見ぬ振して、全然關係のないことを話し合つてゐる。

丁度バレールが報告を朗讀してゐるところであつた。それはヴァンデーに關する報告である。モルビアン麾下の軍九百名は、ナント救援のために大砲を携へて出發した。ルドンは百姓軍に脅かされてゐる。パンブーフは攻撃を受けた。マンドラン附近には、敵軍の上陸を防ぐために艦隊が巡航してゐる。アングランドからモールに至るまでの、ロアール河岸一帯には王黨の大砲が据ゑつけられてゐる。三千人の百姓がボルニツクを占領した。彼等は「英吉利人萬歳！」と叫んだ。バレールは議會に宛てたサンテルの手紙を朗讀したが、その最後はかう結んであつた。「七千人の百姓がヴァンヌを襲つた。我軍はこれを撃退した。敵の委棄せるものは、大砲四門……」

「捕虜は何人だい？」と、誰かの聲が遮つた。

バレールは續けた、——「手紙の追つて書、捕虜は作らないことにしてゐるから、一人もない」

マラーは身動きもせず立つてゐたが、聞いてはゐなかつた。何かひどく氣がゝりなことでもあるやうな様子だ。

彼は手に一枚の紙片を持つてゐたが、いつの間にか指の間でもみくちやにしてしまつた。開いて見ればわかるが、それはモモロの筆蹟で、マラーの質問に對する返事らしかつた。その文面はかうである。

「派遣代表、就中公安委員會の代表の絶大な勢力に對しては全然手も足も出ない。ジュニツシユは五月六日の議會で「各代表は王以上のものだ」といつたが、何の効果もなかつた。

彼等は生殺與奪の權力を持つてゐる。アンジェールのマッサードや、サン・タマンのトリユラー、マルセ將軍附のニオン、サーブル軍附のパラン、ニオール軍附のリエール、彼等は全能者だ。ジャコバン俱樂部は遂にパランを少將に任命した。現在の狀況が、あらゆる行為の口實に使はれてゐる。公安委員會の派遣代表は總司令官の自由を拘束してゐる」

マラーはもみくちやの紙を丸めてポケットに入れ、ゆつくり／＼モントーとシャボのゐる所へ近づいて行つた。二人は話を續けてゐたので、マラーの來たのに氣がつかなかつた。

シャボがいつてゐる。「まあ聞けよ、俺は今、公安委員會から出て來たばかりなんだがね」

「何をやつてみたかね」

「貴族を僧侶に番させるといふわけだ」

「えつ！」

「お前のやうな貴族を……」

「俺は貴族ぢやないつたら」と、モントーが遮つた。

「一人の僧侶に番をさせるんだ……」

「お前のやうな」

「俺は僧侶ぢやないよ」と、シャボがいつた。二人は思はず笑ひ出した。

「その話を、もつとはつきりやつて呉れないか」と、モントーがいひ出した。

「そりやあ、かうなんだ。シムールダンといふ僧侶がね、ゴーヴァンといふ子爵の許に全權を持つて

派遣されるんだ。この子爵は、海岸警備隊の討伐隊を指揮してゐるんだ。問題はつまり、貴族の瞞着

を防ぎ、僧侶の裏切りを防止しようといふにあるんだ」

「そりや頗る簡単な話だ。死刑を斷行しさえすればそれでいゝぢやないか」

「僕はそのことで來たんだ」と、マラーが聲をかけた。

二人は頭をあげた。

「やあ今日は、マラー、この頃は滅多に議會に出て來ないぢやないか」と、シャボがいつた。

「醫者から入浴を命じられたんでね」と、マラーが答へた。

「風呂つて奴は用心しなきゃならないぜ。セネカも風呂で死んだんだからね」と、シャボがいつた。

マラーは微笑しながら、「シャボ、こゝにはネロはゐないぜ」

「なに、お前があるぢやないか」と、荒つぽい聲がいつた。

それは、自席へ昇つて行くために通りがゝつたダントンであつた。マラーは振り向もしなかつた。

彼はモントーとシャボの間に頭を突込むやうにして、「實はね、今日は重大な用件があつてやつて

來たんだ。今日は、我々三人の中一人が議會に決議案を提出しなかりやならないんだ」

「俺ぢやあ駄目だ。俺は侯爵だといふんで誰も聽いて呉れないからね」と、モントーがいつた。

「俺は僧侶だもんで、誰も相手にして呉れないよ」と、シャボがいつた。

「で、俺はといふと、マラーなもんだから、誰も聞いて呉れないんだ」

三人はちよつとの間言葉を切つた。

考へ込んでゐる時のマラーに話しかけやうものなら、ひどい目に遭ふことがある。でも、モントー

は思切つて訊いて見た。

「マラー、お前の望む決議といふのはどんなことなんだ？」

「捕虜になつた叛逆者を逃がしてやつた指揮官は、何人たるを問はず死刑に處すといふ決議なんだ」

シャボがそこへ口を出して、「その決議なら現にあるよ。四月末に通過したんだ」

「それぢやあ、無いも同然になつてゐるんだ。ヴァンデーでは到る處、捕虜を逃さうとする者は勝手に逃がし、更に安全な避難所まで教へてやつてゐるんだ」と、マラーがいつた。

「マラー、それは決議の効力がなくなつたからだよ」

「シャボ、これは是非とももう一度効力を持たせなけりやならない」

「勿論さうだ」

「そのためには議會で決議する必要がある」

「マラー、それは議會にかける必要はない。公安委員会で澤山だよ」

「公安委員会が、ヴァンデーの各市町村にその決議を貼出させ、二つ三つ好いお手本を見せさへすれば目的は達するよ」と、モントーがつけ加へた。

「大物をやつけるのさ、將軍をね」と、シャボが合槌を打つた。

「實際はそれでもいゝんだ」マラーは呟いた。

「マラー、お前自身で公安委員会に行つて、言つて來るといゝや」と、シャボがいつた。

「シャボ、公安委員会といへばロベスピエールの家にあるんだ。俺はロベスピエールの家には行かないよ」

「俺が行つて來よう」と、モントーがいひ出した。

「よからう」マラーは首肯した。

その翌日、ヴァンデーの各市町村には公安委員会からの命令が飛び、捕虜になつた叛逆者や賊徒を逃走せしめた者は必ず死刑に處すといふ決議を貼出し、且つ嚴重にそれを勵行するやうにと命じた。

この決議は第一歩に過ぎぬものになつた。議會は更に歩を進めなければならなかつた。ラザアルがヴァンデー叛軍の逃走者のために門を開いたので、議會は共和第二年の霧の月十一日（一七九三年十一月）、叛徒を庇護する市町村はこれを破壊するといふ決議を通過した。

また敵の側では、歐羅巴諸國の王族達は、佛蘭西の脱走貴族の發案に基き、オルレアン公の家職リノン侯爵が起草したブルンスウィック公の宣言の中で、佛蘭西人の武装捕虜は悉く銃殺に處すること、もし國王の頭から髪一本でも落ちた時には、巴里全市を壊滅すべきことを宣言した。暴に酬ゆるに暴を以てしたのである。

第三部 ヴァンデー篇

第一篇 ヴァンデー

、森

その頃、ブルターニュには七つの恐ろしい森があつた。ヴァンデーといへば叛逆僧侶の國である。

(譯註) ザアンデーは舊ブルターニュ、アンジュー、ポアチエを合併せる地方) その叛亂には森といふ助太刀があつた。暗闇がお互に助け合つたのだ。

ザアンデーの事情をよく吞込さうとするには、先づ佛蘭西革命とブルターニュ農民との間の敵意を描いて見なければならぬ。一切の利益を一時に與へるといふ思切つた約束や、文明に對する憤怒の發作、氣狂じみた過激な進歩、見當もつかぬ度外れの改革、さうした前代未聞の大事件の前に、この地味變屈で、野蠻な人種を置いて見なければならぬ。彼等は澄んだ眼をして、髪を長く伸ばし、牛乳と栗で生活し、藁屋根と垣根と堀で限られた世界に住み、近所の村々の鐘の音色を聞きわけ、水は飲むだけにしか使はず、絹糸で刺繡した毛皮の上を着——文化は進んでゐないが刺繡のついたものを着てゐる、——祖先のケルト族が顔に入墨したやうに着物に彩色を施し、自分等を苦しめる人間を親分と崇め、墓の中に住んでゐるやうな考へしか起させまいと思はれる死語を使ひ、牛を追つたり、鎌をといだり、黒麥畑の草を取り、藁麥粉をねつてパンをこしらへたり、第一に鋤を敬ひ、その次にお祖母さんを敬ひ、處女マリアや白衣の聖母を信仰し、寺院にもお詣りするが、原の真中に立つてゐる不思議な大岩も信心する、畑では耕し、海では漁師をし、森では密獵をする、國王や、領主や、僧侶を敬ひ、虱でさへも可愛がる。おつと黙想に耽ることが好きで、際限もなく展がつかぬ寂しい海岸に立盡し、何時間でも身動きもせず海にさゝやきに聴き入つてゐるといふやうなことがよくある。

かうした盲目の人々に、革命の光明を受け入れることが出来たかどうかを考へて見なければならぬ。

二、人

百姓には二つの頼みとするものがあつた。それは養つてくれる畑と、隠してくれる森である。

ブルターニュの森は、ちよつと想像も及ばないことだが、恰も町を列ねたやうなものであつた。この茨や木の枝の恐ろしくこんがらかつた森ほど、秘密に閉された、物靜かな蠻境はまたとあるまい。この廣大な密林は靜寂と沈黙の棲家であつた。そしてこれほど死のやうな、墓場のやうな寂しさをもつた場所はまたとはないであらう。ところが、稻妻の閃くやうに一撃の下にすべての樹木が倒れてしまつたとしたら、この暗がりの中にも、人間が蟻のやうにウヨウヨしてゐるのが見えるであらう。

上には石や木の枝で蓋をした圓い狭い井戸が澤山あつて、内部は、初めは垂直で、下へ行くに従つて水平になり、煙突のやうに地の中で大きく擴がり、行止りが暗い部屋になつてゐる。

この地の中の生活は、ブルターニュでは大昔から行はれてゐた。いつの時代でも、人間が人間から逃れてこゝに隠れてゐたのだ。穴居種族はケルト族から逃れるために、ケルト族はローマ人を避けるために、新教徒は舊教徒から逃れるために、密輸入者は收稅吏から逃れるために、みな馳こつこ

のやうに、先づ森に隠れ、それから地の中に潜つたのである。森は獸の棲家だ。壓制は國民をそこまで追ひ込んだのである。二千年この方、征服、封建制度、狂信、苛税といふ、あらゆる形の專制政治がこの憐れなブルターニユを狩り立てゝゐた。そして、一つの堪へがたい壓制が止んだかと思ふと、既に新しい形の暴壓は始まつてゐた。そして、住民は地の下へ隠れてしまつたのである。佛蘭西共和國が忽然として出現した時、人々の胸の中には一種の怒である恐怖が溢れ、密林の中には隠れ穴が澤山出来てゐた。

ブルターニユは、この力による解放にも自分等が壓迫されると思つて叛亂を起したのだ。これは奴隸にはあり勝ちな誤解なのである。

三、人々森の共謀

悲劇に富んだこのブルターニユの森は、またしても昔の役を勤めることとなり、これまでどの叛亂にも與して来たやうに、今度の叛亂にもその召使となり、共謀者となつたのだ。どこの森の地の下も、眼に見えぬ壕や、密室や、廊下が雑然として縦横無盡に孔をあけてゐる一種の輕石のやうなものであつた。その密室の中には、大抵五六人の人間が隠れる事が出来るやうになつてゐた。内部はたゞ呼吸が困難なだけである。誰かゞもしその森の上を踏みつけやうものなら、それこそ恐ろしい爆發が起るのだ。地の中の迷路に兵隊がぎつしり屯してゐるこの偽善者めいた密林

は、丁度黒い大きな海綿のやうなもので、革命といふ大きな足で踏みつけられたので、そこから内亂が噴き出したのである。

この地方一帯は森の國と呼ばれてゐる。

この大密林や森の中には、首領の隱家の周圍に集つた地下の町ばかりではなく、樹木の下に隠れた低い小屋ばかりの部落が出来てゐる所さへあり、中には森全體がこの種の部落で埋まつてさへゐるやうな所もあつた。この部落は、よく煙で看破られることがある。

女は小屋の中に住み、男は窖の中に住んでゐた。彼等は今度の戦争をするために、かういふ太古の地下道や、ケルト族の穴居の跡を利用したのだ。穴に隠れてゐる男達の所へは女が食物を運んで行つた。中には忘れられて餓死した者もある。井戸の蓋は、大抵者や木の枝で非常に巧妙に作つてあるので、外からは、あたりの草に紛れてどんなことをしても見つからなかつたが、内部からは、雑作なく開けたり閉めたり出来るやうになつてゐる。隠れ穴は随分念を入れて掘つたもので、井戸から出た土はみな近くの池の中へ埋めてしまつた。そして、穴の内側と底には羊齒や苔を敷きつめた。彼等は、この隠れ穴のことを「座敷」と呼び、日光も、火の氣も、パンも、空氣もないことを考へながらも、この上なく愉快さうに、その座敷の中に閉ぢ籠つてゐた。

ブルターニユの森は、二重の罫のかゝつてゐる恐ろしい森であつた。それがために、青の革命軍も踏込みかねてゐたし、白の王黨軍も敢て出て来ようとはしなかつたのだ。

四、彼等の地下の生活

かういふ獣の棲家のやうな 窠にゐる連中は退屈した。そしてある時は、夜になると危険を冒して近所の野原へ踊りに行つた。さもなければ、暇潰しにお祈りをしてゐた。彼等は地の中に潜つてゐながら、實に驚くほど情報に通じてゐた。不思議極まることであるが、彼等の通信ほど迅速なものはない。橋といふ橋は切つて落し、荷車といふ荷車は打毀してしまつたのに、お互同志何でも通信し合ひ、その時々に必要な警戒をし合ふ方法を彼等は知つてゐた。森から森へ、村から村へ、農園から農園へ、小屋から小屋へ、藪から藪へと通信の聯絡がとれてゐたのだ。馬鹿のやうな顔をした百姓が通つて行く。それは内部を擡げた杖の中に、早便を隠して持つて行く使であつた。

彼等は蘇克蘭人のやうに多數の部族に分れてゐて、各教區には夫々の首領があつた。この戦争には私の父も加はつてゐたので、自然當時の事情に通ずるやうになつたわけだ。

五、彼等の戦時の生活

多くの者は槍を持つただけであつた。立派な獵銃は随分澤山あつた。ボカージュの密獵者や、ロルの密輸入者ほど鐵砲の上手な者はあるまい。彼等は妙な恰好をしてゐるが、度胸の据つた、恐ろし

い兵隊であつた。三十萬人を徵發するといふ共和政府の布告が出たのを合圖に、六百の村々の警鐘は一齊に鳴り響いた。そして、劫火の炎は到る處から一時に燃え上つた。ポアトゥーもアンジューも、同じ日に爆發したのだ。この大群集を蜂起させるのは何でもなかつた。百姓達が宣誓、偲と呼んでゐる宣誓司教（譯註 新憲法に宣誓して共和政府に屈服した僧侶）の教會堂の中に大きな黒猫を隠して置く。それが彌撒の最中にパイと戸外に飛出す。さうすると、「それ悪魔だ！」と百姓達が騒ぎだして、忽ちその地方一帯が叛亂を起すといふ段取である。懺悔堂からは火のやうな息が吹き出してゐたのだ。百姓達は、革命軍にむかつたり谷を飛びこえたりするために、ラ・フェルトといふ十五呎もある長い棒を持つてゐた。この棒は戦ふのにも逃げるのにも役に立つ。戦ひ酣な最中でも、百姓達は革命軍に向つて突進して行き、戦場の遙かに十字架や教會堂が見えでもすれば、一人残らずそこに跪いて敵彈雨飛の中を靜かにお祈りを捧げた。そして、數珠を爪ぐり終つて、まだ生き残つてゐる者は、再び起ち上つて奮然敵の中に突進して行つた。あゝ何といふ悲壯な巨人達であらう！走りながら彈丸を裝填するのは彼等の獨得の藝當である。彼等は、首領のいふことなら何でも信ずるやうに出來てゐた。僧侶は池の僧侶の首に紐を巻きつけて赤い痕をつけ、「これはギロチンにかけられて生き返つた人達だ」といつて聞かせた。百姓達はまた度を掠奪をやつては道草を食つてゐた。この信神家連は實は泥坊であつたのだ。未開の人間には惡癖がある。文化が容易に普及しないのもそのためである。彼等は共和黨の味方をした百姓達を「ジャユパンの野郎共」と呼んで、他の者よりも

一層慘酷に殺戮した。彼等は本職の兵隊のやうに戦争が好きで、山賊のやうに虐殺をやる。彼等は「太い足した犬つころ」——即ちブルジョアを銃殺することが好きで、その銃殺することを「精進あけ」といつてゐた。サン・ジュールマン・シユール・リルでは、毎日三十人の割合で共和黨員を銃殺すること五週間に及んだ。ブルターニュの叛徒は短い上衣に銃を負ひ、ゲートルをつけて、袴のやうな広いズボンに穿き、丁度希臘の叛徒のやうな恰好をしてゐた。年二十一歳のアンリ・ド・ラ・ロッシュジャクランは、一本の杖と二挺のピストルを持つて、この戦争に飛び出して來た。ヴァンデー軍は百五十四部隊に分れてゐた。彼等の攻圍戦は立派なものである。ブレシユイールは三日間も完全に包圍してゐた。一萬人の百姓が、或る金曜日、サーブルの町へ眞赤な砲彈を打ち掛けた。モンチニエからクルブヴィーユの間の共和黨の陣地十四ヶ所を、たつた一日で打ち壊したこともある。百姓達は金貨よりも藥莢の方を大切にしてゐた。彼等は自分の村の鐘樓が見えなくなると男泣きに泣いた。逃げるといふことはなんとも思つてゐないらしい。そんな場合には、隊長が「木靴をうちやつて、鐵砲を持つて行くんだぞ」と怒鳴つた。彈藥がなくなると、お題目を唱へながら共和黨軍の砲兵隊の彈藥箱を奪ひに行つた。百姓達には制服といふものがなかつた。着物はみんな寸断々々になつてゐた。百姓でも、貴族でも、みな手あたり次第に襦袢を見つけては身につけた。ロジェー・ムーリニエはフレイシユの劇場の衣裳部屋にあつた土耳其帽をかぶり、肋骨の軍服を着てゐた。ボーヴィリエ尉士は検事の服を着て、羅紗頭巾の上に女の帽子を冠つてゐた。そして誰でも一樣に銃をかけて、白い帯

を締めてゐた。階級は結んだりボンでわかるやうになつてゐる。ストフレは赤いリボンをつけ、ラ・ロッシュジャクランは黒いリボンをつけてゐた。軍隊の中には女も混つてゐる。レキュール夫人は後にラ・ロッシュジャクラン夫人となつた。テレーズ・ド・モリアンはラ・ルーアリーの愛人で、教區の首領名簿を焼いてしまつた女、若くて美人のラ・ロッシュフーコー夫人は、劍を握つて百姓達の先頭に立ち、ピユイ・ルソー城の大きな塔の下へ肉薄した。アダムス爵士と呼ばれたアントアネット・アダムスは勇敢な女丈夫であつたが、遂に捕へられて銃殺された。しかし敵もその勇敢なのに敬意を表して、彼女だけは特に立つたまゝ銃殺した。この雄壯な時代は實に殘虐そのものであつた。人々はみな熱狂してゐた。レキュール夫人は、地面に轉がつてゐた共和黨軍の兵士達の上を馬で飛ばした。彼女はみんな死んでしまつたといつたが、恐らくは怪我をしただけであつたらう。男の中には裏切者も出たが、女には決してそれがなかつた。佛蘭西劇場の女優フリーリ嬢はラ・ルーアリーからマラーへ移つたけれども、それは愛のためである。首領達の中にも、兵卒と同様に無智なものも相當あつた。ド・サビノーは織りを知らない。どんな簡単な字一つも満足には書けなかつた。隊長同志の間は兎角不和で、沼地の隊長連は「山の奴等をやつゝけてしまへ」と怒鳴つてゐた。騎兵隊は至つて数が少なく、新に編成することもなかく、困難であつた。ピユイセーは、「二人の息子を喜んで出征させる男でも、馬を一頭出せといふと厭な顔をする」と書いてゐる。棒や、草掻きや、鎌、金物をぶつつけたり釘をうつたりした根棒や、舊式新式とりませの鐵砲、短刀、槍などが、彼等の武器で

あつた。中には死人の骨を組合せてつくつた十字架を背負つてゐる者もあつた。百姓達の行動はいつでも夜分に行はれる。ヴァンデー軍の戦法は常に不意討であつた。彼等は一本の草も揺がさぬほど静かに、一言も發せず十五里の強行軍をやつた。夜のとばりが下りると、隊長連が軍議を開いて、翌朝共和軍のどの陣地を攻撃するかを定める。それが決ると、銃を背負つた百姓軍は口々にお祈りを捧げながら、靴を脱ぎ、大密林の中を長い縦隊になつて、呼吸を殺し音もたてず、言葉も發せず、素足のまゝで草や苔の上を踏んで進んで行つた。それは暗闇の中を猫が歩いて行くやうなものであつた。

六、土地の魂が人間に滲み込む

叛亂を起したヴァンデーの地方の住民は、女や子供を合せると五十萬人以下には下らない。聯盟論者(譯註) 地方の各縣を聯合させて巴里に對抗せんとする論者)は援助を與へ、ジロンド黨もヴァンデーの味方をした。ラ・ロゼールは三萬の軍を森の國へ送つた。ブルターニュの五縣とノルマンディーの三縣を合せて、都合八縣が結束した。カンと結んでゐたエヴリューは、市長のシヨールと名望家ガルダンバが提携して叛亂を起したので知られてゐる。カン市のビュヅヤ、ゴルザス、バルバルー、ムーランのブリッソ、リヨン市のシャツサン、ニームのラポー・サン・テチエンヌ、ブルターニュのメータンとデュシャテルなどいふ人物が叛亂の主謀者となつた。ブロンシオンヤ、レキユール、ラ・ローシユジャクランなどいふ大首領連の考へは間違つてゐる。

た。カトリック教徒の大軍を作らうなどいふのは狂氣の沙汰である。ロアール河を渡るといふことは、ヴァンデーには不可能なことである。ヴァンデーは一つとして出来ないことはなかつたが、それを越すことだけは絶対に出来なかつたのだ、内亂は征服する力を持たない。ライン河を渡つて、シーザはその覇業を完成し、ナポレオンは國土を擴めた。しかしロアール河を渡るとは、たゞラ・ローシユジャクランを殺すことであつた。

ヴァンデーの實力はヴァンデーの中に在る時に限られてゐる。そこは侵しがたいばかりでなくて、實際難攻不落の要害である。ヴァンデーの住民は密輸入者であり、勞働者であり、兵士であり、牧童であり、密獵者であり、義勇兵で、羊飼で、鐘撞き男で、百姓で、間諜で、人殺しで、信神家で、そして森の獸であつた。

ヴァンデーの謀叛は失敗に終つた。他の國の叛亂には成功したものもある。例へば瑞西などがそれだ。瑞西のやうな山の叛徒と、ヴァンデーのやうな森の叛逆者との間には、宿命的な環境の影響を受けて、一方は理想のために戦ふのに對して、一方は偏見のために戦ふといふ相違がある。一方は天を翔り、一方は地を這ふ。一方は人道のために戦ひ、一方は隱遁のために戦ふ。一方は自由を求め、一方は孤立を欲する。一方は町や村を守り、一方は教區を防ぐ。町だ！町だ！とモラの勇士達は叫んだ。一方は斷崖の戦争であり、一方は沼地の戦争である。一方は溪流や、水煙立つ激流の人間で、一方は熱病潛む腐つた水溜りの人間だ。一方の頭の上には青空があり、一方の頭の上には木の茂みが

ある。一方は山の頂に住み、一方は蔭の中に潜んでゐる。

高みから受ける感じと深所から受ける感じとは非常に違ふ。

山は城砦であり、森は伏兵である。一方は勇氣を鼓舞し、一方は譎詐を教へる。古代の傳説でも神

は山の頂に置き、魔神は密林の中に入れてある。魔神は野蠻な半獸半人である。

地勢は人間の多くの行動を決定する。土地は、想像以上に人間の共謀者なのだ。

見果てもつかぬ廣い地平線は、人間に博大な全般的な思想を懐かせる。それと反對に、限られた地

平線は、狹隘な一方に偏した觀念しか持たせない。のみならず、大きな心を持った者を小つぽけな人

間にしてしまふ。この心理の好適例はジャン・シユアーンである。

全般的な思想は部分的な思想に憎まれる。それこそ實に進歩の戰なのだ。

郷土と國家といふ二つの言葉、これがヴァンデー戦争の全部をいひ表してゐる。それは地方的觀念

と普遍的思想との争ひであり、百姓と愛國者との戦争だつたのである。

七、ヴァンデーがブルターニユを滅ぼす

ブルターニユは昔から叛亂の絶えぬ地方であつた。しかも、二千年の長きに亘るブルターニユの

叛亂は常に正當であつたが、たゞ一つこの最後の叛亂だけは間違つてゐた。しかし、ブルターニユの

戦争は、革命に對する時でも、王政に對する時でも、派遣代表に對して、領主の諸公や貴族に對

して、法紙幣の政策に對して、またその指揮者が誰であつても、本

質は常に同じ戦争であつた。つまり、地方精神の中央精神に對する戦争であつたのだ。

この古いブルターニユの諸州は池のやうなものだ。この溜り水はもう勢よく走る力を失つてゐ

る。池の面を吹く風にも、活氣はつかずにたゞ苛立つばかりであつた。フィニステール(譯註)ブル

ターニユの一縣で佛蘭西の最西端に位してゐる)は佛蘭西の國土を限つてゐる。人間に與へられた空

間はそこで終り、時代の進運もそこで行止りになつてゐる。「止れ！」と一聲、大洋は土地に、未開

の闇に、文化の光に命じてゐるのだ。中央の巴里から何かの刺戟がそこに傳はらうものなら、それが

王政から來てゐるやうが共和主義から來てゐるやうが、專政のためであると自由のためであると問は

ず、「新しい」ことだといふだけで、ブルターニユはいきり立つたのだ。「邪魔をせずに放つて置いて

貰ひたい。一體俺達をどうしようつていふんだ」といふので、沼地は鋏を擔ぎ出し、森の國は獵銃を

持出すのだ。立法や教育の改革、百科辭典、哲學、天才、榮譽、——佛蘭西のあらゆる計畫も努力

も、ブルターニユの百姓の前には何の利目もなかつたのだ。實に恐ろしい聲者である。

ヴァンデーの叛亂は不幸な誤解から起つたのであつた。

大きな暴動であり、巨人の角逐であり、桁外れの叛亂ではあつたが、歴史の上には、光輝はあつて

も陰暗な「ラ・ヴァンデー」といふ文字一つしか残し得ない運命に置かれてゐた。ヴァンデーの百姓

達は、既に失くなつた者のために自殺をなし、利己主義に執着し、卑怯者のために底知れぬ勇氣を提

供して、徒らに日を過した。彼等は打算もなければ、戦術戦略も辨へず、計謀もなければ目的もなく、大將もなければ責任も持たない。人間の意志が如何に無力であるかも暴露した。彼等は任侠で野蠻で、且つ途方もなく馬鹿げた人間だ。あの烈々たる日光を遮るために、暗闇の日覆を拵へようといふのだから。その無智は、眞理や、正義、法律、理性、解放に對して、長い間、馬鹿氣た而も見事な抵抗を續けさせた。其爲に八年間の恐怖が打續き、十四の縣は蹂躪され、畑地は荒され、收穫はなくなり、村は焼かれ、町は壊され、家は掠奪され、女子供までも虐殺され、薬屋根には火が放たれた。かくて心臓には劍が突立てられ、文明は脅かされ、英吉利の宰相ピットには希望を抱かせた。これがヴァンデーの戦争の正體である。知らずにやつたことではあるが、正しく親殺しの大罪である。しかし一方からいふと、ヴァンデーがブルターニュの古代からの暗闇に八方から孔をあけ、その密林にあらゆる方面から一時に光の矢を射通す必要があることを示したのは、進歩に對する一つの貢獻であつた。かくして、大きい禍が悲しむべき方法で事件の結末をつけたのである。

第二篇 三人の子

一、内亂以上のもの

千七百九十二年の夏は非常に雨が多く、それに引きかへ翌年の千七百九十三年は雨がなくて暑い

夏であつた。

七月のからりと晴れ渡つたある日の夕方、太陽が沈んでから約一時間ほど経つた頃、馬に乗つてアヴァンシユの方からやつて来た一人の男が、ポントルソンの町の入口にあるクロア・ブランシヤールといふ薄汚い小さな宿屋の前に馬を止めた。その宿屋には、何年前か前に書いたらしい「上等林檎酒」といふ古看板がかゝつてゐた。日中はひどく暑かつたが、夕方になつたのでそろ／＼涼風が吹始めてゐた。

この旅人は、裾で馬の背が見えなくなるほど大きなマントを着て、三色のリボンの徽章をつけた錨廣の帽子を冠つてゐた。リボンが目標となつて狙撃されたりする生垣の多いこの地方で、これはまた大膽極まる装立である。マントは首の所でキリリと結んだだけで、両腕は樂に動かせるやうになつてをり、マントの下には三色の帯と、それに差し込んだ二挺のピストルが見える。腰に吊つた軍刀はマントの下まで下がつてゐた。

馬の停つた物音で宿屋の戸が開かれる。そして手に提燈を掲げた宿屋の亭主が顔を出した。それは丁度晝と夜との境目の時刻で、道路の方はまだ明るいが、家の中はもう暗くなつてゐた。主人はしげ／＼とその帽子のリボンを眺めた。

「市民、お宿りでございますか？」

「いや」

「ぢや、どちらへお出でよ？」

「ドールへだ」

「それなら、アヴランシユまでお引返しになるか、でなきやこのポントルソン泊りになさい」
「何故だ？」

「ドールぢや戦争の眞最中です」

「あゝ！」騎士はさういつたが、直ぐに言葉を續けて、「この馬に燕麥をやつておくれ」
主人は秣槽を持つて来て、それに燕麥を一袋あげ、そして馬の轡を外してやつた。馬は鼻を鳴らしながら喰ひ始めた。二人の話は更に續く。

「旦那あどちらからいらつしやいました？」

「巴里から」

「眞直ぐにぢやないでせう？」

「眞直ぐぢやない」

「さうだと思ひやしたよ。どの街道もみな通行止めですからね。ですが、驛馬車だけはまだ通つてゐますよ」

「それもアランソンまでだ。わしはそこで驛馬車を捨てゝ来たんだ」

「あゝあ、そのうち佛蘭西には驛馬車もなくなつちまひますよ。もう馬がないんですからね。三百法

の馬は六百法出さなきや買へなくなるし、秣と來ちや法外の値ですからね。私も以前は驛馬車の元締でした。今ぢや御覽の通り安料理屋の主人に早變りです。驛馬車の親方も三百十三人ありましたが、その中二百人は罷めちまひました。時に、旦那あ、フランソンでこの馬をお求めになつたのですか？」

「さうだ」

「今日は、日中ずつと乗り通しですか？」

「明方からずつと」

「で、昨日は？」

「一昨日からだ」

「さうでせう。ドムフロンやモルタンを通つていらつしやつたんでせう」

「アヴランシユも」

「私のいふ通りになさいよ旦那、そしてゆつくりお休みなすつたがいゝ。旦那あ、さぞお草臥れでせう。馬だつて疲れてるに違ひない」

「馬は疲れる権利がある。だが、人間はさう行かない」

主人の視線は再び旅人の方に飛んだ。旅人の顔は嚴肅で、穩かで、しかも烈しい氣性が現れ、髪はもう白髪になつてゐる。

主人は、眼の屈く限り人影のなくなつた街道筋にちよつと眼をやつて、

「旦那あ、いつもかうやつて二人で旅をなさるんですか？」

「わしには護衛兵がついてゐる」

「へえ、どこに？」

「軍刀とピストルが二挺さ」

主人は馬に水槽を持つて来てやつた。そして、馬が水を飲んでゐる間に、仔細に旅人の風體を眺めてゐたが、「この人は、どう見ても坊さんらしいぞ」と、口の中でつぶやいた。

騎士はまた口を切つて、「お前さんは先刻ドールで戦争をしてゐるといつたね」

「へえ、丁度始まつた頃でせう」

「誰が戦争をしてゐるんだね？」

「貴族と貴族が」

「といふと？」

「共和黨の側の舊貴族が、王様の方の舊貴族と戦争してゐるんですよ」

「だが、もう王様なんかいないぢやないか」

「小さな方がお一方あります。それに奇妙なことには、戦争してゐる貴族といふのは親類同志なんですよ」

騎士は聴き耳を立てた。主人は續ける。

「片つ方は若い者で、相手は老人です。といふのは、甥の子が大伯父と戦つてゐるんですよ。で、伯父さんの方は王黨で、甥御の方は愛國黨なんです。伯父さんは白軍の方の總司令官で、甥御は青年の大將です。それがお互微塵も容赦といふことなしにやるに違ひない。こりや間違ひのないところですがね。命のやり取りをしなきや納まらない戦争なんです」

「そんなにひどいのか？」

「さうですとも、旦那。御覽なさい。その人達が最初にとりかはした挨拶が一體どんなものであつたかお眼にかけませう。先づ伯父さんのはうぢや、到る處べタノとピラを貼りまはしたんです。それが家といふ家、木といふ木に残らず貼りつけられ、この通り私のとこの戸口にまで貼つてゐるんですよ」

さういひながら、主人は戸口の開扉に貼りつけられた四角な紙片に提灯を差しつけた。掲示の字が非常に大きいので、騎士は馬に乗つたまゝはつきり讀めた。それにはかう書いてある。

「ラントナック侯爵は甥ゴヴァン子爵に對し、若し幸運にして汝を捉へたる曉には直ちに銃殺の刑に處すべしと挨拶するの光榮を有す」

「で、これがその返答なんです」と、主人は背後の方へ振り向いた。

そして、もう一方の側の開扉に貼つてある別な掲示に提灯の灯をむける。旅人はそれを讀んだ。

「ゴーヴァンは、ラントナックを捕縛次第直ちに銃殺することを彼に對つて警告するものなり」
「最初のピラを貼つて行つたのは昨日でしたが、二度目の奴は今朝でした。その中に返答してゐる暇などなくなつちやつたんですよ」と、主人はいつた。

旅人は口の中で獨語でもいつて居るかのやうに何か呟いたが、主人にはそれが何の意味かはつきりとは解らなかつた。

「さうだ、これは國內の戦争以上のものだ。寧ろ家族の中の戦争だ。それは必要なんだから、それで結構だ。人民の大更生は、さういふ犠牲によつて購はれなければならぬのだ」

旅人は第二の布告をヂツと凝視めたまふ、手を帽子へ當て、擧手の禮をした。
宿屋の主人は語り續けた。

「お解りですか、旦那、問題は此處なんです。都市や大きな町に居るんだつたら、我々だつて革命のために戦ひますよ。しかし、田舎にちやや革命には反對ですね。手つ取早くいやあ、都會にあればこそ佛蘭西人だが、田舎にちややたゞのブルターニュ人なんです。今度の戦争だつて、都會の人間が百姓達に仕掛けた戦争なんです。奴等は我々のことを『太い脚した犬つころ』といひますが、我々は奴等のことを『下卑な野郎共』と呼んでるんです。貴族も僧侶も奴等と共謀なんです」
「皆が皆までがさうといふわけでもあるまい」と、騎士が口を入れた。

「そりやさうでせう、旦那。この田舎にも侯爵を向うに延してゐる子爵もをりますからな」といつて、

主人は後を獨語に紛らしながら、

「それから今からやつて話してるのは、確かに坊さんのやうな氣がするんだが……」

「で、二人の中どつちが優勢なんだね？」騎士は、それに構はず主人に問ひかけた。

「今までのところは子爵の方が旗色がよいんです。が、これから先が大變でせう。老人の方はなかなか手強いんですからね。ところで、その人達は御兩人とも土地の貴族ゴーヴァン家の出なんですよ。今ちや二軒に分れてゐますが、もとは同じ家でした。大分家の方はラントナック侯爵といふ方が御當主で、小分家の方はゴーヴァン子爵といふ方が御當主なんです。その分家同志が今度の戦争をやつてゐるんです。このラントナック侯爵の勢力と來たら、ブルターニュちや素晴らしいもんで、百姓達などは王様のやうに思つてゐるんです。上陸したその日一日で八千人の者が馳せ集り一週間で三百の教區が侯爵方につきましました。もし海岸のどつかに足掛りを占領することが出來たら、今頃は英吉利人も上陸してゐたでせうな。仕合せなことには、その甥の子に當るゴーヴァンが、偶然そこへ來合せたんです。ゴーヴァンは共和黨軍の司令官ですがね、とうとうその大伯父さんを負かしてしまつたんです。それから、これもゴーヴァンにとつちや儲け物だつたんですが、ラントナックは此處へやつて來る早々、澤山の捕虜を殺しちやつたんです。銃殺された者の中には女も二人をりましてね、その一人の方は三人の子持でしたが、その子供達は巴里大隊が養子にしてゐたものなんです。さあ、軍隊の連中怒るの怒らないのつて、——名前が「赤頭布大隊」といつてましたよ。今ちやその巴里つ兒も澤

山は残つてませんがね、實に恐ろしい兵隊ばかりですよ。今はゴヴァン司令官の部隊に編入されて
あますがね、向ふ處敵無しといふ威勢なんです。そこでどうしても殺された女達の仇を討ち、子供達
を取返さずにや置くものかとなつたんです。あの老人がその子供達をどうしてしまつたものか、それ
が一向に判らない。巴里の擲弾兵達がいきり立つたのはそのためなんです。もしもこの子供達の問題
がこんがらかつてゐなかつたとすれば、この戦争だつてこんな風にやなつてゐなかつたでせうよ。ゴ
ーヴァン子爵は立派な強い若者です。があの老人は恐ろしい侯爵です。百姓達は今度の戦争を聖ミ
シエルとペールゼバブ（譯註）フィリステ人の信じた蠅殺しの神の戦だといつてます。旦那あ、
聖ミシエルつてといふのがこの地方の守護神だつていふことをは御存じだと思ひますが。入江の中に
その守護神の名をつけた山がありますが、ミシエルはそこで悪魔を退治して、この近所の他の山へ埋
めてしまつたつていふんですがね。そこがトムブレレーヌつてとこです。

「時に旦那あ何か召ヒりませんか？」
「わしは水筒も持つてるし、パンも一片ある。ところで、お前さんはドールの模様は少しも話して呉
れないね」

「これからですよ。ゴヴァンは海岸討伐隊の司令官ですがね、ラントナックの目的は、この地方一
帯に叛亂を起させ、下ブルターニュから下ノルマンディーの方面まで占領して、英吉利のピットの大
めに門を開き、二萬の英軍と二十萬の百姓から成るヴァンデー軍でゲイ〜と押出さうつて心算だつ

たんです。ゴヴァンはその計畫の裏を掻いて嚴重に海岸を固め、ラントナックを奥地の方へ追ひ
やる一方、英軍を海に向うへ追つ拂つちまつたんです、ラントナックは此處にゐたんですが、もう退
却してしまひました。ゴヴァンは彼奴の手からボン・トー・ポーを奪ひ、アヴァンシユから追出
し、更にヴェユデュから追ひ立て、グランヴェユに行く街道を遮断してしまひました。ゴヴァ
ンは、今度こそフージェールの森に追込んで、彼奴を取捉へてやらうつてんで、作戦を凝らしてゐた
んですがね。昨日までは何もかもみんなうまく行つてゐたんです。ゴヴァンは軍隊を率ゐて此處へ
やつて來ました。ところが、なんと驚いた早業だ。ようがすかね、老獪な老耄奴、綺麗に一杯喰は
せやがつて、ドールの方へ軍を進めたといふ情報が入つたんです。もし奴がドールを占領して、ド
ール山の上に砲列を布いたら——奴は大砲を持つてゐますからね、忽ち、英軍の上陸する足掛りが出
來つちまふんです。さうなつたら何もかもおしまひでさあ。それでですよ。機を見るに敏なゴブア
ンは、こりや一時も愚圖々々しちやあゐられないつていふんで、誰の命令も受けず全くの獨斷で、
直ぐに出動準備の命令を下し、大砲の用意をし、全軍の隊伍を整へ、軍刀を抜き放つて進んで行きま
した。そして、ラントナックがドールにぶつつかつてゐる所へ、ゴヴァンはラントナックにぶつ
かつて行つたんです。だから、このブルターニュの二人の大將が火花を散らすのはドールの町になる
でせう。ノした騒ぎが起りますぜ。今は丁度眞最中ですよ」
「ドールまで行くには、どれぐらゐかゝるかね？」

「砲車を引張つて行く軍隊なら、少くとも三時間はかゝります。だが、あの連中はもう向うに着いてる頃ですよ」

旅人はちよつと耳を傾けてゐたが、「なるほど、何だか大砲の音がしてゐるやうだ」
宿屋の主人も耳を済まして、

「聞えますよ、旦那。それに小銃の音も聞えてますぜ。とうとうおつ始めやがつたな、さうとすりや、旦那、いよいよ此處でお泊りになつた方がようございませぬ。あんな所までおいでになつたつて、碌なことありませんよ」

「わしは止つちやゐられない。是非とも行かなくちやならないのだ」

「そりや御無理ですよ。どんな御用向かは存じませんが、とても危険ですからね。旦那の世界で一番大事なものにでも關係のない限りは……」

「實際それに關係があるんだ」と、騎士は答へた。

「……旦那のお息子さんといつたやうなお方か、それとも……」

「まあその邊の所だ」と、騎士が答へた。

宿屋の主人は頭を上げてつぶやいた。

「この旦那はどうしても坊さんのやうにしか思へない」そして、ちよつと考へてゐたが、「それはさうだが、坊さんだつて子供はあるだらう」

「馬に轡を嚙ましてくれ。代は幾らかね」

旅人は主人に訊いて、金を拂つた。

主人は秣槽や水槽を壁の側に片づけてから、また旅人の方へ戻つて来た。

「お立ちになると決れば、私のいふ通りになさいよ。旦那あ、きつとサン・マロにいらつしやるんでせう。だが、ドールは通らないやうになさい。街道は二つあるんですから、ドールを通る道と海岸傳ひに行く道と。道程にしたつて殆ど違ひはありません。海岸傳ひの道はサン・ジョルジュ・ド・ブレエーニユ、シユリュエー、イレル・ル・ヴィヴィエを通ります。ドールを南に、カンカールを北に見ておいでなさいよ、旦那。そしたら、突き當つた所で道が二股に分れます。ドールへ行く道は左、サン・ジョルジュ・ド・ブレエーニユへ行く道は右ですよ。これはよく御聞きになつて下さい。もしドールを通つておいでになれば、虐殺の真中に捲込まれてきつと命を取られますぜ。だから左の方の街道でなく、右の道を取つておいでなさいよ」

「ありがたう」と答へて、騎士は馬に拍車を呉れた。

あたりは既に眞暗になつてゐた。馬は足掻を早めて闇の中を急いだ。主人は後を見送つてゐたが、その姿は忽ち見えなくなつてしまつた。

街道の岐れ目に差蒐つた時、遠くの方から宿屋の主人が、「右をおいでなさい！」と叫んでゐる聲が聞えた。

彼は左の方へ折れた。

二、ドール

ドールはブルターニュにある西班牙風の町であるが、案内書によれば、町ではなくて單なる街路である。ゴシック風の大きな古い道路で、道の兩側には大きな柱のある家がごたくと亂雑に立ち並び、亂杭齒のやうになつてはゐるが、道だけは非常にだゞつ廣い。町の他の部分は、小路が網の目のやうになつて、この廣い大通に結びついてゐるだけで、丁度小川が大河に注いでゐるやうな恰好である。町には城門もなければ城壁もない、全くの開放的で、ドール山が背後に聳えてゐるが、敵の攻撃を支へ得るものとは、道路が多少の役に立つ外は何一つない。

クロア・フランシャールの宿屋の主人がいつた事は全く事實であつた。彼が話してゐた時分には、ドールでは猛烈な白兵戦が隨所で行はれてゐたのだ。その朝到着した白軍と、夕刻それを追つて町に入つたばかりの青軍との間に、突如激烈な夜戦が開始されたのであつた。兩軍の兵力には非常な開きがあつた。王黨軍の六千人に對して、共和黨軍は僅か千五百人しかない。しかし、憤激の強さから見れば、正に伯仲の激戦である。そして意外なことには、六千人の白軍に攻撃を加へてゐたのは、僅か千五百人の青軍であつた。

一方は烏合の衆であるが、片つ方は秩序ある軍隊だ。六千の百姓達は皮の上衣に十字架の徽章をつ

け、圓い帽子には白リボンを結び、腕には基督の箴言を書いた腕章をつけ、劍帶には數珠を下げ、銃劍なしの銃銃や、劍よりも乾草叉を持つた者の方が多く、大砲は綱をつけて引張つてゐる。配給は行届かず、訓練は不充分で、武装も貧弱ではあつたが、たゞ熱狂的であつた。これに立向ふ千五百の兵は三色リボンをつけた三角帽を冠り、裾も折返し、長いゆつたりとした制服を着け、肩帶を十字にかけ、銅の柄のついた反身の短劍を吊り、銃には長い銃劍をつけ、整然とした服装をしてゐた。訓練も出てゐれば、腕も揃つてゐる。指揮官の命令はよく守り、素直ではあるが非常に慥悍である。襤褸を着た、靴も穿かない義勇兵もあつた。しかし義勇兵等は自分の郷土のために戦つてゐるのである。兵士になつた百姓達は王黨側に、跣足の英雄達は革命黨側に、別れ／＼になつて、各々その指揮官に深く心服してゐる。王黨員は一人の老人に、共和黨員は一人の若者に、——その一方はラントナックであり、もう一方はゴーヴァンである。——

革命は、ダントンやサン・ジユスト、ロベスピエールの如き若い巨人達の風貌とならんで、オーシユ、マルソーなどの理想家肌の青年達の顔をも並べてゐる。ゴーヴァンもその中の一人であつた。ゴーヴァンは年漸く三十歳、怪力の神人ヘルクレスのやうな體格をして、眼光は豫言者の如く嚴かだが、笑へば子供のやうな無邪氣な顔になる。煙草も吸はなければ酒も飲まず、また神を濟すこともしなかつた。戦争中何處へ行つても化粧道具を手離したことがなく、いつでも爪や齒や褐色の見事な髪を手入れをしてゐた。休む時には、銃丸孔のあいた、塵埃で眞白になつた隊長服のまゝで、吹曝し

の中にござりと横になつた。いつも白兵戦の中を縦横無盡に飛び廻るのだが、決して負傷した例がない。その聲は非常に優しいが、號令をかけるとなると、指揮官に相應しい威嚴ある叱咤になつた。彼は風の吹曝しの中でも、雨の中でも、雪の中でも、マントにくるまつたまゝ、綺麗に手入れた頭を石の枕に載せ、地べたにゴロ寝して、自ら兵士等に籠を垂れた。實に英雄的な、無邪氣な人物である。が、一度劍を握ると忽ち人間が一變してしまふ。その優しい風貌も、いざ戦争となれば打つて變つて凄じいほどの形相になつた。さういふ風な人物ではあるが、一面に於ては思想家であり哲學者でもある。風貌に於てはアルキピアデス、雄辯に於てはソクラテスに似た若い聖人である。

かういふ一青年が、佛蘭西革命の風雲に乗じて、一躍一方の將となつたのであつた。彼が自分で組織した麾下の軍隊は、小さいながらも、羅馬帝國の軍團のやうに完全な軍隊であつた。主力は歩兵と騎兵とから成り、他に偵察兵、工兵、鐵兵、架橋兵があり、羅馬軍團に弩砲があつたやうに、彼には大砲があつた。馬に牽かせる三門の大砲は取扱ひも至つて容易で、軍の威力を増すことは非常なものであつた。

ラントナックもまた立派な武將であり、老巧さにかけてはゴーヴァンの比ではなかつた。彼は思慮深いと同時に豪膽である。老雄は若い者に比べて遙かに冷靜な決斷力を持つてゐる、それは確かに年の功だ。またより大膽なのは先が短いからだ。老人達は失ふべき何物を持つてゐるか？ それはほんの僅かなものに過ぎない。ラントナックの作戦が無謀でありながら、非常に巧妙なのはそのためである。

る。しかし、この老人と若者の恐ろしい一騎討ちは、總體に於てといふよりも、殆んど何時でもゴーヴァンの方に歩があつた。それは他ならぬ運命の仕業なのだ。すべての幸運は、——よしその中味は恐ろしい幸運であらうとも——壯者の方に味方する。勝利は若い娘のやうなものだ。

ラントナックはゴーヴァンに對して激しい敵意を抱いてゐた。第一はゴーヴァンが自分の討伐に向つたからであり、第二にはゴーヴァンが一族のものであつたからだ。ゴーヴァンがジャコバン黨に入つたために、侯爵家の後は一體どうなるんだらう？ このゴーヴァン！ この悪戯つ兒奴！ ラントナック侯爵は子無しであつたから、甥の子の、孫といつてもいゝやうなこのゴーヴァンが後嗣に決つてゐたのだ。お祖父さんのやうなラントナックは齒軋りした。「ようし、彼奴を捕へたら、犬のやうに叩つ殺してやるぞ！」。さういふわけで、共和黨がこのラントナック侯爵に對して不安を感じるのは當然のことであつた。彼が上陸するかしないかに、忽ち大地震が起つた。彼の名は、ヴァンデーの一揆の間に雷の如くに鳴り響いた。そしてラントナックは忽ち中心人物となつた。今まで、てんで勝手にそつちこちの林や溪間に立籠り、お互に嫉視反目し合つてゐたこの統一のない一揆の中へ、一人の傑物が天降つて來ると、團栗の脊較べをしてゐた首領達は風を望んで忽ち八方から馳せ參じた。かくして首領達の殆んど全部はラントナックの麾下に加はり、遠近を問はず、皆彼の威令に服するやうになつたのだ。

ラントナックのブルターニュの戦争に對する考へは他の人達とは異つてゐた。彼はこの浮流してゐる

る混沌たる戦争の中に、先づ確固たる根據地を作りたいたと考へた。またこの野蠻な森の軍隊に正規軍を合併し、それを編導隊として百姓達の訓練をしようと思つた。それこそ實に恐ろしい深謀遠慮であつた。もしそれが考へどほりに行つたとすれば、ヴァンデーは難攻不落の要害となつてゐたであらう。

しかし、肝腎の正規軍は何處にゐるか？ 正規兵は何處を探したら見つかるか？ 聯隊は何處を探せばいいか？ その立派に出来上つた軍隊は何處にゐるのか？ それは英吉利に。そこで、ラントナックは英軍を上陸させようと決心した。かくして國內の一黨としての精神は一變したのだ。王黨の白リボンに凝つたラントナックの眼には、英吉利軍の軍服の赤いのが映らなかつたのだ。ラントナックは海岸の一點を占領して、それを宰相ピットの手に渡すといふことしか考へてゐなかつた。それから、ドールに防備なしと見るや、直ちにそこに殺到した。ドールの町を占領すればドール山が手に落ちる、ドール山が手に落ちれば海岸が占領出来る見込だつたからである。確かに眼のつけ所はよかつた。ドール山に砲列を布けば、フレスノアからサン・ブレラードの方まで掃蕩することが出来、カンカール巡洋艦隊をずつと遠くに引離してしまへるから、ラズ・シユール・クースノンからサン・メロアル・デ・ゾンドに至る海岸線全體は、どこからでも安心して上陸が出来るやうになるのだ。ラントナックはこの乾坤一擲の計畫を是が非でも貫徹せねばといふ意氣込で、全軍から選りすぐつた精銳六千餘名と、十六種砲十門、八種砲一門、彈丸四斤づゝ携帯した聯隊の一部、即ち砲兵隊

の全部を提げて進んだ。彼はドール山上に堅固な砲臺を築かうとした。十門から發射する千發の彈丸は、敵が五門の大砲で千五百發射つよりも手應へがあるといふ勘定を土臺にしてかゝつた。成功は疑ひなしと見られた。こちらは六千人ゐる。それに敵は、アヴランシユにゐるゴーヴァンが千五百の部下を率ゐてゐるのと、レシエルがディオナンにゐるだけだ。レシエルの兵力は實數二萬五千に達してゐるが、それは二十里も先にゐるのだ。そこで、ラントナックは大丈夫だと思つた。レシエルの方は兵力は多いが、距離が遠いので相殺されるし、近くにゐるゴーヴァンは兵力が少いので差引になる。

そこでラントナックの方は絶対に安全なものと思込んでゐた。そして、突如破竹の勢でドールに進入した。ラントナック侯爵は前から、慈悲心がないといふ恐ろしい評判を立てられてゐた。それで町の人々は少しも抵抗しなかつた。顛へ上つた住民はみな逃げ込んで、家の中へ立籠つた。六千のヴァンデー軍は町の中に屯營したが、田舎者の騒々しさで、上を下への大混雑である。市場のやうにゴツタ返してゐる中を、給養班もなく、割當てられた兵舎もないので、百姓軍は勝手に野營したり、青天井の下で煮炊をしたり、お祈りの數珠の邪魔になる鐵砲を放つたらかして、そちこちの教會堂へ入り込んだり、大騒ぎをしてゐた。ラントナックは數名の砲兵士官を従へ、後は侯爵自身が高級武官に任命したダージュ・ル・ブリュアンに委せて、急いでドール山の偵察に向つた。

このダージュ・ル・ブリュアンは二つの綽名を持つてゐる。一つは「青軍の粉碎者」、これは愛國黨

員を片つ端からぶち殺したからで、もう一つはイマニユスといふ。それは、彼が何ともいへぬ恐ろしい形相をしてゐるからだ。イマニユスといふのは下ノルマンの古語イマニスから轉化した語で、その恐ろしさは人間界のことゝも思はれぬ「超人的な醜惡」といふ意味であるが、よく惡魔や半人半山羊の神や喰人鬼などを表すのに用ひられる。ヴァンデーの人々は一般に開けてゐなかつたが、このグー・ジュル・ブリュアンに至つては純然たる野蠻人であつた。彼は十字架と百合の花の入墨をしてゐり、西印度諸島あたりの酋長然たる男であつた。その顔は、他の人間には類のない、不氣味な超自然ともいふべき光を帯びてゐる。彼は戦争にかけては惡魔のやうに勇猛であり、更に進むと鬼畜の如く狂暴さを發揮する。彼の全身には恐ろしい邪惡が纏れ合ひ、その殘忍性に至つては實に言語に絶する。イマニユスといふ不思議な綽名はそこから起つたのである。ラントナック侯爵はその殘忍性に信頼したのだ。

軍人といふよりは寧ろ喧嘩屋といつた風のグー・ジュル・ブリュアンは、町を守備したりするよりも敵の首を刎ねる方が柄にはまつてゐる。それでも流石に前哨だけは配置して置いた。夜の帳が下り始めた頃、ラントナック侯は砲臺の位置もちやんと決定して、ドール町への歸途に就いてゐた。その時、突然大砲の響が聞えた。彼は思はず町の方を眺めた。と、眞赤な煙が町の大通から立昇つてゐる。正しく奇襲だ、亂入だ、敵襲だ。町では既に戦闘が始まつてゐたのだ。ラントナックは駭くどころか、殆ど知覺を失はんばかりになつた。まさかこんなことにならうと

は夢にも思はなかつた。が、襲撃して來たのは一體何人だらう？ それは、斷然ゴーヴァンぢやない。四倍もある敵に對ひかゝるやうな人間は居る筈がない。ではレシエルかしら？ しかし、そんな強行軍が出来るものか！ さうとすれば、恐らくレシエルでもなささうだ。といつて、ゴーヴァンがやつて來るなどいふことは、斷じてあり得ない。

ラントナックは馬を急がせた。しばらくすると住民が續々と避難して來るのに出會つた。ラントナックは彼等に様子を尋ねてみたが、避難民は恐怖の餘り狂人のやうになつて、たゞ「青軍だ！ 青軍だ！」と喚いてゐた。彼がいよいよ到着した時、形勢は既に頗る不利になつてゐた。これまでが、ドールの町に起つた事件の經過である。

三、小軍と大戦争

もう少し前に述べたやうに、ドールの町に着いた百姓達は町中に散らばつてしまひ、軍隊が「親密な仲で服従する」時のやうな具合に、思ひ／＼に勝手なことをしてゐた。「親密な仲で服従する」といふのはヴァンデー人のよく使ふ言葉で、兵卒式の服従ではない、英雄のやうな一種の服従のことである。彼等は、大砲を道路から引込め、古めかしい市場の圓天井の下に荷物と一緒に投げ込んだ。一同はみんな疲れてゐた。飲んだり食つたりする者、數珠を爪操る者、大通りの眞中に無暗にゴロ寝する者、——これでは、町を守るといふより道路を塞いでゐるやうなものだ。夜になると、大部分の者

は背囊を枕に眠についた。中には女房と一緒に寝てゐる者もある。といふのは、百姓の女房達はよく亭主に従って出征したものだからで、その中でも身體の丈夫な者は間諜の役も勤めてゐた。

それは七月の和やかな夜であつた。星は濃紫色の空に輝いてゐる。軍隊の野營といふよりは隊商の休憩と云ひたいこの露營の人々は、平和な夢路を辿り始めた。その時突然、夕闇の中に三門の大砲が大通の入口に向けて据ゑられるたが、まだ眠に落ちなかつた人々の眼に映つた。

それはゴーヴァンの砲兵であつた。彼は前哨に不意討を喰はせた。そして直ちに町の中に進入し、部下の一隊は既に道路の一端を占領してゐたのだ。

一人の百姓は起ち上つて、「そこへやつて来たのは誰だ？」と叫んだ。そして一發ドンと發砲した。その返禮に、敵は大砲を一發打放した。それに續いて猛烈な小銃の一齊射撃が始まつた。うとくしてゐた鳥合の衆は吃驚して飛び起きた。激しい動搖が起る。かくして、星の下に眠つてゐた彼等は榴霰彈の下に眼を醒ましたのだ。

最初の瞬間は實に眼も當てられなかつた。恐怖に打たれた群衆が周章狼狽するほど惨めなものはない。彼等は先を争つて武器を置いてある所へ飛んで行つた。大聲を擧げる者、中には倒れる者もある。不意を討たれた百姓達は、自分が何をしようとしたのか度忘れしてしまつて、盲滅法に同志討を始めた。膽を潰した住民は、家の中から飛び出す者、慌て、逃げ込む者、半狂亂になつて混亂の渦に捲き込まれて行く者もあつた。一家の者はお互に名を呼び合つた。それは女子供の雜つた悼ましい

戰爭であつた。砲彈は恐ろしい唸を發し、闇の中に閃々たる光芒を曳いて飛び交ふ。闇の中の一齊射撃は四方八方から起る。あたりは渦巻く硝煙と、耳を聳する喧騒に包まれてしまつた。かて、加へて、荷馬車や砲車の亂れ飛ぶ音は一入喧騒を激しくし、馬は狂奔して手に負へなくなり、負傷した者は無慘にも馬蹄に踏みにじられた。救の望もなく地に倒れてゐる哀れな人々の呻き聲が、一時にそこ此處から起る。見渡す限り、何處も彼處も恐ろしい修羅場である。兵士と士官とは闇の中でお互に捜し合つてゐた。この阿鼻叫喚の眞唯中に、傍眼も觸らず自分の勤めに氣を取られてゐる人達がある。一人の女は、足をやられた夫の兎掛つてゐる壁の端に腰をかけて、乳呑兒をあやしてゐた。彼は滾々と血が流れ出るのも構はず、落ちて着き拂つて弾丸をこめては、當てずつぽうに闇の中へ打放してゐた。男達は地面に腹ばひになり、荷馬車の車軸の間から射つてゐた。時々恐ろしいとよめきが起つたが、股々たる大砲の響はすべてを壓してしまふ。實に身の毛もよだつ光景であつた。人々は木を打倒したやうに、次から次へと折重なつて倒れた。ゴーヴァンの軍は、陣地から身體を出さずに猛烈なる銃火を浴せかける。そのために、死傷者は殆ど出なかつた。

しかし、この混亂の中を健氣に戦つた百姓達も、遂には守勢をとらねばならなくなつた。彼等は市場の建物の中に退却した。そこは石の柱の林立した、眞暗でだゞつ廣い角面堡である。彼等はそこで踏堪へようとした。何でも森に似たやうなものがあると自信がつくと見える。イマニユスはラントナックの留守の責任を全うしようと、必死になつて努力した。百姓軍は大砲を持つてゐたのだが、ゴ

ヴァンの奇襲に對して、直ぐにそれを使ふことが出来なかつた。それは砲兵士官がみなラントナックのお供でドール山偵察に出拂つてをり、残つた兵は大砲の操方を知らなかつたからだ。砲撃を加へてゐる青軍では、大砲の應射がないので變に思つてゐた。百姓達は榴霰弾に對して小銃の一斉射撃で應射した。百姓達は荷車や二輪手車、その他この古い建物の中に轉がつてゐる、ありとあらゆるがらくたを掻き集め、それを積み重ねて高い防塞を築き、その隙間から澤山の騎銃を覗かせた。僅か十五分ばかりの間に、市場の建物は一變して難攻不落の堡壘となつた。

これはゴーヴァンにとつては一大事である。市場が忽然として城砦に變ずるなどいふことは、全然豫想もしない出来事であつた。しかも、その内部には澤山の百姓が立籠つてゐるのだ。ゴーヴァンは奇襲には成功したが、うっかりすると全滅の憂目に會ふ危険がある。彼は腕組した一方の手に軍刀を握り、味方の砲兵陣地を照らす松明の光の中に立つて、念入りに闇の中を透かして見てゐた。

松明に照らされた彼の長身は、防塞の中の人々には好い目標となつた。が、當人は一向それに氣づかなかつた。

防塞からは雨のやうに彈丸が注がれた。それが、突つ立つたまま、何か考へに耽つてゐるゴーヴァンの周圍に落ちた。

しかし彼等の騎銃をみんな束にしたところで、ゴーヴァンの大砲には敵はない。そして、大砲は常に有利に戦争の幕を閉ぢる。勝利は大砲を持つてゐる者の手に歸するのだ。

その時突如暗闇の市場の中から、電光のやうな閃きが起つた。と、雷のやうな凄じい音がして、砲弾はゴーヴァンの頭上の建物に大孔をあけた。

防塞もゴーヴァンの大砲に對抗するためには砲撃を始めたのだ。さうすると、どういふことになるか？　そこに、一つの新しい局面が展開されたのだ。即ち砲兵は、今は片つ方だけでは無いといふことになつたのだ。

引續いて第二弾が飛んで來た。そしてゴーヴァンの眞近の壁に喰込んだ。三發目は彼の帽子を地面へ叩き落した。

この砲弾はみな大口徑のものであつた。ヴァンデー軍が火蓋を切つたのは十六連砲である。「司令官殿、奴等は闇下を狙つてゐます」と、砲手達が叫んだ。

そして松明を消した。ぼんやりと考へ込んでゐたゴーヴァンは、叩き落された帽子を拾ひ上げた。實際ゴーヴァンを狙つてゐる者はあつた。それは他ならぬラントナックその人である。侯爵が道路の向側から防塞へ入つて來るなり、イマニユスは急いで既寄つた。

「闇下、奇襲を受けました」

「誰に？」

「知りません」

「デイナンの街道は大丈夫か？」

「大丈夫だと思ひます」

「退却を開始しなけりやならぬ」

「もう始まつてゐます。逃げた者は随分澤山あります」

「逃げちやいかん。後へ退くのだ。大砲は何故使はぬか？」

「みな面喰つてゐるんです。それに士官がゐませんから」

「わしがゐる」

「閣下、荷物とか女とか、その他手足纏ひになるものはみなフージェルへ送るやうに、出来るだけの手配をつけて置きました。あの三人の小さい捕虜はどう取計らひませう？」

「あゝ！ あの子供達か？」

「はい」

「あれは人質だ。ラ・トゥールグへ送つて置け」

かういつて、侯爵は防塞の方へ走り寄つた。司令官が見えたので、みんなの顔色は一時に變つた。防塞の作り方は、砲兵のためには都合が悪く、内部には二門しか据ゑる餘地がなかつた。侯爵はそこに十六種砲二門を据ゑ、防塞に大きな銃眼を作らせた。そして、その一門の砲に身をかがめて、銃眼の間から敵の砲兵陣地を觀測してゐる時、彼は圖らずもゴーヴァンの姿を見附けた。

「奴がゐるぞつ！」 侯爵は叫んだ。

そして、自分から大砲の砲掃と裝填杖を握り、砲彈を裝填し、照準を定めて、一發發射した。かうして三度ゴーヴァンを狙つたが、三度とも外れ、三發目が辛うじて彼の帽子を叩き落したただけであつた。

「下手糞だな！」 ラントナックは低い聲で吐出すやうにいつた。「もう少し下を狙ひや、首をぶつ飛ばせるんだつたが」

忽ち松明が消えて、たゞ見る一面の眞暗闇となつてしまつた。

「まあ、仕方がない」 さういつて、彼は百姓の砲手達のはうを振り返り、「さあ、お前達が射つんだぞ！」 と叫んだ。

ゴーヴァンの方も、それに劣らず必死になつてゐた。形勢は益々險惡となり、新局面は眼のあたりを展開されてゐる。それは、防塞が大砲を使ひ始めたことだ。敵が守勢を棄て、攻勢に轉じないと誰が斷言出来るやう？ 敵は戦死者や逃亡兵を差引いても、まだ優に五千の兵を握つてゐる。それに味方で役に立つ者は千二百人しか残つてゐない。もし敵にこの手薄なところを看破られたら、共和黨軍は果してどうなるだらう？ 敵味方の立場は俄に轉倒した。

さあ、どうしたらいいのか？ 正面から防塞を攻撃することは、もう思ひ切らねばならない。全軍を率ゐて突進するといふことも無意味な話だ。しかしこちらから襲撃が不可能だといつて、ちつとしてゐたらそれこそお終ひだ。こゝはどうあつても、一擧に雌雄を決すべきところだ。

ゴーヴァンはこの近隣の生れで、町の様子はよく知つてゐる。それで、ヴァンデー軍が立籠つてゐる古い市場の裏側は、狭い廻りくねつた小路が迷路のやうにこんがらかつてゐることも知つてゐた。彼は副官の方を振り返つた。その副官は勇名の高いゲシャン大尉で、後に、ジャン・シューアンが生れたコンシーズの森を掃蕩したり、シェーヌ河の提防で叛徒を喰ひ止め、ブルヌッフの占領を防いで名を擧げた人である。ゴーヴァンはこの副官に命令した。

「ゲシャン、お前は指揮官として此處に残つてをれ。出来るだけの速力で砲撃を續けてくれ。猛烈に防塞を砲撃して、敵の奴等の注意を集めて呉れ」

「承知いたしました」と、ゲシャンは答へた。

「全軍を纏め、武装を充分にさせて、攻撃の準備をして呉れ」

さういつてから、ゴーヴァンはゲシャンの肩に口を寄せて二言三言付け加へた。

「畏まりました」と、ゲシャンは首肯した。

ゴーヴァンは更に言葉を續けて、「鼓手はみんな用意が出来てゐるか？」

「はい」

「鼓手は九人ゐたね。二人だけは置いておくとして、七人借りるよ」

「七人の鼓手は黙つてゴーヴァンの前に整列した。」

「赤頭 布大隊の者！」ゴーヴァンは聲を張り上げて呼んだ。

聲に應じて、十二人の兵士が列中から進み出た。その中には軍曹が一人ゐた。

「俺は全大隊を呼んだのだ」と、ゴーヴァンがいつた。

「此處にゐるだけです」と、軍曹は答へた。

「お前達は十二人きりか！」

「残つてゐるのは十二人きりであります」

「よろしい！」と、ゴーヴァンはいつた。

この軍曹は、ラ・ソードレーの森で出會つた三人の子供を大隊の名に於て養子にした、あの人の善い荒武者ラドゥーブである。エルブ・アン・バイユで大隊の半分まで殺られた時、ラドゥーブが運よくその難を免れた話は、まだ讀者の記憶にあることと思ふ。

秣を運ぶ車が近くにあつた。ゴーヴァンはそれを指して軍曹に命令した。

「軍曹、兵士達に綱を縛らせて、それを銃に巻きつけ、ぶつかつても音がしないやうにするんだ」

一分もたつたかたゝぬに、兵士達は無言のまま、暗闇の中でその命令を實行した。

「出来ました」と、軍曹がいつた。

「お前達、靴を脱げ」ゴーヴァンが命令した。

「私達は靴を穿いてないんです」と、軍曹が答へた。

準備は終つた。鼓手七名を合せて總勢十九人、ゴーヴァンを入れると二十名である。

「一列になつて俺に従いて来い。鼓手は俺の後へ、赤頭布大隊の者はその後へ。それから軍曹、お前は大隊の指揮をするんだぞ」

彼は命令を下して、一隊の先頭に立つた。兩軍が砲撃を交へてゐる間に、この二十人は影の如く滑り出で、人影もない小路の中へと紛れ込んだ。一隊は人家の間を廻りくねつて暫くの間進んで行つた。町全體は死んだやうになつてゐた。住民達はみな家々の窓に隠れ、扉といふ扉、鎧戸といふ鎧戸は悉く締め切られ、どこを見渡しても灯の光一つ見えない。

しかし大通では、この沈黙を破つて砲弾が猛烈に炸裂してゐた。砲戦は依然として止まない。共和黨軍の砲兵と王黨軍の防塞とは、砲口から火を迸らせつゝ、益々激しく射ち合つてゐる。

ゴーヴァンは闇の中を道も間違へず、くねくね廻つて、二十分の後には大通に出る小路の角まで来た。が、それは市場の反対側に出る小路である。

ゴーヴァンの位置はすつかり變つた。いかな防塞建築家もそこまでは氣がつかかなかつたので、こちらの側には何の障碍物もない。市場は明つ放しになつてゐるので、出發準備を整へた何臺かの荷車が並んでゐる柱の間から、何の苦もなく入り込むことが出来た。かくて、ゴーヴァンとその部下十九名は五千のヴァンデー軍の前に立現れた、但し直正面からではなくてその背後から。

ゴーヴァンは低聲で、銃に巻きつけた薬を解くやうに軍曹に命令した。十二人の擲弾兵は一列になり、小路の曲角の手に陣取つた。七人の鼓手は撥を高く上げて、命令一下を待つてゐる。兩軍の

砲撃がちよつと杜絶へた。この隙にとばかり、ゴーヴァンは劍を打振り、突如破れるやうな大聲で周囲の沈黙を破つた。

「二百人は右から、二百人は左から、残りの者は全部正面から突撃！」

十二發の小銃は發射され、七つの太鼓は突撃の急調を打ち鳴らした。

ゴーヴァンは、こゝぞと青軍獨特の恐るべき関の聲を擧げた。

「着剣してゐるか？ 突込め！」

結果は實に素晴らしいものであつた。

百姓達の大隊は背面から不意討を食はされたのに氣がついた。しかも、その背後からやつて来たのは新手の軍だと思ひ込んだ。と、その瞬間、また別の方角から太鼓の響が起つて、大通の入口を扼してゐたゲシャンの率ゐる一隊が動き始めた。と思ふうちに、物凄いい喊聲があがると、全軍は非常な勢で防塞に突進して来た。百姓達は腹背に敵を受けたなと思つた。狼狽といふものは何でも物事を大袈裟にする。だから、ピストルの音も大砲の響のやうに聞える。なほこの百姓達は、薬屋根に火の廻るやうに直ぐ恐怖に打たれるといふことゝ、薬屋が燃えたと忽ち大火事になるやうに、百姓達の周章狼狽は忽ち潰走になるといふ事實を附加へて置かう。言語に絶する大混亂の裡に、その潰走が始まつたのだ。

數秒の間に市場の中はがら空になつてしまつた。度を失つた若者共は忽ちばらばらになつた。かう

なつては士官の力も及ばない。イマニユスは二三人の逃亡者を叩き斬つたが、それも無駄であつた。聞えるのはたゞ「助けてくれ！」といふ悲鳴だけである。かくして全軍は、節の孔を抜ける水のやうに、町のあらゆる小路を走り抜け、旋風に吹拂はれた黒雲のやうな速さで、村へ村へとちり／＼に落ち延びて行つた。或る者はシャトーヌッフの方へ、或る者はブルルゲの方へ、また或る者はアントランの方へと思ひ思ひに逃げ去つた。

ラントナック侯爵は黙つてこの敗走を見守つてゐた。それから自分の手で大砲の火門に大釘を打つて使へぬやうにし、それから初めて悠々と退却した。すべての事が終つた後に、泰然自若として、靜かに眩きながら、――

「百姓達は斷然駄目だ。どうしても英吉利軍が必要だわい」

四、これで二度目だ

それは徹底的な勝利であつた。

ゴーヴァンは赤頭布大隊の兵士達を顧みていつた。

「お前達は十二人だが、千人にも匹敵する」

司令官のお賞めの言葉は、この場合金鷄勳章にも優るものであつた。

ゴーヴァンの命を受けて、遠くまで敗走者を追撃して行つたゲシャンは、多数の捕虜を捉へて歸つ

て來た。松明は明々と照らされ、町は隅々まで搜索された。

逃げ後れた者は悉く降伏した。ゴーヴァンの軍は火壺に火を焚いて大通を隈なく照らした。路上には死者や負傷者が折重なつて倒れてゐる。戦の終りには、返つて恐ろしい亂闘が起るものだ。

此處彼處には數人づゝが一團になつて、夢我夢中になつて抵抗を續けてゐる。が、それはやがて次々に取り圍まれ、遂に悉く武器を投げ捨て、降参した。

ゴーヴァンはこの算を亂して潰走する大混亂の中に、いかにも輕快で身體の頑丈な、そして度胸の好い一人の男を見つけた。その百姓は他人の逃げるのを助けながら、自分は逃げようともしない。餘

ほどひどく射ちまくつたものと見えて銃身は眞赤に焼け、銃床は打壞れて役に立たなくなつてゐた。鐵砲が駄目になつたので、今度は片手にピストルを握り、片手に劍を握んでゐる。この男にだけは誰

も近寄らうとする者がない。大通に立つてゐる柱を背にした彼の姿は、ふとゴーヴァンの眼に留まつた。彼はほんのちよつと前に負傷してゐた。が、ピストルと劍はどうしても手から放さない。ゴーヴァ

ンは劍を腕の下にして彼の方に近づいた。

「降伏しろ」ゴーヴァンがさういつた。

その男はデツと彼の顔を凝視めた。傷口から流れ出る血は服の下を傳はり、足許に溜つてその邊が

べト／＼になつてゐる。

「貴様は捕虜だぞ」ゴーヴァンが重ねて怒鳴つた。男は相變らず無言のまゝである。

「貴様は何といふんだ？」

男は初めて口を開いた。「俺はダンス・ア・ロンブル（譯註「影のダンサー」）つていふんだ」

「貴様はなかく勇敢な奴だな」といつて、ゴーヴァンは握手をするために手を差延べた。

「國王萬歳！」男は突然大聲を張上げた。そして、聴かに残る力を揮つて兩手を一緒に振上げ、ゴーヴァンの心臓眼裏かけてピストルを放つと同時に、頭に一太刀浴せた。

それは實に猛虎のやうな早業であつた。が、それよりもつと素早い者が他にあつた。それはほんの數秒前、誰も氣がつかずにゐる間に、馬で乗りつけた人である。彼はそのヴァンデー人がピストルと劍を振り上げたのを見て、矢庭にゴーヴァンと彼の間へ飛び込んで行つたのだ。もしこの人がゐなかつたなら、ゴーヴァンは確かに殺されてゐたに違ひない。中に割つて入つた男の馬はピストルの彈丸を受け、人は一太刀を浴びて、人馬共ドツと其場に倒れた。すべてはあつといふ間もない、一瞬間の出来事であつた。ヴァンデー人もまた力盡きて鋪石の上に倒れた。

斬られた人は、顔を眞向からやられたのでばつたり倒れたまゝ氣絶し、馬はたゞ一發で即死した。ゴーヴァンは近づいて、「この人は一體誰だらう？」といつた。

そしてデツとその顔を眺めた。傷口から溢れ出る鮮血は顔一面に擴がつて、まるで面でも冠せたやうになつた。で、顔の見別けはどうしてもつかかなかつたが、たゞ髪が白いといふことだけは判つた。「この方は俺の命を助けて下さつたんだ。誰かこの方を知つてゐる者はゐないか？」と周圍を見廻した。

した。

「司令官殿、この方はたつた今町へ入つて來られたばかりです。私は來るところを見ました。ボントルソンの街道から來られたんです」と、兵卒の一人が答へた。

軍醫長が醫療鞆を持つて駆けつけた。負傷者はまだ正氣に歸らない。軍醫は一通り診斷してからいつた。

「たゞの斬傷です。心配することはない。傷口を縫つたら八日ぐらゐで歩けるやうになります。だが、實に鮮かに斬られたものだなあ」

その負傷者はマントを着、三色の劍帶を締め、ピストル二挺と軍刀とを持つてゐた。やがて擔架の上に乗せられ、衣服を脱がされた。そして新鮮な水がバケツで一杯運ばれると、軍醫は傷口を洗ひにかゝつた。顔が次第に見え始める。ゴーヴァンは全身の注意を集めて、一心にその顔を見入つてゐた。

「その方は何か紙片を持つてゐないか？」ゴーヴァンは尋ねた。

軍醫はその人の上衣のポケットを探つて紙入を取出し、ゴーヴァンに差出した。

さうからしてゐる間に、負傷者は冷水の御蔭で息を吹返して來たらしい。臉が微かに動いた。

ゴーヴァンはこの紙入の中を探した。その中から四つ折になつた一枚の紙片が見つかった。彼は直ぐにそれを開いて讀んで見た

「公安委員シムールダン市民を……」ゴーヴァンは思はず膝を擧げた。「シムールダン！」
負傷者もその叫び聲に驚いて眼を開いた。ゴーヴァンは氣も狂はんばかりになつて、
「シムールダンだ！ 確かにさうだ！ あなたが命を救つて呉れたのは、これで二度目だ」
シムールダンもゴーヴァンの方を凝視めた。血塗ろの顔には得もいはいはれぬ喜びの輝きが差した。
「先生！」ゴーヴァンは、思はず叫びながらその傍に跪いた。
「俺はお父さんだよ」シムールダンは靜かに口を開いた。

五、冷たい水滴

二人は長いこと會はなかつたが、お互の心は決して離れてゐなかつた。二人は丁度昨夕別れたばかりの人のやうによく見識つてゐた。

ドールの町役場が臨時野戦病院に充てられた。シムールダンはその病院の小さな一室の寢臺に搬ばれた。隣りは澤山の負傷者を收容した大きな共同病室である。傷口を縫ひ終つた軍醫は、二人の昂奮状態を見て、これはシムールダンを一人にして睡眠をとらせねばならないと考へた。それに、ゴーヴァンは、戦勝の後のいろ／＼な處置とか今後の方針とか、雑多な用務が山積してゐるので、いつまでも附添つてゐるわけにも行かなかつた。シムールダンは獨りぼつちになつた。が、彼は睡らなかつた。彼は今二つの熱に浮かされてゐるのだ、傷の熱と、喜びの熱とに。

彼は眠らなかつた。が、自分では眼が醒めてゐるとも思へなかつた。多年の夢が現になつて現れるなどいふことはあり得るだらうか？ が、シムールダンはやう／＼ゴーヴァンを見つけ出したのだ。別れた時は子供であつたが、今度會つた時には立派に成人してゐる。しかも大きな、恐ろしい豪膽な男になつてゐる。ゴーヴァンは今や輝く勝利者であり、民衆の爲に勝利を齎した大立者だ。ゴーヴァンはヴァンデーに於ける革命の大黒柱であるが、この大勢力を共和國に加へた者は、實に彼シムールダンであつた。この勝利者は彼の生徒だつたのだ。ゴーヴァンは將來共和國のパンテオンに祀らるべき人であらう。しかも、その若々しい顔に輝く光は、——それをシムールダンは見逃さなかつたが、それは正しく彼シムールダンの思想そのものであつた。——その門弟、彼の精神の子ゴーヴァンは既に立派な英雄として馳驅してゐるが、やがては偉大な榮光をいたゞくであらう。シムールダンは、自分の魂がゴーヴァンのうちに祀られてゐるやうな感じがしてならなかつた。

シムールダンは今し方の冒険で昂奮が鎮まり切らぬところへ、傷の痛みでどうしても眠れずにあつたが、その中いつの間にか、不思議な夢でも見てゐるやうな氣持に誘ひ込まれてゐた。そこには、燦然たる若々しい運命が豪勢に頭を擡げてゐる。しかも喜ばしいことには、その燦然たる運命に對して、自分が一切の權力を握つてゐるのだ。ゴーヴァンは彼が今眼のあたり見たやうな成功をまた繰返すだらう。さうすれば、共和國をしてゴーヴァンに全軍を托させるには、自分が長々と口を利く必要もないほどだ。徹底的な勝利ほど人眼を眩惑するものはない。それは誰でも武勳の夢に憧憬を持つてゐた

尙武の時代であつた。一方の領袖達は、何れも自分の下から將軍を出したいと思つてゐた。ダントンはウエステルマンを、マラーはロシニヨールを、エペールはロンサンを任命したがつてゐた。ロベスピエールは反對にその人達を全部排けようとしてゐた。

「どうしてゴーヴァンだけは排けないのだらう？」シムールダンは呟いて、心の中に夢を描き始めた。

空想の世界は無限に擴がつて行く。次から次へと、いろ／＼な想像を逞うして見る。さうしてゐる中に一切の障碍は消え失せてしまつた。一度空想の梯子に足をかけたが最後、どんな人でも一所に止つてゐることは出来ない。それはたゞ無限の上昇である。大地から踏み出して、遂に星の世界にまで昇つて行くのだ。大將軍と雖もたゞ軍隊の指揮官たるに過ぎない。眞の大首領は、同時に思想を持つた指導者でなければならぬ。シムールダンは、ゴーヴァンをさういふ大首領と見て想像を逞うしてゐた。夢想は恐ろしく飛躍する——。ゴーヴァンはやがて大洋で英吉利軍を追散らしてゐる、ラインでは北方の諸國王を懲しめ、ピレネーでは西班牙軍を破り、アルプスでは羅馬に蹶起を促がす相圖をしてゐる。シムールダンの中には二人の人間が住つてゐた。一方は優しく、一方は峻厳な性格だが、今はそれが兩方とも満足させられた。といふのは、どこまでも假借なくやる人物たることを理想とする彼が、今眼のあたりゴーヴァンの優しい平面と同時に恐ろしい平面をも見せられたからである。シムールダンは、ゴーヴァンが光の胸當を當て、鬨を蹴散らし、手には劍を振りかざして、流

星の如く輝く顔に、正義と理性と進歩の理想の鵬翼を張つた姿を想像してみた。それは正しく天使の姿だ、と同時に、殺戮者の相でもあつた。

シムールダンがかうして夢想の三昧境に侵つてゐる時、半分開かれた扉の隙から、隣りの共同病室の話し声が洩れて來た。それは確かにゴーヴァンの聲だ。長い年月の間姿は見なかつたけれども、その聲だけは常に彼の耳底に残つてゐた。しかも、大好きだつた子供の聲の調子が、大人になつた今でもまだ残つてゐるのであつた。シムールダンは思はず聴耳を立てた。兵隊達の聲音が聞えて、一人の兵卒の聲がした。

「閣下、此奴が閣下を撃つた奴です。歩哨があなかつたので、穴倉の中に逃げ込んでをりました。そこを私どもが見つけたので、引張つて來ました」

それに續いて、シムールダンは、ゴーヴァンとその男の會話を聞いてゐた。

「お前は負傷してゐるな？」

「結構過ぎるほど達者でさあ、銃殺されるにやあ」

「この男を寢臺に寝かしてやれ。傷に繃帯して、よく看護して癒してやれ」

「俺は死にたいんだ」

「お前の命は助けてやる。お前は王の名に於て俺を殺さうとした。俺は共和國の名に於てお前を助けてやる」

暗い影がサツとシムールダンの額を掠めた。彼は飛び上るほど驚いた。そして、喪心したやうな暗い氣持で呟いた。

「なるほど、彼も慈悲深い組の一人だな」

六、癒えた傷、悩む胸

斬傷は間もなく癒つた。しかし、シールダンよりももつと傷の重い者がある……。それは乞食のテルマルシュがエルブ・アン・パイユの小作地の血の海から救ひ出した、あの銃殺された女であつた。

ミシエル・フレシャールはテルマルシュが思つたよりは重態であつた。胸の上部から肩胛骨にかけて貫通銃創があり、一弾は鎖骨を粉碎し、もう一弾は肩を貫いてゐる。が、肺臓には觸れてゐないから、生命だけは取止めるかも知れない。テルマルシュは「哲學者」である。これは百姓の言葉で、ちよつと醫者の心得もあれば外科醫の眞似もやり、また魔法使めいたところもあるといつたやうな人間を指してさう呼んでゐたのだ。彼は女を森の隠れ家へ搬んで来て、海藻の寢床の上に寝かし「藥草」と稱する怪しげな藥を用ひて手當をしてやつた。そのお蔭で、彼女はやつと息を吹返した。

折れた鎖骨は元通り癒着し、胸と肩の孔は塞がつた。五六週間も立つ中に、傷は殆んど癒つた。或る朝、彼女はテルマルシュに扶けられながら、隠れ家を出て日の光を浴びた樹の下に坐つた。テ

ルマルシュは女の身の上についてはなんにも知らなかつた。女は胸の傷が痛むので口を利くことが出来ない。傷の疼くあの死ぬやうな苦痛の間、女は殆んど一言も口が利けなかつた。女がなんとかして口を利かうとすると、テルマルシュはそれを制めた。だが、女はたゞ一途に思ひ詰めてゐた。テルマルシュは、胸を掻きむしるやうな暗い影が絶えず女の眼に往來してゐたのを見てとつた。しかし、その朝は女は非常に元氣で、殆んど一人歩きが出来るほどであつた。治療といふものは父のやうなものである。テルマルシュは彼女を眺めては嬉しさにしてゐた。好々爺の爺さんは、ニコ／＼しながら女に話しかけた。

「もう立つてゐられるやうになつたね。傷はすつかり癒つちやつた」

「心の傷の外はねえ」女はさういつて、また言葉を續けた。

「ぢやあ、お前さんはあれ等が何處にゐるか、何も知らないんですね」

「そりや誰の事だね？」テルマルシュは訊ねた。

「わたしの子供達です」

この「ぢやあ」といふ一語は、彼女が何を考へ詰めてゐるかを初めてはつきりさせた。熱の高い時や氣を取り亂した時、誰語の中で女は幾度も子供達の名を呼び、熱のせいで姿でも見えたのか、しきりに子供達を抱き寄せるやうな身振をしてゐたことがあつた。爺さんは黙つてそれを見てゐたのだ。

實際テルマルシュは何といつたらいか判らなかつた。子供等はゐなくなつたといふことを、生み

の母親に聞かせることは容易なことではない。さてそれから後どうなつたか知つてるかといふと、それとも知らないのだ。彼はたゞ一人の子持女が銃殺されたことゝ、その子持女が地上に倒れてゐるのを自分が發見したと、抱上げてやつた時には殆んど死人同様であつたこと、その死骸が三人の子供の母親であること、それからラントナック侯爵が、母親を銃殺した後子供達をどつかへ連れて行つたといふことしか知らなかつたのだ。テルマルシュの聞いた話は其處でふつゝり絶れてゐた。子供達はその後どうなつたであらう？ まだ生きてゐるのかしら？ 聞く所によると、二人の男の子と、やつと乳離れしたばかりの女の子だつたさうな。それ以上の事は何も知つてゐないのだ。

彼はこの不幸な人々について、胸の中でいろ／＼と考へてみたが、どうしても満足な答は得られない。村の人達にも訊ねて見たが、誰も彼も頭を横に振つた。

百姓達は獨特な疑ひを懷いてゐる。彼等はテルマルシュを好いてゐなかつた。物乞ひのテルマルシュは謎のやうな男である。「彼奴は氣狂だ」通行人はさういつた。テルマルシュは孤獨以上の男、爪弾きされてゐた男である。

「わたしの子供達」——この一言を聞いて、テルマルシュはハツと微笑を止めた。母親はまた深い物思ひに沈んだ。その胸の中はどんなであらう？ 彼女は深淵の底に落ち込んだやうに黙りこくつてゐた。と、突然テルマルシュの方を睨めて、腹立たしいやうな語調でまた叫んだ。「わたしの子供達！」テルマルシュは罪人のやうに頭を垂れた。

彼は、先方では自分のことなど考へてもゐなければ、恐らくは存在さへも覺えてゐる筈のないラントナック侯爵のことを考へてゐた。そして、獨りで合點しながら呟いた。

「一人の殿様が、危険なつた時にはお前を認めつけ。だが、咽喉下過ぎればで、お前のことなどはもう覺えてゐないさ」それから、自分自身に尋ねてみた。「だが、それぢやあ、あの時俺は何故あの殿様を助けてやつたんだ？」

そして自分でそれに答へた。「それはあの男も人間だからだ」

それから暫く考へ込んでゐたが、また獨語になつた。「それは確かにさうだつたかな？」

そして心から苦しさに繰返した。——「もしそれを知つてゐたらなあ！」

頭の中が事件で一杯になつた。それは自分のした行爲の中に謎のやうなものがあつたからだ。彼は苦しんで考へ込んだ。立派な行爲も、時によつては罪になる。狼を助ける者は羊を殺すのだ。元鷹の翼を繕ふ者は、その爪の責を負はねばならぬ。

彼は自分こそほんたうにその罪人だと覺つた。この母の無様な怒りも尤もなことだ。しかし、せめてもこの親を救つたといふことは、幾分か侯爵を救つた悩みを和げた。それにしても子供達は？

闇の底に落ちたやうな、憂に沈んだ彼女の視線は、暫くしてびつたりとテルマルシュの顔に止つた。「でも、このまゝにして投つておくことは出来ません」彼女はいつた。

「しつ！」テルマルシュは自分の口に指を當てた。

彼女はそれに追ひすがるやうに、

「あなたが助けて下さつたのが悪かつたのです。わたしはそれをお恨みに思つてます。ほんたうに死んだ方がましでした。そして必ず子供達にも會へたものを。わたしが死ねば、あれ達は何處にゐるかも知るでせう。あの子達にはわたしの顔が見えなくても、わたしは子供達の側へ行つてゐたいんです。死んだ者には、子供達を見てやる力がある筈ですもの」

彼は女の腕をとつて脈を見た。「静かにしなさい。また熱が出ますよ」
女は荒々しい口調で問ひ詰めた。

「わたし、いつになつたらこゝを出て行けるやうになるんですか？」

「出て行くつて？」

「さうよ。歩いて」

「無茶をやるならいつまでも駄目、分別がついたら明日にでも」

「分別がついたらつてどういふこと？」

「神様を信ずることです」

「神様！ あなたはわたしの子供達をどうなさいました？」

彼女はすつかり取亂してゐるやうであつたが、聲は非常に優しくなつた。

「御覽の通り、わたしはこんな風にヂツとしてはゐられないんです。あなたは子供を持つたことがないけど、わたしには子供があります。そこが違ふんです。ほんたうのところ解らなければ、どんな事だつて察しがつくわけはありません。あなたは子供を持つたことがないんでせう、ねえ？」

「うん」と、テルマルシュは答へた。

「わたしは、わたしは子供達の外何も持つてゐなかつたんです。その子供達がゐなくなつては、どうしたらいいか判りません。わたしは子供達がどうしてゐなくなつたのか、誰かに聞いて見たいのです。が、何か起つたに違ひないと思ふんですけれど、わたしには判りません。配偶は殺され、わたしは銃殺、それもこれも、わたしには解らないことばつかしです」

「さあ、また熱が出始めた。もうしやべつちやいけねえ」テルマルシュはいつた。

女は彼の顔を睜めて黙つてしまつた。この日以来、彼女は一言もしやべらなくなつた。

テルマルシュの命令は、望んだ以上に固く守られた。女は老樹の根元にうづくまつて、氣抜けしたやうに長い時間を過すやうになつた。そして相變らず考へ續けては黙りこんでゐる。この沈黙こそ限りない悲しみに捉はれた單純な人々にとつては、人に掻亂されることのない避難所だつたのだ。

テルマルシュはひどく心を動かされて、親身に彼女の様子を見守つた。羸弱い女がこんな苦痛に直面して、どんな氣持がしてゐるだらうと胸の中を案じてやつた。老人は獨語した。

「おゝさうだ、肩は何もいはないが、眼が物をいつてゐる。彼女の考へてゐることはよく判る。た

だ一つの事しか考へてゐないんだ。今までは母であつた。そして今はもうさうではない！今までは乳呑兒の乳母であつた。それも今は過去の夢となつた！それを思ふと、どうしても諦め切れないのだ。彼女はついこの間まであやしてゐたあの一番末の子のことを考へてゐる。彼女はそれを考へ、考へ、いつまでも考へ續けてゐるのだ。あのあどけない薔薇色の肩に觸れたら、全く大人の魂も引摺り込まれるほど可愛いに違ひない。そして、子供は親の命によつて、自然と成人して來るのだ。そして今度はテルマルシュの方が黙り込んだ。こんなに惱んでゐる人の前には、言葉は何の力も無いといふことを考へながら。思ひつめた學句の剛情といふものは恐ろしい。この頑な母の一念を説得するにはどうすればいゝのか？母性は到底説明のつかぬものだ。母性と議論してもなんにもならない。母を崇高にするものはそれなのだ。母は遂には分別を失つてしまふ。母性の本能は神々しい動物性だ。母となればもう女ではなくて、雌である。そしてその子供達は雌の仔獸なのだ。だから、母の中には、理性に比べて劣つてゐると同時に、また勝れたものがあるのだ。母親は犬の嗅覺のやうなものだ。創造の廣大無邊な神祕の意志は母の魂に宿り、それを導いてゐる。これこそ正確さを具へた盲目なのだ。

テルマルシュは今この不幸な女に話し出させようとした。が、それは成功しなかつた。或る時、彼はかう女に話しかけた。

「人間もかう年とつちまつちやしやうがない。私はもう歩けなくなつた。先まで行着かない中にこつ

ちの力が盡きてしまふんだ。ものゝ十五分も歩つた日にや、すつかり參つてしまふんで、何度も休まなくちやならない。こんな身體でさへなけりや、お前さんを送つて行つて上げられるんだがなあ。でも、さうして一緒に行つて上げられないのが、結局いゝ仕合せだらうて。わしが従いて行つたところで、役に立つどころか反つて危険を増すばかりだからな。わしは此處でこそ大目に見て貰つてゐるんだが、革命軍ぢやあ、百姓の兵隊だらうつて疑つてゐる。そして百姓達はまた魔法使だらうつて疑つてゐるんでね」

彼は女の答をまつてゐた。が、女は眼さへも上げなかつた。

思ひ詰めた學句の果は氣狂か、英雄主義に奔るより外はない。だが、この隣れな百姓女は、英雄主義などいふ氣持に堪へ得やうか？どうしてもそんなことはあり得ない。彼女は母たることは出来る、そしてそれがすべてである。彼女は日毎に深い物思ひに沈んで行くばかりであつた。テルマルシュは、絶えず彼女を見張つてゐた。

彼は何か女に仕事を見つけてやらうと思つた。そして、糸と針と指貫を持つて來て與へた。女はとらう何かを縫ひ始めたので、憐れな物乞ひは始めて喜んだ。相變らず物思ひに耽りながらも手は休めなかつた。それは健康の回復した證據だ。氣力も少しづつ回復して來る。彼女は自分の肌着や上衣や靴下などを繕つた。けれどもその眸は冷くどんよりと曇つたまゝであつた。針運ぶ手を動かしながら、淋しい歌を低聲で口ずさんだり、人の名を呟いたりしてゐた。それは恐らく子供達の名前であ

らうが、テルマルシュにははつきり聞えなかつた。或る時はふつと口を噤んで、小鳥の鳴き聲に耳を傾けた。何か消息でも持つて来たのぢやあるまいかといふやうな面持をして。彼女はよく空模様を眺めてゐた。肩が動くと思ふと、何やら低聲でぶつ／＼いつてゐた。女はとう／＼袋を一つ縫ひ上げて、その中に菓を一杯詰め込んだ。或る朝テルマルシュは、彼女が森の茂みの中を見据ゑながら、どつかへ出懸けて行かうとするところを見つけた。

「何處へ行くんだい？」テルマルシュは女に尋ねた。
「あの子供等を探しに参ります」と、女は答へた。
テルマルシュはそれを止めようとはしなかつた。

七、真理の兩極

内亂が走馬燈のやうに激しく展開された數週間の後、フージェールの地方は二人の男の噂で持ち切つてゐた。その二人といふのは同じ仕事に従つてゐながら、つまり相並んで大革命のために戦つてゐながら、お互に睨み合つてゐるといふ人物である。

ヴァンデーの野蠻な戦争はまだ終熄しなかつたが、ヴァンデー軍は既にその地歩を失つてゐた。殊にイレ・ヴィレヌでは、嘗て千五百人の愛國黨の豪勇を掲げ、一擧にしてドールの王黨六千を粉碎

した青年司令官の力によつて、一揆は殆んど屏息した。完全に屏息したとはいへないまでも、少くとも極めて微力な、局限されたものとなつた。それに續いて勝利の報は續々到着し、そのために形勢は著るしく好轉して来た。

局面はかくして次第に變化したが、その時既に妙な葛藤が陣營内に起つてゐた。

ヴァンデーのこの方面では、到る處で共和黨が優勢を維持してゐた。それは疑ふ餘地のないところだ。だが、それはどんな共和黨であつたか？ 勝利の曙光が見えて来た頃から、二つの形の共和黨が表面に現れて来た。一つは恐怖主義の共和黨、もう一つは寛大な政策をとる共和黨で、前者は強力によつて勝利を獲んとし、後者は温情によつて目的を達しようとする。果して何れが勝を制するか？ 協調と非妥協のこの二つの形態は、各々獨得な信望と權力を有する二人の人物によつて代表されてゐる。前者は軍隊の司令官であり、後者は市民委員である。この二人のどつちが遂に勝利を博するであらう？ 二人の人物の中の一方、委員の方は恐るべき背景を持つてゐた。彼は巴里市會からサンテル將軍麾下の諸大隊に宛てた猛烈な命令書、「赦免すべからず、助命すべからず」とを持つて来た。彼はまた、すべての者をその權力の下に置くために、「何人と雖も捕虜となれる叛徒の長を釋放しまたは逃走せしめたる者は死刑に處す」といふ、革命議會の決議を持つてゐた。彼は公安委員の掌中にある全權を有し、すべての者に服従を命令せるその派遣委員の辭令には、ロベスピエールとダントンとマラーとが連署してゐる。この人に對立するもう一方の人物は軍人であり、さういふ權力はなく、た

だ慈悲の力を持つてゐるだけであつた。

彼は敵を懲らす腕と、敵を赦す心としか持つてゐなかつた。彼は勝利者たる自分は敗れた者を宥す権利があると信じてゐた。

このことから、二人の間には表面には現れぬ深刻な反目が起つたのだ。同じく叛軍相手に戦つてゐる二人も、一方は勝利、もう一方は恐怖主義といふ異つた目安を立て、全然違つた雰囲気を作つてゐた。

森の國地方は、何處へ行つてもこの二人の噂で持ち切りであつた。そして、地方民一般の不安を一層強めたのは、こんなに異ふ性格をもつたその二人が、しかもしつかりと結び合つてゐることであつた。二人の敵同志はもとの友人であつた。そして、これほど崇高な、深い同情によつて結びつた友人はまたとないであらう。苛酷な方の男は慈悲深い方の男の命を救ひ、そのためには顔に大きな傷を受けた。一方は死、一方は生、片方は恐怖主義、片方は平和主義——二人は各々その象徴であつたが、しかし二人は深く愛し合つてゐたのだ。これは世にも珍らしいことである。

此の二人の中の一方はゴヴァンで、もう一人はシムールダンである。二人の間には深い友情があつたが、主義の上では憎み合つてゐた。それは丁度一つの靈魂が二つに切離されたやうなもので、ゴヴァンは明かにシムールダンの靈の優しい半面を受け継ぎ、シムールダンは黒い光線だけを殘して置いたやうなものである。だから、最後の點まで押詰めれば、どうし

ても一致しなくなるのだ。この秘められた暗闘も、遂には爆發しないわけには行かなかつた。或る朝、端なくも火蓋は切られた。

「戦況はどんな具合だね？」シムールダンがゴヴァンに話しかけた。

「御存じの筈でせう、私の知つてゐるぐらゐのことは。私はラントナックの軍を潰走させました。残つた者はほんの少ししかありません。ラントナックはそれを引連れて、またフージェールの森へ逃げ込みました。八日以内には完全に包圍する心算です」ゴヴァンは答へた。

「そして十五日後には？」

「必ず逮捕します」

「それから？」

「あなたは私の布告を御覽になつたでせう？」

「あゝ、だから？」

「銃殺するのです」

「それは手温い。斷頭臺にかけなけりやいかん」

「私としては、軍律に従つて銃殺したいと思ふんです」と、ゴヴァンはいつた。

「僕は、革命流の死刑に處したいんだ」シムールダンはさういつて、ゴヴァンを正面から見据へ、
「お前は何故サン・マルク・ル・ブラン修道院の尼達を釋放させたんだね？」

「私は女共と戦争してゐるんぢやありません」と、ゴーヴァンは答へた。
「あの女どもは民衆を憎んでゐる。女の憎しみといふものは、男十人力にも匹敵するからね。何故お前はルーヴィニエで捕まつた、あの老耄れの氣狂ひ坊主どもを革命裁判所に送ることを拒んだんだね？」

「私は老人共と戦争してゐるのぢやありません」

「年とつた坊主は若い奴よりずつといけない。白髪の老人共が宣傳して廻ると、叛徒は益々悪化する。民衆は敵を有難がるものだからね。ゴーヴァン、お門違ひの慈悲をかけちやいかんよ。弑逆者こそ眞の解放者なんだ。タンブルの塔から眼を離しちやいけない」

「タンブルの塔！ それぢや、私はそこから皇子を出しませう。私は子供と戦争してゐるのぢやありません」

シムールダンの眼は峻しくなつた。

「ゴーヴァン、氣をつけて呉れ。例へ女であつても、それがマリイ・アントアネット（譯註）ルイ十六世の后で幼弱の皇太子ルイと共に一家タンブル塔に幽閉さる）といふ名だつたら、女とも戦はねばならぬ。老人であつてもそれが法皇バイアス六世といふ名だつたら、老人とも戦はねばならぬ。ルイ・カベといふ名だつたら例へ子供であつても戦はねばならぬ」

「先生！ 私は政治家ぢやありません」

「危険人物にならぬやう用心し給へ。コッセ陣地を攻撃した時には、叛徒ジャン・トレトンは追ひまゝくられて大敗する、そして唯一人、劔を振りかざして味方の軍に突進して來た。その時、お前は『列を明け、通してやれ！』と叫んだね」

「それは、たつた一人を殺すために千五百の人間を動かしたくはないからです」

「それぢやカイユテリ・ダスチレでは、負傷して身體を引摺つて行くヴァンデー軍のジョセフ・ベジエを殺さうとした部下に、『お前達は突進しろ。此奴は俺が處分する！』と怒鳴つて置いて、ピストルを空へ向けて射つたのはどういふ譯か？」

「倒れた敵を殺すには忍びないからです」

「それが間違ひだ。奴等は現に二人とも指揮官になつてゐる。ジョセフ・ベジエは髭隊の、ジャン・トレトンは銀の脚隊の指揮官だ。お前はこの二人を助けて共和國に二人の敵を與へたのだ」

「いや、私は共和國の味方を作りたいと思つたのでした。決して敵を作らうとは思はなかつたのです」

「ランデアンで勝つた時には、捕虜にした三百人の百姓を何故銃殺しなかつたのか？」

「ボンシャンは共和黨軍の捕虜を釋放しました。私は共和黨軍も王黨の捕虜を釋放したといはれたかつたからです」

「しかし、それぢや、ラントナックを捕へても赦してやる氣か？」

「いゝえ」

「何故だ？ 百姓を三百も赦してやつた癖に」

「百姓達は無智蒙昧な連中です。だが、ラントナックは自分のしてゐることを承知してゐます」

「だが、ラントナックはお前の親戚だぜ」

「佛蘭西の方がもつと私に近いんです」

「ラントナックは老人だぜ」

「ラントナックは外国人です。ラントナックは年といふものを持つてゐません。ラントナックは英吉利人を呼び寄せようとしてゐます。ラントナックは侵略者です。ラントナックは祖國の敵です。彼奴との戦争は、向うが死ぬか、こちらが仆れるかまで行かなければならぬ。納まりがつかせせん」

「ゴーヴァン、その誓を忘れちゃいけないよ」

「大丈夫、誓ひます」

暫しの間、二人は口を噤んだまゝ顔を見合せてゐた。

やがて、ゴーヴァンが口を開いた。

「今年は随分血腥い年になるでせうな、我々がかうやつてゐる九十三年は」

「氣をつけて呉れ！」 シムールダンは叫んだ。

「現に恐ろしい義務が存してゐるんだ。我々は無辜のものを責めてはならぬ。病氣が醫者の手落ちや

ないといふことは、今に始まつたことぢやない。さうだ、この恐ろしい年の特徴は無慈悲といふことだ。何故か？ それは大革命の年だからだ。我々がかうしてゐるこの年は革命の化身なんだ。革命は敵を持つてゐる。革命はその敵、舊社會に對しては少しも容赦しない。丁度外科醫が敵を持つてゐる、そしてその敵壞疽に對して何の容赦もしないやうに。革命は王の中からは王權を、貴族からは貴族政治を、軍人からは專制政治を、僧侶からは迷信を、裁判官からは野蠻性を、——一言にしていへば、壓制者のすべてから、壓制のすべてを抜き去り、それを根絶するんだ。手術は恐ろしいものだ。が、革命はそれを確かな手腕でやる。犠牲にしなくちやならぬ健全な肉の量かどれだけになるかは、ポエラーヴに聞いて見なくちや判らない。どうせ腫物の切開をするんだ、血を出さずに済むわけがない。大火事を消止めようといふ時には、火勢に匹敵するだけの精力が要るぢやないか。この恐ろしい必要こそ、成功の要件なんだ。外科醫は肉屋の親方にも見えやうし、醫者は死刑執行者にも見えるだらう。革命はその宿命的な任務に没頭してゐる。革命は人を殺しはするが、實は生かしてゐるのだ。それに、どうだ！ お前は病毒に憐れみをかけようとするのか？ お前は革命が、その毒素に對しても慈悲をかけるやうにと望んでゐるのか？ それは、革命の方ぢや承知しないよ。革命は過去を手中に收め、それを木つ葉微塵にしようとしてゐる。革命は文明に對する深傷を負はせた、が、人類の健康といふものはその傷口から湧き出て來るのだ。お前は苦しんでるんだらう？ それに違ひない。だが、その苦しみはいつまでつづくか？ 手術に必要な時間だけだ。手術さへ済めば、身體は元通り

にたる。佛蘭西革命は世界を切斷してゐる。だから出血するんだ——この九十三年は」

「外科醫は穩かなものです。だが、私の見た人達は随分亂暴ですよ」と、ゴーヴァンはいつた。

シムールダンはそれに答へて、

「革命の目的を達するには野蠻な労働者が必要だ。震へてゐる手などに用はない。革命はたゞ情に動かされぬ冷酷なものだけを信頼するのだ。ダントンは恐怖の權化、ロベスピエールは不屈の化身、サン・ジュストは確固不拔で、マラーは非妥協そのものだ。よく覺えて置きたまへ、ゴーヴァン。それだけの名は必要だ。我々としては、これだけあれば大軍を持つたも同然だ。必ず全歐羅巴を震駭させてやるぞ」

「それから、恐らく未來も」と、ゴーヴァンはいつた。そしてちよつと口をつぐんだが、

「先生、その點については間違つていらつしやろと思ふんです。私は誰も咎めません。私をしていはしむれば、革命の眞の本質はその無過失なことにあるのみです。誰に罪があり、誰に罪がないなどといふことはいはれません、ルイ十六世は獅子の群に投ぜられた羊です。彼は逃げようとし、助からうと思つて、防衛に努めてゐたんです。出来れば咬みついたかも知れません。だが、誰だつて自由に獅子になることは出来ません。そして、その獅子にならうとする欲望が罪惡と見做されるのです。で、羊が怒つて齒を剥き出すと、叛逆者！と獅子の群が吼えて、羊を喰つてしまふ。そして、それを喰ひ終ると、今度は仲間同志で喧嘩を始めるのです」

「羊は獸だ」

「ちや、獅子の群は何ですか？」

シムールダンは、その返答には詰まつた。が、肩を聳やかしてかう答へた。

「この獅子の群は良心だ。この獅子の群は理想だ。この獅子の群は主義だ」

「獅子の群は恐怖政治を行つてます」

「革命が恐怖政治を正しとする日はある」

「恐怖政治が革命の疵とならぬやう、注意して下さい」ゴーヴァンは更に續けて、

「自由、平等、博愛、これは平和と協調の教理です。それに對して、何故そんな恐ろしい様子をさせるのですか？ 統一ある共和國の下に、人民を纏めようとするのでせう。それなら、人民を脅かさぬやうにやりませう。脅迫が何の役に立ちますか？ 恐怖によつて惹きつけることの出来ないのは、

鳥類に限らず、民衆だつて同じことです。良いことを實現するために、悪いことをやつてはいけません。斷頭臺を使はずに置かうといつて、王位を覆さうとする者はなささうです。王には死、人民には命です。が、我々は王冠は打ち落とすけれども、首は許してやるべきです。革命は協調であつて、恐怖ではない。温和な理想も殘忍な人々のために間違つて使はれてゐる。私にとつては、大赦といふ言葉は人類の言葉のうちで最も美しい言葉なんです。私はたゞ自分の生命を賭してのみ、流血の業を営む心算です。それに、私はたゞ戦争のことしか知りません。要するに、一介の武弁に過ぎな

いんです。だが、もし人を赦すことをしなかつたら、いくら勝利を得たところでその代償に値しないものになつてしまひます。戦のうちこそ敵同志であつても、勝利を得た後は彼等とて同じ兄弟でせう」

「氣をつけて呉れ！」と三度シムールダンは繰返した。「ゴーヴァン、お前は、俺にとつちや息子以上で大切なんだ。氣をつけてくれ！」そして、シンミリと附け足した。

「今日のやうな場合には、慈悲といふ奴は一種の叛逆になるかも知れないからね」

此の二人の話を聞いてゐる者は、丁度劍と斧との會話でも聞いてゐるやうな氣がするであらう。

八、悲 嘆

一方乞食の隠れ家を出た母親は、子供達の行方を捜し續けてゐた。

どこといふ當途もなく、たゞ先へ先へと進んで行く。その間彼女はどんな生活をしてゐたか？ それは此處に述べることが出来ない、彼女自身でさへも知つてゐなかつたのだから。彼女は夜となく晝となく歩いた。門口に立つて物を乞うたり草を食べたりしては、地面にごろ寝し、吹き曝しの中を、星を戴いて木の下に眠つた。或る時は雨に濡れ、また風に打たれながら。そして村から村へ、畑から畑へと、子供を捜しながらさすらつた。着物はもうボロ／＼になつてゐた。百姓の小屋の戸口に立止ると、撃つてくれる家もあつたが、追拂はれることもあつた。家の中へ入れて貰へぬ時には森の中へ行つた。道は少しも拂らなかつた。或る時は街道筋に出たり、或る時は車の跡を辿つたり、また或る時は森の中の小徑をトボ／＼と歩いた。幾日もの放浪生活で、その見すばらしい着物はすっかり襤褸になつてしまつた。初めは靴も穿いてゐたが、やがて跣足になり、今では足に血が滲むやうになつた。

彼女は戦争の眞唯中を、彈丸の飛び交ふ中を眼も呉れず、耳もかさず、物を避けようともせず、只管に子供等の姿を求めて歩いた。何處へ行つても一揆騒ぎの眞最中で、憲兵も、市民も、お役人もみな留守であつた。それで、已むなく通りがりの人を捉へて聞くより外はなかつた。

「何處かで、子供三人を御見かけにならなかつたでせうか？」

そして通行人がこつちを振り向くと、「男の兒二人と、女の兒が一人です」——「ルネ。ジャン、

グロ・ザランにジョルジェット！ お見かけになりませんでしたか？」そしてフラフラと歩き續けながら、——「長男は四歳と六ヶ月。小ちやい女の子は一年と六ヶ月」といつて、——「あの子達が何處にゐるか御存じですか？ 子供等はみんな攫はれて行つたんです」と甲高い聲で叫んだ。

通行人は不審さうに女の方を眺めるが、たゞそれだけである。相手が合點が行かないのだと見てとると、女は重ねていつた。

「あの子達はみんなわたしの子ですよ。だから、捜してるんです」

通行人はさつさと行つてしまふ。取残された女はそのまゝチツと立ち止つて、もう一言も言はず、たゞ爪で胸をかきむしるばかりであつた。

ところが或る日のこと、偶然に一人の百姓が女の言葉に耳を傾けて呉れた。お人好しの百姓は首を傾げていつた。——「待てよ。子供が三人と？」

「さうです」

「男の兒が二人？」

「女の兒が一人」

「お前さんが探してるのはその子達かね」

「さうです」

「どこかの御領主様が子供三人を連れて歸つて、手許に置いていらつしやると聞いたがね」

「その人は何處にゐますの？ あの子供は何處にゐるんでせう？」と、女は叫んだ。

「ラ・トゥールグへ行きなせえ」と、百姓は答へた。

「さうすれば子供達に會へるでせうか？」

「譯はねえだらう」

「なんとかいひましたね？ ……」

「ラ・トゥールグさ」

「ラ・トゥールグつて何ですの？」

「所の名前さ」

「それは村でせうか？ お城でせうか？ 小作地でせうか？」

「俺は行つたことがねえだ」

「遠いでせうか？」

「近くぢやあないね」

「どちらの方？」

「フージェールの方だよ」

「何處を通つて行くんでせうか？」

百姓は親切に説明した。「此處はヴァントルトだがね。此處からエルネーを左、コクセルを右に見て行くといふよ。さうするとロルシャンを通つて、ルルーを抜ける道順になるだ」百姓はかういつて、手を舉げて西の方を指した。

「いつも今お前さんの向つてる方へ、眞直ぐにお日様の入る方へ向つて行くだ」

百姓が指した手を下さない中に、女はもう急足で歩き始めてゐた。

百姓はその背後から聲をかけた。「だが氣をつけなせえよ、そこらぢや戦争してゐるだから」彼女は返事するどころか振り向きもせず、たゞ先へ先へと眞直ぐに急いで行つた。

九、地方のバスチーユ

九の一、ラ・トゥールグ

今から四十年前も前に、レイニユレの側からフージェル森へ入った旅人は、パリニエの方へ出る所で、この大きい古い密林の外れに横る不吉な光景に出會つたであらう。やつと森の茂みの中を出ると、突如として、ラ・トゥールグが眼の前に現れるのだ。

ラ・トゥールグは生命を失つて死骸になつてゐた。ラ・トゥールグは引裂かれ、打壊され、斬り刻まれ、皮を剥がれてゐた。建物の廢墟は、人間でいつたら幽霊といふところだ。その頃のラ・トゥールグほど凄惨な感じを與へるものはなかつた。旅人の眼に映ずるものは、先づ森の片隅に悪魔の如く聳え立つた丸い高塔である。斷崖絶壁の上にそり立つたこの塔は、如何にも堅い頑丈な作りで、ちよつと羅馬建築のやうな感じがする。今は見る影もない廢墟であるが、僅かに残つた土臺などにも在りし日の堅固さは偲ばれる。その様式が羅馬式であつたので、工事も羅馬式で、九世紀に起工されたのが第三の十字軍の後、十二世紀に至つてやつと竣工を見た。兜の吹返しのやうな恰好をした窓口の拱基石がその時代を語つてゐる。塔に近づいて坂を登つて行くと、壁のところ裂目のあるのが眼につく。苦心して中に入つて見たところで、塔の中はほんたうの空洞である。

それは丁度地上に伏せた鐘の内側のやうなものだ。上から下まで何の仕切もなく、天井もなければ床もない。たゞ其處此處に迫持や煙突を取り除けた跡や、輕砲を覗かせた銃眼が残つてをり、素晴らしく太い花崗石の棒材や梁が、いろ／＼の高さに竝んで階段のやうになつてゐる。梁の上には鳥の糞が一杯に積つてゐた。巨大な城壁は土臺の所で十五呎、一番上の所で十二呎の厚みがあつた。壁のそこ此處には、龜裂が入つたり孔があいたりしてゐる。そこはもと扉のあつた所で、其處から覗くと眞暗な壁の内部に通ずる梯子が見える。通りが／＼の者が夜その中に入つて見ると、梟や、木菟、文母鳥や五位鷲などの聲が聞え、足許には茨や石塊、蛇などがゴツチャになつてをり、上を仰げば、大きな井戸口のやうな塔の頂上の黒い圓筒を通して、星のきらめくのが見えた。

この地方の傳説によると、塔の上の方にはユダヤの諸王の墳墓のやうに、廻轉仕掛になつた大きな一枚石の祕密の扉があり、開ける時には彈條を押し、閉めた時には壁の一部分になつてしまふといふ。これは先の尖つた弧形門と共に、十字軍が東方から持ち歸つた建築上の祕密である。この扉は、閉めると何處が扉だか判らなくなつてしまふ。それは扉石が、他の石と見分がつかないやうにうまく出来てゐるからである。

九の二、裂け目

この廢墟の内部に通ずる裂け目は地雷坑の入口であつた。僧侶の頭布のやうな恰好をした火室は、

塔の破壊に不足しないやうに、相當な大きさに作つてあつた。火薬は少くとも二十六七貫は入つたに違ひない。火室に通ずる坑道は蛇のやうに曲りくねつてゐたが、それは眞直ぐな坑道よりは有効なのだ。坑道の内部は崩れて、石の間からは爆破用の導火線が露出してゐた。それは相當太いもので、鶏卵の直徑ほどあつた。

爆発が起つて城壁は大破損を蒙り、攻撃軍はそこから突入した。この塔は、何時の時代にも戦術通りの正攻法で包圍されたものと見える。城壁の到る處に彈丸が射ち込まれてゐるが、それはみな同じ時代のものばかりではない。いろ／＼な彈丸は、それ／＼特有な形の彈痕を城壁に残してゐる。この塔に彈痕を印してゐるものは、十四世紀の石彈から始まつて十八世紀の鐵彈に至るまで、あらゆる種類の彈丸を網羅してゐた。

裂目のついてゐる所は地下室であつたと覺しき場所である。裂目の直ぐ向側の壁には、岩を撈り抜いた牢の入口がついてゐた。此岩窟は塔の土臺の下面に擴り、地下室全體の廣さと同じ位あつた。岩窟は四分の三ほど埋没してゐたが、千八百三十五年に至つてベルネーの考古學者アウギュスト・ル・プレヴォ氏の指揮の下に發掘されたものである。

九の三、密 牢

この岩窟は密牢であつた。土牢ほどの城砦にもあつた。そして當時の多くの牢獄と同様、この牢も

二階になつてゐた。二階は地下室の廣間と同じ平面にあり圓天井になつた可成り廣い室で、地下室の入口から入るやうになつてゐた。この室の壁の表面には二本の平行した線が垂直についてをり、それが壁の端から端まで行つて更に天井の方まで延びてゐる。その線と見えるものは、古い轆の跡のやうな深い溝である。ところが、事實やうなのではない、ほんたうにさうだつたのだ。この二本の溝は二つの車輪によつて彫りつけられたものである。封建時代の昔、この室内では、四頭の馬で手足を引裂く處刑よりも音のしない方法で、罪人を引き裂いてゐたのだ。そこには兩方の壁と天井まで届く察晴らしく大きな車輪が二つ据ゑてあつた。そして罪人の片腕と片脚を、もう一方の手足を別々の車輪に括りつけ、車輪を反對の方向へ廻しては引裂くのだ。それには非常な力が入る。それで、車のために磨り減らされた跡が、あのやうな溝になつて壁に残つたのだ。この種の刑室は今日でもヴィアンダンに行けば見られる。

この室の下にもう一つの室がある。これこそは眞の密牢で、戸口から出入りするのではなくて、一つの孔から潛り込むやうになつてゐる。素裸體にされた犠牲者は、脇の下に綱をかけて、上の室の石疊の眞中にある孔から吊り下されるのだ。そして犠牲がどうしても生永らへたいといふのであれば、此の孔から食物も投げ與へられる。この種の孔は未だにブイヨンに残つてゐる。

この孔からは風が吹抜けるやうになつてゐた。地下室の下をまた掘り下げたこの室は、室といふよりは井戸である。足許からは水が湧き、氷のやうに冷たい風は沁々と身に應へる。この冷たい風は下

の密牢に呻く囚人にとつては命取りであるが、上の牢の囚人達には命をつなぐ力となつた。それは牢獄の中に絶えず換氣法を行つて呉れたからだ。圓天井の下の闇の中に、手探りしつゝ生永らへてゐる上の牢の囚人達は、僅かにこの孔から来る空気で呼吸を續けてゐたのであつた。それは兎に角として、一旦そこに打込まれるか落ち込んだりしたが最後、もう二度と出て來ることが出來ない。牢の中は眞暗なので、囚人達は用心しなければならなかつた。生永らへたいと思ふ者にとつては、この孔は頗る危険である。が、生を逃れたくなつた者にはまた誂へ向の捷徑ともなつた。上は牢獄、下は墳墓、當時の世相にいみじくも似た姿ではある。祖先が「濠牢」と呼んだのはこれのことである。

九の四、橋 城

裂け目の向う側から、塔の方へ石橋が架かつてゐる。その三ツのアーチは今でも殆ど舊形を存してゐる。この橋は、今は僅かに残骸だけしか止めてゐない一つの建物に續いてゐたものであつた。その建物は火事で焼けたのに違ひない。残つたものはたゞその骨組だけで、塔と並び立つてゐるその黒ずんだ骨組の間に日の光が射し込むと、まるで幽霊の傍に骸骨でも立つてゐるやうな感じがした。今ではこの廢墟もすつかり姿を消して、跡形さへも残つてゐない。幾代もの王が數百年もかゝつて築き上げた城砦も、いざ壞すとなれば百姓一人が一日もかゝれば優に事足りたのだ。ラ・トゥールグは、ラ・トゥール・ゴヴァン（ゴヴァン塔）の百姓訛である。

四十年前から廢墟になり、今日ではたゞ一つの影に過ぎないこのラ・トゥールグも、千七百九十三年には立派な城砦であつた。それはゴヴァン家の舊い城砦で、西の方に向つたフージェールの森の——これも今は辛うじて林としかいへないぐらゐ小さくなつた——入口を固めてゐた。この城砦はメイヤンヌとディナンの間にある巨大な片岩の塊の上に立つてゐた。この地方には片岩が森や藪の中など到處に散在し、神話の巨人達が會議でもやつた跡のやうになつてゐる。ラ・トゥールグはその塔が城砦の部になつてゐた。塔の土臺は大きな岩であり、溪流がその岩の根を洗つてゐる。この溪流は一月には激流となるが、六月には枯れてしまふのが常であつた。掻い摘まんで話すと、この城砦は中世紀には殆んど難攻不落と稱せられたが、橋が出來たためにかなり弱くなつた。ゴート人時代のゴヴァン家がその城砦を建てた時にはこんな堅固な橋はなく、斧で一撃すれば直ぐ落ちるやうな吊橋を架けて、そこから出入してゐた。ゴヴァン家が子爵であつた時代にはそれで満足してゐたが、やがて侯爵に昇り、城砦を止めて御殿に造り替へた時、この塔の下の急流に三つアーチの橋を架け、雑作なく平地へ出られる道をつけた。それがやがては王の攻撃を招く原因となつたのだ。十七世紀の侯爵や十八世紀になつて跡を嗣いだ侯爵達は、もうその難攻不落たることを望みはしなかつた。彼等はヴェルサイユの王朝風を眞似て、祖先の遺風を棄て、しまつたのだ。

西側の方には塔に面した高い高臺があり、その下の方は二つの平原に續いてゐた。高臺は塔に近く

擦れ、の所まで盛上つて、僅かにク羅斯ノ河に注ぐ深い溪流に隔てられてゐるだけである。城砦とこの高臺とを結びつける橋の下には高い橋脚があつた。そしてこの橋脚の上には、シユノソ一の橋のやうにマンサール式の建物が出来てゐる。それは塔よりずつと住心地のよい家であつたが、當時の習慣はまだ至つてお粗末だつたので、殿様は依然として牢獄のやうな城砦の中に住んでゐた。橋の上の建物といふのは城を小さくしたやうなもので、警護の間と呼ばれる長い廊下が入口としてつゝいてゐた。大きい警護の間の上には書庫、その上には穀倉がある。長い窓には小さなボヘミヤ硝子を嵌め、窓と窓との間には柱があり、壁にはいろ／＼な像牌が彫りつけてあつた。つまり三段橋の一番下には矛や小銃、二階には書籍、三階には燕麥の袋があつたのだ。これはちよつと野蠻な配置ではあるが、確かに貴族式ではある。

塔は陰鬱な峻しい様子をして、その傍に突立つてゐた。

この淫婦のやうな建物を見下しつゝ、鬱ぎ勝た塔は徒らに高く聳えてゐる。塔の歩廊からは、いつでもこの橋を壊せるやうになつてゐた。

この二つの建物——一方はゴツ／＼とした、一方は優雅な建物——は、對照をなすといふよりは衝突し合つてゐた。兩方の様式にはどこにも一致點がない。二つの半圓はしつくり合つてゐなければならぬ筈なのに、一方は純羅馬式のアーチ、一方は古代の飾迫縁をとり入れてゐるところなど、まるで背中合せのやうな感じがする。

不調和に並びあつたこの二つの團體は、全體として纏めて見ると何ともいへぬ恐ろしい感じがする。軍事的の見地から見れば、この橋は、繰返していふが、塔にとつての裏切者である。それは美觀は添へたが、丸腰にした。塔の裝飾にはなつたが、その威力を殺いだ。橋は西側の高臺と同じ水準に造つてある。で、森に面した方は相變らず難攻不落であつたが、高臺に面した方は近づき易くなつた。以前は塔が高臺を抑へてゐたが、今は高臺の方が塔の死命を制するやうになつた。高臺に據つた敵は直ちに橋を占領するだらう。書庫と穀倉とは、敵には好都合だが城内の人には不利である。書庫と穀倉とは、本も薬も燃え易いといふ點に於ては似たやうなものだ。苟くも火を有効に利用しようといふ敵にとつては、ホームリーの詩集であれ乾草の一束であれ、それが燃えるものでさへあれば、何等選ぶところはないのだ。それは兎も角として、流石に橋の建築者が用心した點も二三ヶ所はあつた。それは第一、火災の場合を豫想して流に面した三つの窓の下に錠を打つつけ、——この錠は五十年前以前までは見ることが出来た——それに橋の二階程の高さの長い丈夫な救命梯を引掛けて置いた。その長さは普通の家の三階以上もある。第二には襲撃を受けた場合を豫想して、重い低い鐵扉で橋を遮斷出来るやうにして置いた。この扉はアーチ形で、大きな錠がかかり、その錠は城主しか知らない場所に隠してある。この扉が一度閉つたら、それこそ矢でも鐵砲でも齒が立たないのだ。この扉に近づくには橋を渡らねばならない。そして塔の中へ侵入するにはこの扉を突破せねばならない。その他には何處にも入口がなかつたのだ。

九の五、鐵の扉

アーチの上に建つてゐるので、小さい橋城の三階は塔の二階と同じ高さになつてゐた。鐵の扉は、橋の方の側では書庫の方へ、塔の側では、真中に一本の柱が立つてゐる圓天井の廣間に通じてゐた。この廣間は先に述べた城砦の二階で、中は塔のやうに圓くなつてをり、平野を見下す銃眼から光線が入つてゐる。ゴツ／＼した壁は全くの裸で、キチンと積上げられた壁石は露出しになつてゐた。この室へ入るには、壁の中に仕掛けてある螺旋階段を昇つて行くのだ。壁の厚さが十五呎もあるのだから、こんな仕掛けは極く雑作なく出来るのだ。

一本柱の丸い廣間の下は、同じやうな部屋が二つ二階になつてゐる。廣間の上にも更に三つの部屋があり、この積み重なつた六つの部屋の上に塔が聳えてゐるのだが、入口は歩廊になつてゐる石蓋で閉され、そこへ行くにはどうしても狭い物見櫓を通らねばならなかつた。鐵の扉を据ゑるには厚さ十五呎の城壁を打抜かねばならない。そして、長いアーチ形に抜いた壁の真中所に、その鐵の扉は嵌め込まれた。その扉を閉めると奥行六七呎づゝの玄關口が、塔に向つた方にも橋に向つた方にも出来上り、扉を開けば、その二つの玄關口がつながつてアーチ形の入口となつた。橋の側の玄關口の下には、厚い壁の中に、サン・ジルの螺釘を使った低い門があつて、書庫の下にある一階の廊下に通じてゐる。そこも攻圍軍にとつての難所である。橋上の出城は、高臺の方に向つ

た側は垂直な壁を見せてゐるだけで、橋はそこでおしまひになつてゐる。そして高臺とは、低い門に寄せかけられた跳橋で往來するやうになつてゐた。この跳橋は、高臺の方が高かつたので、——高臺は餘程下の方に行くまで橋より高くなつてゐた——警護の間といはれる長い廊下に續いてゐた。攻圍軍が鐵の扉に達するためには、この廊下を占領すると、今度は二階に昇る螺旋階段の奪取に全力を擧げねばならないのだ。

九の六、書庫

書庫は橋と同じ幅、同じ長さの長方形の室で、扉はたゞ一ヶ所の鐵の扉になつてゐた。忍口は縁のカーテンで隠してあつて、ちよつと押しさへすれば奥が見えるけれども、いつもはそれで塔の入口が塞がれてゐた。書庫の壁は上から下まで、床から天井に至るまで、十七世紀の指物細工の粹を集めた硝子張りの書棚になつてゐる。兩側に三つづゝ大きな窓が六つあり、どつちの側も一つはアーチ形の上についてゐるが、書庫の中はそこから入る光線で明るかつた。城外の高臺の上からは、この窓を通して室内の有様が手に取るやうに見えた。窓と窓の間には、彫刻入りの檜の臺に据ゑた大理石の胸像が六つ飾つてゐる。

此の書庫にはいろいろな種類の書籍が藏してあつた。その中で一つ、今なほ有名なものは版畫入りの古い四つ折版の書籍で、表題は大きな字で「サン・バルテルミ」としてあり、表題の下には副表題

「サン・バルテルミによる福音書 附 この福音書は偽作と看做すべきか、またサン・バルテルミはナタナエルと同一人物なりや否やに關する基督教哲學者パンテニユスの研究」と小さい文字で書いてあつた。この書物は世界に唯一部しかないものとされてをり、書庫の中でも眞中の書見臺の上に載せてあつた。十七世紀のその頃には、得難い珍籍として澤山の人が見に来たものである。

九の七、穀 倉

穀倉は書庫と同じく、橋の形そのまゝの長方形をしてゐたが、實は屋根の木組の下の空處に過ぎなかつた。中には藁や乾草がギッシリ詰めてあり、屋根裏の六つの窓から光線がとつてある。扉には聖バルナバの像が彫刻してあり、その下に羅旬語の短い銘があるだけで、他に何の裝飾もなかつた。城砦の構造は大體こんなもので、そこ此處に銃眼を明けた、高い廣い六階の塔は、出入口を兼ねた唯一の鐵の扉から、跳橋で限られた橋城に通じてゐるばかりであつた。塔の背後には森があり、前には橋よりも高く、塔よりは低い荒地の高臺がある。橋の下、高臺と塔との間には深い、狭い、荆棘だらけの溪谷があり、それが冬には飛沫を飛ばす奔湍となり、暖い春には小流となり、夏には石だらけの空濠となつた。それがラ・トゥールグと呼ばれるゴーヴァン塔の姿である。

十、人 質

七月が過ぎて八月が來た。激しい雄壯な嵐が佛蘭西を吹き捲つた。宛も一つの妖怪が地平線から消え去つたばかりである、——脇腹に短劍を突き刺されたマラーと、首を刎ねられたシャルロット・コルデイ（譯註 入浴中のマラーを刺殺した二十五歳の娘）と。——世の中は益々物騒になつて來た。ヴァンデーに於ては、大規模な作戦計畫が破れてしまつたので小規模な戦術に逃げ込まざるを得なくなつた、が、先にも述べたやうに、實際はこの小規模な戦争の方が一層恐ろしいのだ。その戦争は今や密森中のあちらこちらに散らばつて、非常に廣汎な戦闘になつてゐた。カトリック教徒王黨の大軍には危機が襲ひかゝつてゐた。メイヤンスの軍隊をヴァンデーに急派するやう、命令は發せられた。八千のヴァンデー軍はアンスニで殺された。彼等はナントから撃退され、ノアールムーアエから追拂はれ、トゥアールから驅逐され、シヨレ、モルターニユ、ソームニユールからは見事に蹴飛ばされた。彼等はバルトネを退却し、クリッソンを放棄し、シャチヨンの根據地をも失つた。またサン・チレルでは軍旗を奪はれ、ボルニック、サーブル、フォントネー、ドゥーエ、シャトー・ドー、ボン・ド・セなど到處で撃破された。のみならず、リュソンでは前進を阻止され、シャテニユレからは退却し、ロッシュユ・シユール・ヨンでは潰走した。けれども一方ではロシエルを脅かすと共に、ゲルヌゼーの沖では、英吉利軍の數個聯隊と佛蘭西海軍の最も優秀な士官數名とを乗せたタレイグ將軍麾下の英吉

利艦隊が、ラントナック侯爵からの上陸信號を今や遅しと待ち構へてゐた。この英吉利軍の上陸こそ、王黨の盛返し運動に再び勝利を與へ得たかも知れないのだ。英吉利宰相ピットは實際國家の惡魔であつた。刺客が七首を秘めてゐると同じやうに、政策には必ず裏切がつきものである。ピットは我が國を安定させて、自國を裏切つたのだ。祖國を汚辱することは取も直さず裏切ることである。英吉利は彼の指揮の下に、そして彼を通して、姦詐な戰爭を始めたのであつた。英吉利はスパイを放ち、諜をつき、人を購した。密獵者と詐欺師、英吉利はそれ以外の何者でもない。そしてすべての人の憎惡の的にまで成下つたのだ。英吉利はその頃一斤五法の脂の買占をやつてゐた。リールで捉へられた一英人のポケットから、ルーアンに六萬法を、カンに五萬法を送金せんことを請求したピットの代理人ブリジャンからの手紙が出た。この奸佞な行爲の報復としてパランの暴行が起り、後にはカリエの虐殺が行はれた。メッツや南方の共和黨軍は叛徒に向つて進撃を續けたいと熱望してゐた。やがて森の國の生垣や堀を焼打するために、先鋒隊二十四ヶ中隊を編成せよとの命令が下つた。實に佛蘭西未曾有の危機である。戰闘は他の地點で再開されやうとして、ちよつと一地點で停頓してゐるに過ぎなかつたのだ。「容赦するな、捕虜をつくるな」これは敵味方通じての叫びであつた。その頃の歴史は恐ろしい影に満たされて眞暗であつた。

この八月に入つて、ラ・トゥールグは遂に攻圍された。或る夕方のことである。陽は靜かに白づいて、星の光が靜かな宵闇に燦めき始める頃、森の一葉も

そよがず、野の百草もざわめかぬ宵の靜寂を通して、忽ち慌しい角笛の音が起つた。その角笛は塔の西上から響いて來たのであつた。

この鋭い號音に應へて、下の闇からは喇叭の音が起つた。

塔の頂には武装した一人の男が立つてゐた。下の方には、野營の天幕が闇の中に擴がつてゐた。

ゴーヴァン塔の周圍の闇の中には、一團の黒い物影の動いてゐるのが眼についた。それは野營の人である。二三點の火が森の木の下や、高臺の叢の中から見え始めた。そしてこの下界にも空と同じ星が燦めいてゑもゐるやうに、闇の中そこ此處は明るく輝いた。しかし、それは物凄いやつ星であつた！高臺の側に陣取つた軍はずつと下の平地の方まで延びてゐる。そして、森の側に陣取つた軍は森の茂みの中まで續いてゐる。ラ・トゥールグは包圍されてゐたのだ。

攻圍軍の野營がこんなに擴がつてゐるのは、その軍勢の夥しく多い證據である。

敵の陣營は犇々と城砦に迫つてゐた。塔の側は岩根まで、橋の側は溪谷の上まで押寄せてゐる。

再び角笛の音が起つた。と、直ぐ喇叭の第二聲がそれに續いた。

今度は角笛の方から問をかけ、喇叭がそれに返答したのだ。

この角笛、——それは塔の方から陣營に對してかう尋ねてゐたのだ。「お前の方と話をしたいのだが、差支ないか？」それに對する喇叭は陣營からの返事で、「よろしい」といふ合圖である。

當時、ヴァンデー軍は、革命議會で交戰團體と認めてゐなかつた。そして、この「山城共」と軍使

を交換することを法令によつて禁止してゐた。そこで出先の軍隊が首を捻つて、國際公法では一般戦争の場合には認容し、内亂の場合には禁止してゐるやうないろ／＼な通信手段を工夫しなければならかつた。そんなわけで、百姓軍の角笛と共和黨員の喇叭との間には、よく或る種の諒解が成立してゐた。最初の角笛は單なる呼出し號音で、第二聲は質問であつた。

「聽いてくれるか？」この第二聲に對して、もし喇叭が沈黙してゐたら拒絶、喇叭が答へたら承諾したことになる。それは「暫時休戦」の提議であつた。

喇叭が角笛の第二聲に答へると、塔の頂にゐた男が口を開いた。そして、かういつてゐるのが下の方まで聞える。

「我輩の言葉を聽いてゐる諸君！ 我こそはグージュ・ル・ブリュアンといふ者、またの名は「青軍の粉碎者」だ。それは諸君の戦友を澤山殺したからだ。またイマニユスとも呼ばれてゐる。それはこれまで手に掛けた人数よりも、更に多くの人間を殺すつもりだからだ。我輩はグランヴィルの攻撃の際、銃身を握つた手に一太刀浴びて指を斬落された。諸君はラヴァルに於て、我が父、我が母、我が妹の十八になるジャックリヌを斷頭臺にかけた。これが我輩の人爲りだ。」

「我輩は諸君に、我が君ゴーヴァン・ド・ラントナック侯爵、フォントネー子爵、及びブルターニユの貴族、七つ森の領主の名に於てお話するのだ。」

「先づ第一にいつて置くが、侯爵閣下は今諸君が圍んでゐるこの塔に立籠る前に、その指揮權を六人の副將に分割遊ばされたのだ。だから、諸君がこの城一つを陥しただけで、萬事片附いたといふわけには行かない。それに、たとへ侯爵閣下がお亡くなりになつたとて、神と王を戴くヴァンデーはいつまでも生永らへるであらう。」

「よく覺えておくがよい。我輩は諸君の参考までに、このことをいつたのだ。閣下は此處に、我輩の傍に居られる。我輩は閣下の言葉を傳へる口なのだ。攻圍軍の諸君、靜かに聞き給へ。」

「これこそ諸君が聞いて置くべき重大事なのだ。」

「諸君が我々に挑みかけた戦争は正しいものぢやないといふことを忘れ給ふな。我々には自分の國に住んでゐる者であり、正直に戦つてゐる者なのだ。我々は露の下の草のやうに、神の意志の下に動いてゐる、純朴な清淨な人間なのだ。我々を攻撃したのは共和國である。共和國は畑の中にある我々を憐れみすためにやつて來た。そして我々の家に火を放ち、此獲物を焼き、農園を荒し、剩へ女や小供を、まだ冬駒鳥の鳴いてゐる寒空に、跣足のまゝで森の中へ逃げ込まねばならぬやうにした。」

「下の方に居られる諸君、そして我輩の言葉を聽いてゐる諸君よ。諸君は我々を森の中から追ひ出し、そしてこの塔の中に封じ込めた。諸君は、此處にゐる軍隊の外に、モルタン、バラントン、ティエール、ランデイヴィ、エヴラン、タンテニアック及びヴィトレの警備軍や駐屯軍を合し、四千五百の大軍を以て我々を攻めてゐる。しかも我々は、僅か十九人で防いでゐるのだ。」

「諸君は坑道を穿ち、岩の一角と城壁の一端を爆破するに成功した。」

「今諸君は攻撃の準備をしてゐる。——」

「そして我々の方は、——先づ我が君侯爵閣下初め、僧侶のチュルモー師、軍人としての名はグラン・フランケール、我が同志ギユイノアゾー、これはヴェール陣地の指揮官だ。同じくアヴォアン陣地の指揮官、同志シャント・アン・ニヴェール、フルミ陣地の指揮官、同志ミュゼット、それから此處に控へた某、小川モリアンドルの流れてゐるダオン町に生れた百姓の我輩だ。この我々一同は、たゞ一つの事を諸君にいはうとしてゐるのだ。——」

「塔の下に居並ぶ人々よ、聴け。——」

「我々の手には三人の捕虜がある。それが三人とも子供なのだ。この子供等は諸君の中の或る大隊の養子だから、當然諸君のものだ。我々はこの三人の子供を諸君の手に返還することを提議する。——」

「だが一つの條件がある。——」

「それは我々を自由に脱出させることだ。——」

「もしそれを拒むに於ては、——よく聴け、我々を攻撃し得る途は二つしかない筈だ。森の側の裂け目からするか、或は高臺の側の橋によるか、この二つしかない。橋の上の建物は三階建だ。その下の部室には、不肖イマニユスが、今諸君に話してゐるこの我輩が、瀝青六樽と乾草百束とを詰めて置いた。三階には藁がある、二階には本と紙が積んである。塔と橋の間の關門なる鐵の扉は固く閉ざされてゐる。——」

「そして、その鍵は我が君が握つてをられるのだ。我輩は自分でその扉の下に孔を穿ち、その中に火繩を通じた。そして火繩の一端は瀝青の樽の中へ、他の一端は塔の内部にあるこの我輩の手の届く所にある。それに點火することは何時でも出来る。もしも諸君が我々の脱出を拒否するに於ては、三人の子供は橋の二階に閉込めるであらう。其處は硫黄火繩の先端を通じた瀝青樽のある部屋と、藁の積んである二階との間で、鐵の扉は勿論閉めて置くのだ。もし橋の方から攻め寄せるならば、橋の上の城を焼く者は諸君なのだ。またもし、裂け目から攻め入るならば、火を放つのは我々の手だ。更に裂け目と橋の両方面から攻め寄せるならば、火は諸君と我々によつて同時に放たれるであらう。そして、どの途、三人の子供は死んでしまふ外はない。——」

「さあ承知か、それとも勿ねつけるか! ——」

「承知ならば、我々は出よう。——拒絶するならば、子供等は死にますぞ。——」

「これでお終ひだ」

塔の上から話しかけてゐた男は、それつきり口をつぐんだ。

その時、下から叫ぶ聲が聞えた。——「拒絶だ」

この聲は力強い、嚴肅な聲であつた。それに續いてもう少し優しい、だが、しつかりとしたもう一つの聲が起つた——

「降伏するならば、二十四時間の猶豫を與へる」

暫くは言葉を發する者がなかつた。が、やがて今と同じ聲が續けていつた。

「明日のこの時間になつてもまだ降伏しなければ、攻撃を開始するぞ」

それに續いて最初の聲がいつた。——「その時になつちやあもう容赦しないぞ」

この荒々しい聲に對して、塔の上からまた別な聲が答へた。

塔の上の二つの銃眼の間に、前屈みになつた脊の高い影が現れた。それが星明りでラントナック侯

爵の峻しい顔であることが判つた。彼の陰氣な視線は下の闇を縫つて、誰かを物色してゐるやうであ

つた。と、彼は出抜けに叫んだ。「やつ、貴様ゐるな、坊主奴！」

「あゝ、俺だよ、謀逆人奴！」荒々しい聲が下から答へた。

十一、昔ながらに恐ろし

峻しい方の聲は、正しくシムールダンの聲であつた。そして、もう一方の少し若やいだ丸味のある

聲はゴーヴァンの聲であつた。

ラントナック侯爵が僧侶のシムールダンを認めたま眼に誤りはなかつた。

内亂の血腥い騒ぎの絶えぬこの地方に来て僅か二三週間経つか経たぬ間に、シムールダンは一躍

素晴らしい大立者になつてゐた。しかもその名ほど暗い無氣味な響を持つた名はなかつた。當時の人々

は巴里にマラー、リヨンにシャリエ、ヴァンデーにシムールダンと並べ稱したものである。かつての

僧侶シムールダンに捧げられた尊敬も、今は全く地を拂ふやうになつた。それは僧衣を脱ぎ捨てたが

ためである。シムールダンは人々に恐怖の念を捲起させた。苛酷な人間は不幸な人である。世の人は

その罪を憎んで人を憎まずといふが、さういふ人間は飽くまで人を憎まずにゐられないのだ。このラ

ントナック侯爵と僧侶シムールダンの二人は、お互に同じやうに激しく憎み合つてゐた。シムールダ

ンに對して投げられる王黨の悪罵と、ラントナックに集中される共和黨の呪詛とは正に伯仲してゐ

た。二人は相手側から見ればどつちも恐るべき怪物なのだ。そこで、グランヴィルに在るプリユール

・ド・ラ・マルヌがラントナックの首に賞金をかけると、ノアールムーチエにあるシャレットが直ぐま

たシムールダンの首に賞金をかけるといつたやうに、さういふところまで同じやうに扱はれてゐた。

侯爵と僧侶——この二人は或る點までは同じ人間である。内亂といふ青銅の假面には面が二つあ

る。一つの面は過去の方を向き、もう一つは將來の方に向いてゐる。が、どちらも同じやうに悲劇的

な顔だ。ラントナックは前者即ち過去の面、シムールダンは後者即ち未來の面である。ラントナック

の烈しい嘲罵は夜の陰影に控はれてをり、不幸なシムールダンの額の上には黎明の光が輝いてゐるだ

け、相違だ。

それはさうと、包圍されたラ・トゥールグは猶豫を與へられた。

ゴーヴァンが口を利いたお蔭で、二十四時間といふものは一種の休戦状態となつた。

イマニニユスは如何にもよく敵情に通じてゐた。ゴーヴァンは、シムールダンの申請によつて、魔

下の軍と國民衛兵の合併軍四千五百の指揮權を賦與され、今その全軍を擧げてラントナックをラ・ト
ウールグに圍んでゐるのだ。塔に向つては森の境に六門の砲を伏せ、橋に向つては高臺の上に六門の
砲列を敷き、都合十二門の砲を城砦に向けて置いた。また坑道を穿つて、塔の基部に裂け目を拵へる
ことに成功した。かくして、二十四時間の休戦期間が盡きるや否や、かういふ條件の下に火蓋は
再び切られるのだ。

高臺の上、森の中には四千五百人。——塔の中には十九人。

立派な獨立軍團といつてもいい、この四千五百人の大軍の司令官として、シムールダンはゴーヴァン
に副將軍の印綬を授けたいと思つた。だが、ゴーヴァンはそれを斷つた。「ラントナックを捕へたら
更めて御相談に乗りませう。今ぢやそんな値打はありません」

ゴーヴァン塔は、ゴーヴァン家の一人が立籠り、同じゴーヴァン家の一人がこれを攻めるといふ不
思議な宿命を荷つてゐた。さういふ關係で、攻める方はちよつと氣遅れするところもあつたが、守る
方ではさうではなかつた。それはラントナックが惜氣もなくやる激しい氣性の人であるのと、殊にヴ
エルサイエの都に常住してゐて、ラ・トゥールグについては何の迷信ももつてゐないからであるが、
事實餘り詳しいことも知つてはゐなかつた。それがこの塔に逃げ込んだのは、他に逃げ場所がなかつ
たからだ。實際それだけの話である。だから、何の躊躇もなく塔を破壊する氣にもなれるのだ。しか
しゴーヴァンの方は、この塔に對してもつと敬意を拂つてゐた。

塔の弱點は例の橋にあつたのだが、橋上の書庫の中には系圖が所藏してある。もし其處から攻撃す
るとすれば、橋の火災は免れることが出来ない。ゴーヴァンは、系圖を焼くなどいふことは祖先に弓
を引くやうに思へてならなかつた。ラ・トゥールグはゴーヴァン家の祖先代々の居城である。この塔
こそは、ブルターニユの全領地の中心であつたのだ。ルーヴル塔が佛蘭西全土の中心であつたやうに。
其處にはゴーヴァン家歴代の想出の數々が籠つてゐた。ゴーヴァン自身もその城壁の内部で生れた
のであつた。しかし運命はどこまでも皮肉である。自分が呱呱の聲をあげ、そしてその幼い時代を育
んでくれたこの塔を、成人した今となつて攻撃しなければならぬとは！ この由緒深い塔を灰
燼に歸せしめるのは不孝の業ではあるまいか？ お守をして呉れたあの搖籃は、今も書庫の上の穀倉
の隅つこに藏ひ込んであるに違ひない。想出は感動を誘ふ。ゴーヴァンは眼のあたりこの祖先代々
の家を見て、深い感慨に耽つた。結局、橋だけは見逃して置かうと決心したのはその爲であつた。
で、そこはたゞ敵の出撃と遁走を防ぐために砲兵を以て固めることにして、攻撃地點を反對側を選ん
だ。そこで塔の基部に坑道を穿つて爆破するといふことになつたのだ。

シムールダンはゴーヴァンの爲すがまゝに委せてゐたが、心が咎めてならなかつた。彼の峻嚴な
魂は、この古めかしいゴシック式の建物のすべてに對して叛逆した。そして、建物などに對して
は、人間に對するよりもつと無慈悲でなければならぬと思つた。城を助けるといふことは慈悲の
始まりである。しかも寛大はゴーヴァンの弱點だ。シムールダンは人も知る如く、彼を監視し、その

恐ろしい睨みで慈悲に流れるいを引留めてゐたのだ。けれども、再び仰ぎ見た時、シームルダン自身でさへも自分の心弱さを憤らずにはをられなかつたが、そのラ・トゥールグは矢張り人知れぬ感慨なしには見ることが出来なかつた。彼はゴーヴァンに始めて讀書を教へた、その想ひ深い本が幾冊か今もなほ藏つてある勉強部屋を望み見て懐しい感じに打たれた。彼は隣り村のバリニエの僧侶で、嘗てはその橋上の城の屋根部屋に住んでゐたのだ。彼が幼いゴーヴァンを膝に抱き上げ、アルファベットの拾ひ読みさせたのはその書庫の中であつた。身神ともに發達し、自分の精神を受けついで人と成つて行つたのも、この古い小さい四壁の中であつた。この書庫、この橋城、それにこの愛しい魂の子の末長く幸多かれと祈つてやつたこの四壁を、自分は今木葉微塵に打碎き、焼き拂はうとするのか？ シームルダンもこの建物に對しては慈悲心を動かした。けれども矢張り、胸の奥には良心の苛責があつた。

彼はゴーヴァンが反對の側から攻撃することを許した。ラ・トゥールグの塔の側は野蠻な感じを興へ、書庫の側は文化的な感じを興へる。シームルダンは、その野蠻な側を裂け目の所から攻撃することだけをゴーヴァンに許した。

ゴーヴァン家の者によつて攻撃され、同じゴーヴァン家の者によつて防がれるこの古い居城は、佛蘭西革命の眞唯中に再び封建時代の風習を展開した。中世紀の歴史を成せるものは、かういふ親戚同志の戦争なのだ。

十二、救出を企つ

兩軍とも、夜を徹して戦闘準備に忙殺されてゐた。今し方述べた陰惨な休戦談判が終るや否や、ゴーヴァンは先づ第一に副官を呼んだ。

「ゲシヤン、梯子があるか？」ゴーヴァンは早口に話しかけた。

「司令官殿、梯子はありません」

「一挺要るぞ」

「あれを上るためにですか？」

「いや救出すためにだ」

ゲシヤンはちよつと首を捻つたが、直ぐ答へた。

「解りました。けれどもその目的ならば、非常に長い奴が要ります」

「少くとも三階までは届かなくちやあ」

「承知致しました。司令官殿、ざつとそれぐらゐの高さで宜しいのですな？」

「それ以上なくちやいけない。大事を取らなくちやならんから」

「御尤もです」

「早速一挺作らせろ」

「三階に屈くやうな梯子は、さう急には出来ません」

「短かい梯子を五六挺もつなぎ合したらいゝぢやないか」

「その短いのさへありません」

「捜して御覽」

「見つかりつこはありません。國中の百姓共は、車を壊したり、橋を落したりしたやうに、みんな梯子をぶち壊してしまつたんです」

「成程さうか、奴等は共和黨軍を惱まさうとしてゐるんだからな」

「奴等は我軍が荷物も運べぬやう、河も越せぬやう、壁も乗り越せぬやう、あらゆる妨害を試みてゐるのです」

「だが、どうしても梯子が一挺入用だ」

「司令官殿、偶然思出しましたが、確かフリージエールの附近のジャヴネに大きな大工の仕事場があつたと思ひます。そこまで行けば一挺ぐらゐはあるかも知れません」

「一刻も猶豫は出来ないぞ」

「その梯子はいつまで御入用なのですか」

「明日の、遅くも今頃までだ」

「ぢや、大急ぎでジャヴネへ使を出しませう。きつと手に入るでせう。ジャヴネには騎兵の陣地があ

りますから、それに護衛させることにして、梯子は明日、日の入前に此處へ到着するやうに致しませう」

「結構々々、それなら大丈夫だ。すぐ頼むぞ、やつて呉れ」と、ゴーヴァンは命じた。

「ゲシャンは十分後には歸つて来て、ゴーヴァンに報告した。」

「司令官殿、急使はジャネヴに向つて出發しました」

ゴーヴァンは高臺に上り、溪谷の向うの橋城を凝視めたまふ、長い間黙然としてゐた。橋城の臺は溪谷の斷崖に面してゐた。そこは一度跳橋が上つてしまふと、ずつと低い入口の外に入る所がない。高臺から橋のアーチ形の所に達するには、この斷崖に沿つて下りて行かねばならなかつた。それでも下りるだけならば荆棘の中を分けて行けば行けないことはない。が、いよ／＼下り切つて一度濠の中へ出たが最後、この三階建の各階から瞰射する雨霰のやうな彈丸に身を曝さねばならないのだ。茲に於てゴーヴァンは、攻圍戦の進歩の程度も考慮して、有効な攻撃は塔の側の裂け目からせねばならないといふ結論に達したのだ。

彼は鼠一匹逃がすまいとあらゆる手段を講じた。全軍を警めていよ／＼犇々と取圍み、部隊の配置を益々密に蟻の這ひ出る隙もないほどに固めた。ゴーヴァンとシムールダンはこの攻城戦を分擔することになり、ゴーヴァンは森の側を受持ち、シムールダンには高臺の側を受持つて貰ふことにし、ゴーヴァンがゲシャンを指揮して坑道の方から攻撃してゐる間、シムールダンは全砲門に裝填して橋

と溪谷とを監視するといふことに手筈が定つた。

十三、侯爵がしてゐたこと

城外で一城の攻撃準備を整へてゐる間に、城内ではまた防禦準備に忙殺されてゐた。

塔と樽は満更似てゐないこともない。樽は錐を揉み込めば穴があくが、それと同じやうに、塔は地雷坑道を穿つて爆破されることもある。城壁は、いはゞ樽の栓のやうなものだ。このラ・トゥールも、今正にそれと同じ運命に見舞はれたのであつた。

三四十貫の火薬といふ大錐は、巨大な壁を奥の奥まで貫いた。この孔は塔の基部から始まつて、城壁の最も分厚な部分を貫通し、形も定まらぬ孤形を描きつゝ城砦の地階まで續いてゐた。城外の攻圍軍はこの孔を突入の役に立たせるため、大砲を撃ちかけて益々中を擴げた。

この裂け目が貫通してゐる地階は、圓い大きな、がら空の部屋で、眞中には丸天井の楔石を支へる柱が一本立つてゐた。これは城内最大の部屋で、直徑四十呎は下らない。塔の各階の部屋はみなこれと同じやうな形であるが、これ程の廣さはなく、砲眼の小窓の切れてゐる所がその小部屋のあつた所に當つてゐた。地階の廣間には、砲眼も通風窓も採光窓もない。そのために、光線も空氣もまるで墓場の中のやうであつた。

木造の部分よりも鐵製の部分の方が多し鐵の扉は、この地階の廣間にあつた。もう一つの戸口は階上に通ずる階段の鼻口に當つてゐる。かういふ階段はみな厚い城壁の内部に仕込んであつたのだ。

攻圍軍が爆破した裂け目から入つて來るのは、先づこの低い部屋である。だが、この部屋を占領したところでは、塔はまだ占領されたのではない。

この地階の廣間は、暫く入つてゐただけでも呼吸が困難になる所で、二十四時間も入つてゐれば必ず窒息する。が、それも新しく出來た裂け目のお蔭で餘程樂になつた。

防禦軍が裂け目を塞がなかつたのはそれがためである。それにまた、折角裂け目を塞いだところで何の役に立たう？ 大砲で直ぐまた孔をあけられるばかりだ。

城内の人々は壁に松明籠を吊して松明を入れた。その光は地階の廣間の隅々まで照らした。さて、防禦軍はどうして城を守つたらいいか？

孔を塞ぐのは何でもないが、無駄なことだ。寧ろ退障に據る方がましである。この障礙物は極で作つた一種の四角の防禦で、攻圍軍に銃火を集中し得るやうな仕掛になつてゐる。裂け目の外側はそのままにして置いて、内側から栓をするやうな具合になつた障礙物である。材料は相當にあつたので、先づ銃身を押し込めるだけの隙をつけた退障を築いた。退障の角は廣間の眞中の柱を移楯とし、兩翼はそれと兩側の壁までくつついてゐた。退障を築き終ると、今度は適當な場所を擇んで地雷を敷設した。

防戦の準備については侯爵自らが一切の指圖を與へた。激戰者、指揮者、先達、そして師匠たるこ

の恐るべき人物が……。

ラントナックは齡既に八十に達してゐたが、あの都市を救つた十八世紀の戰士の氣概を持つてゐた。彼は、百歳に垂んとしてリガから波蘭王を追出したアルベルヒ伯爵に似てゐる。

「友人達、勇氣を出せ！」と、侯爵はいつた。「この中世紀の初め、千七百三十七年に、シャルル二世はベンデルの一家屋に立籠り、三百の瑞典人を掲げて二萬の土耳其人に當つたではないか」一同は一階と二階とに防塞を築き、塔内の室々を固めた。寢室には銃眼を作り、扉には根太を柱能で叩き込んでつかひ棒にし、各階に通ずる螺旋階段だけを自由に通れるやうにして置いた。それはいよいよ敵が侵入して來た場合、防禦軍の方でそこを昇つたり降りたりして戦はねばならなかつたからで、もし敵に對してそれを塞ぐといふことになる、味方の方でも全然使へなくなつてしまふわけだ。こんな風に、籠城には必ず何かの弱點が伴ふものだ。

壯者の如く頑健で、倦むことを知らぬ侯爵は、自分から梁を持ち上げ、石を運び、部下に籠を垂れつゝ防禦準備の手助けをした。或る時は命令し、或る時は手傳ひ、また或る時は親しい言葉をかけ、この剽悍な部下達と一緒に笑つたりした。が、常に貴族としての威嚴は崩さず、氣位は高いが、それでゐて親しみ易く、優雅な舉措の中にも野蠻な風を藏してゐた。

彼は命令に對して返し言葉を許さなかつた。彼は以前かういつた。「たとへお前達の半數が叛旗を翻したとて、わしは残りの半數に叛徒を撃たせ、残つた者だけで此

處を死守するぞ」

かういふ言を吐く將軍は尊敬の的になるものだ。

十四、イマニユスがしてゐたこと

侯爵が裂け目と塔とに没頭してゐる時、イマニユスは橋の方の仕事に忙殺されてゐた。敵の包圍を受けるや、二階の窓下に横にかけてあつた非常梯子は侯爵の命令によつて取り拂はれ、イマニユスはそれを書庫の中へ藏ひ込んだ。ゴーヴァンが欲しがつてゐたのは、恐らくこの梯子の代りであつたらう。警護の間と呼ばれる一階の窓には、鐵棒を石の中へ打ち込んだ三重の格子がはまつてをり、そこから入ることも出ることもないやうになつてゐた。

書庫の窓は鐵棒は嵌めてないが、非常に高い所に作つてあつた。

イマニユスは自分と同じやうな、どんな問題にぶつつかつても背を見せない大膽な部下を三人従へてゐた。この三人の部下は、「金の枝」と呼ばれるオアスナールとピック・アン・ボア（木槍）兄弟である。イマニユスは籠燈を手にして鐵の扉を開け、橋城の各階を念入りに調べた。「金の枝」オアスナールはイマニユスに劣らぬ剛愎な人物で、一人の兄弟が共和黨軍のために殺されたといふ因縁を持つてゐる。

イマニユスは乾草と藥が詰込んである三階の穀倉を検査し、それから下に下りて來て、瀝青の樽數

個と火壺を五つ六つ用意させて置いた一階を見廻り、柴の束をどつさり瀝青樽にくつつけて置いて、硫黄火繩が具合よく行つてゐるかどうかを確かめた。この火繩の両端はそれと橋と塔とに通じてゐるのだ。彼は樽や柴の束の下の床板に瀝青をだらりと流して、硫黄火繩の先をその中に浸して置いた。それから、この瀝青樽のある部屋と藥の詰つてゐる穀倉の間に挟まれてゐる書庫の中に、三つの揺籠を持ち込んだ。その揺籠の中には、ルネ・ジャンとグロ・ザランとジョルジェットの子がスヤ／＼と眠つてゐたのだ。揺籠は子供達が目を醒さないやうにそつと運ばれた。

それは柳の枝で編んだ揺籠で、床の上に置けば、子供達が自分で上り下りの出来る、低い田舎風の粗末なものだ。イマニユスはその三つの揺籠の傍に、木の匙をそへたスプーンの碗を一つづつ置かせた。錠にかけてゐた非常梯子は、取り外して部屋の中の壁に立てかけてある。イマニユスは三つの揺籠を一つずつ、その向ひ側の壁際に梯子と向ひ合せに並べて置いた。それから風がよく通るやうに書庫の大窓を六つとも開放した。夏の夜は蒸暑かつたが、部屋には美しい星明りが差込んでゐた。

イマニユスはビック・アン・ボア兄弟に命じて、三階と階下の窓を開かせた。灰褐色の、干乾びた大きな常春藤の老樹が橋城の東の側に生えてゐて、それが橋城の一面を上から下までべつたりと覆ひ、各階の窓の縁まで埋めてゐた。彼はそれに眼を止めなが、残して置いても差支あるまいと思つた。イマニユスは最後に部屋隅々まで最も急入りに見廻した。検分が終ると、四人は橋城を去つて城砦の方に歸つて来た。イマニユスは重い扉を再び閉し、その恐ろしく大きな錠を仔細に検め、鐵

の扉の下の孔を通つてゐる硫黄火繩を眺めて、さも満足さうに首肯した。今は彼が敷設したこの火繩こそ、塔と橋とを結びつける唯一の連絡線となつたのだ。口火といはうか、導火線といはうか、その火繩はあの圓い廣間から起り、鐵の扉の下を通り、アーチ形の壁門の下を抜け、螺旋階段の上を蛇のやうにくね／＼しながら橋城の一階に達し、匍ひ上つて瀝青の溜の中に積上げられた乾いた柴草の山で終つてゐる。イマニユスは塔の内部で火繩に點火してから、火が書庫の下の瀝青の溜まで廻るには約十五分かゝると計算した。總ての準備を終へ、一々それを嚴重に検査してから、彼は鐵の扉の鍵をラントナック侯爵に返した。侯爵はそれをポケットの中に納めた。

一方攻圍軍の動靜は、出来るだけ嚴重に監視しなければならなかつた。そこでイマニユスは牛飼の角笛を皮帯に挟み、塔の頂上にある歩廊の物見櫓に立つて歩哨の役を勤め、眼を皿のやうにして、絶えず森と高臺の兩方を等分に見張つてゐた。その上手近な哨舎の銃眼の中には、手頃の大きさの砲彈薬詰込んだ布囊と火薬壺と、薬包に使ふ古新聞の引き裂いたのを置いて、監視の傍らせつせと薬包を作つてゐた。

太陽が昇ると、森の中には軍刀を腰に、彈藥囊を背に、銃には劍をつけ、攻撃準備を整へた八ヶ大隊が姿を現した。高臺の方には、彈藥車、薬包、榴散彈の箱を整へた砲兵が砲列を敷いてゐた。城砦の中には、喇叭銃、騎銃、短銃、廣口銃に装填した十九人の男と、揺籠の中に眠る三人の子供達がるばかりであつた。

子供達は眼を醒ました。

眞先に眼を醒ましたのは一番幼い女の兒であつた。子供の眼醒めは蕾が開く時のやうで、その生とした若やかな魂は美しい芳香を放つやうに思はれた。

三人の中一番年下のジョルジェットは生れて一年半しか経たぬ女の兒で、この五月まではまだ母の奥房に縋つてゐた。このジョルジェットは小さな頭を擡げ、揺籠の上に起き上つて自分の足を眺めてゐたが、その中に何か廻らぬ舌で喋り出した。朝の光は揺籠の上に輝いてゐた。ジョルジェットの足と曙の光とは、どちらが美しい薔薇色をしてゐるか見分けがつかなかつた。

他の二人はまだ眠つてゐる。男の子の眠はずつと深かつた。ジョルジェットは快活にでもおとなしく獨りで片言をいつてゐる。

ルネ・ジャンの髪は褐色、グロ・ザランのは栗色、そしてジョルジェットのは金髪であつた。髪の色は年をとるに従つて變るもので、幼い子供でも年齢に應じてこんな風に異つてゐるのだ。ルネ・ジャンは小ヘルクレスのやうな顔をしてゐるが、兩の拳を眼に當て、俯伏になつて眠つてゐた。グ

ロ・ザランは小さな寝床の外へ兩脚を投げ出してゐた。

三人ともみんな襪縷を着てゐた。赤頭布大隊から貰つた着物はボロ／＼になつて、その下にはシヤツさへも着てゐない。

二人の男の兒は裸體といつてもいゝぐらゐだが、ジョルジェットは、古いペチコートで今は上衣ぐらゐの長さになつてしまつた襪縷布にくるまつてゐた。さてこの子供達の面倒をみてゐたのは誰であらう？ それは判らないが、母でないことだけは確かだ。この野蠻な百姓の兵隊達は、森から森へと子供達を引張り歩いては、スープをあてがつてやつてゐた。たゞそれだけである。それで子供達はどうにか命をつないで來たのだ。子供達にとつてはどの人もこの人も主人であつたが、父と呼ぶべき人は一人もなかつた。けれども、無心の子供達には、襪縷の周圍にさへも後光がさす。この三人の小さい生物はほんたうに可愛いらしかつた。

ジョルジェットは相變らず片言をいつてゐる。

小鳥は囀り、子供は喋る。けれどもそれは同じ歌である。舌も廻らぬ、はつきりとしてゐない、それでゐて意味深長な歌なのだ。子供は鳥とは異つて、その前途に人間といふ暗い運命を控へてゐる。そのことを思ふと、子供の嬉しさを聞かぬ人も顔色を曇らせるのだ。地上で聞き得る最も崇高な歌、それは幼兒の唇を衝いて出る人間の魂の片言だ。單なる本能の一つに過ぎないのではあるが、錯綜した思想の囁きは、無意識ながら不思議な力で永遠の正義に訴へてゐる。恐らくそれは人

生の門口に立てる者の人生に對する抗議、——無意識ながら深刻な抗議なのであらう。

幼児の泣きは意味のないこともあるが、言葉以上の力を持つてゐることもある。それは節調こそないが一個の歌であり、綴こそ整つてゐないが立派な言葉である。その泣きは天に始まつて地に至るもなほ終らず、人間が世に出る前からあつて、なほ遙かの未來まで續く聲である。この片言といふものは子供がその昔天使であつた頃にいつた言葉の反響であり、また天國に上つた後に使ふ言葉の反響である。搖籃は、墳墓が「明日」を持つやうに「昨日」を持つてゐる。この「明日」とこの「昨日」とは、幼児の譯の判らない片言の中に二重の神祕を織り込んでゐる。その薔薇色の魂の中に差したこの神々しい陰影ほど、神、永遠、責任、運命の相對性をはつきりと證據立てるものはないのだ。

ジョルジェットは廻らぬ舌で喋つてゐたが悲しげな様子などは微塵もない。その可愛らしい顔は满面微笑で埋まつてゐる。口も微笑み、眼も微笑み、兩頬の笑靨も微笑んでゐた。この微笑には、朝を祝福する神祕的な喜びがあつた。人間の魂は日の光を力強く感ずる。空は青々と晴れ渡つて、暖かい好天氣であつた。この纖弱い幼児ジョルジェットは、何にも知らず解らず、悟らず、たゞ無心で、靜かに夢の搖籃に揺られてゐた。そして、自然の美しさに浸つて、——眞直ぐな木や、親身な線、純な平和な野原、巢の中の鳥、泉、蟬、木の葉、そしてすべての上には何物にも優る太陽の豊かな光が輝いてゐる、——かうした自然の懷に抱かれながら、何ともいへぬ安らかな氣持に満されてゐた。

ジョルジェットの次にルネ・ジャンが眼を醒した。ルネ・ジャンは長男で、今年四歳と少しになる。彼は立ち上つて、大人のやうに勢よく搖籃から飛び出した。直ぐにお碗が見つかったが、當前の事だといふやうな顔をして床の上に坐り、そのスープを吸ひ始めた。

グロ・ザランはジョルジェットのお饅舌ぐらゐでは眼が醒めなかつたが、お碗の中でカタ／＼となる匙の音を聞くと、吃驚したやうに跳ね起きて眼を見開いた。グロ・ザランは満三歳になる。彼は自分のお碗を見つけて、手を延ばしてそれを取つた。そして寢床から出ずに、ルネ・ジャンがやつてゐるやうにお碗を膝の上に置き、匙を小さな手に握つて、スープを吸ひ始めた。

ジョルジェットの耳にはそんな物音は聞えなかつた。その可愛い聲の抑揚は、夢の搖籠に拍子を合せてゐるかのやうであつた。大きく睜つて上の方を見つめてゐるその眼は神のやうであつた。頭の上にある圓天井がどんなに暗からうと、子供の眼にはそれが天のやうに映るのだ。

ルネ・ジャンは、食べ終ると匙でお碗の底をがり／＼とこそげて吐息をついた。が、急に勿體らし、「僕あスープを吸つちやつたよ」と怒鳴つた。その聲でジョルジェットはふと氣がついた。

「プープーッブーさういつて、ジョルジェットはルネ・ジャンがもう食べ終り、グロ・ザランが食べてゐるのを見て、自分も搖籠の傍に置いてあるスープのお碗を掴んで食べ始めた。そして一生懸命に匙を口へ持つて行かうとするのだが、見當が違つて何度も耳の方へ行つたりする。赤坊は幾度も／＼

文明を棄て、は指を突込んだ。

グロ・ザランは、兄さんと同じやうにお腕の底をこそげてから揺籃を飛出し、兄さんを捉へようと後を追つかけて走つた。

二

突然外のずつと下の方、森の方角から鋭い喇叭の音が響いて来た。軍隊の喇叭のやうに、高らかな嚴かな響だ。すると、この喇叭の音に答へて塔の頂から角笛が響き渡つた。

今度は呼び出した方が喇叭で、角笛がそれに應じたのであつた。

喇叭の第二聲が響くと、續いて角笛の第二聲がそれに答へた。

その時、遠くの森の端から、はつきりした聲が起つてかう怒鳴つた。

「山賊共、警告だ！ もし日没までに自發的に降服しなかつたら攻撃を開始するぞ」

野獸の咆吼にも似た聲が塔の頂から答へた。——「攻撃して見ろ」下からまた聲がする。「攻撃

開始の三十分前に、最後の警告として大砲を一發放つぞ」

「攻撃して見ろ」上の聲は繰返した。

この問答の聲は子供達の所までは聞えなかつたが、喇叭と角笛の音は鋭くはつきりと聞えた。ジョルジェットは喇叭の第一聲を聞きつけ、ハツと頭を上げて、スリーブを啜るのを止めた。角笛が鳴る

と、匙をお碗の中に落した。續いて喇叭の第二聲が鳴り響くと、右手の小さな人差し指を上げた。それから、その指を上げたり下げたりしながら喇叭の拍子を取り始めた。そして角笛の第二聲が長く尾を引くと、指もそれにつれてゆつくりと調子を合せた。

角笛と喇叭とが聞えなくなると、赤坊は指を上げたまま、怪訝さうにしてゐたが、口の中で「ミジッ」とつぶやいた。それは音楽の心算だらう。

年上の二人、ルネ・ジャンとグロ・ザランとは角笛にも喇叭にも氣をとめなかつた。二人は他のことに氣を取られてゐた。草鞋蟲が書庫の床を横斷してゐる最中なのだ。

グロ・ザランはそれを見附けて叫んだ。「蟲がある」

ルネ・ジャンは馳せつけた。

「こいつあ、螿すよ」グロザランがまたいつた。

「これに悪戯をしちやいけないよ」と、ルネ・ジャンがいつた。そして二人はデットとこの通行者を眺めてゐた。

その間にジョルジェットはスリーブを平げてしつて、眼で兄さん達を探し始めた。ルネ・ジャンとグロ・ザランとは窓の銃眼の中にしやがんで、熱心に草鞋蟲を見てゐる。額と額とが鉢合せしてゐるので、捲毛が入り亂れる。二人は非常な驚異に打たれながら、息を殺して熱心にその蟲を凝視してゐたが、草鞋蟲はこれほど感心されてもまだ嬉しくないのか、ピツタリ止まつたまま、動かろとしなくな

つた。

ジョルジェットは兄さん達が熱心に何かを凝視してゐる様子を見て、自分も見たくて堪らなくなつた。けれども二人の所まで行くのは容易なことではない。が、赤坊はどうしても行つて見ようとか、つた。道中はなかく容易なことではない。床の上にはいろ／＼なものが散らばつてゐた。腰掛がひつくり返つてゐる、古い書類の山、蓋をねぢ開けた空の荷箱、トランク、がらくたの山、それ等の間を縫うて進まねばならない。丁度暗礁の多い多島海のやうなものだ。けれどもジョルジェットはその冒険に乗出した。揺籠から匍ひ出すのが冒険の第一歩である。それから暗礁の鎖の間に飛び込んで、海峡をぐる／＼廻り、腰掛を押しつけ、二つの箱の間を匍ひ抜け、書類の山の上を、上りはどうにか匍ひ上り、下りは無邪氣な可愛いお尻を丸出しにして轉がり落ち、遂に船乗の所謂外洋に出た。そこは、邪魔物も危険もない可成り広い床の上である。此處まで来ると、赤坊は四匍になり、略ぼこの室の直径ぐらゐる距離を、猫のやうな早さで窓の近くまで匍つて行つた。そこには別な恐ろしい障碍物が待つてゐた。壁の横に大きな梯子が寄せかけてあつて、それが窓の所まで長くなつてゐる。そして、その先端は少しばかり銃眼の角よりも出つ張つてゐた。それはジョルジェットと兄さん達の間を隔てる岬のやうなもので、それを越さなければ二人の所へは行けなかつた。赤坊は匍ふのを止めて考へた。やがて胸の中の獨り考へが終つて、決心がついた。先づ薔薇色の指でしつかりと梯子の段を掴んだ、梯子は横に倒してあるので段は垂直になつてゐた。それから足を踏んばつて押へ

立ちをしようとしたが、ストーンと屏餅をついた。また同じことをやつてみた。二度とも失敗したが、とう／＼三度目にはうまく行つた。そして段を力にちやんと立つて、順々に段を持ちかへながら、梯子を傳はつて横歩きを始めた。端の所まで来ると、捉まへるものがないのでよろ／＼となつたが、その小さな両手で梯子の大きな竿の端にしがみついて起ち直り、どうにか難所の岬を廻つた。そして、ルネ・ジャンとグロザランの顔を見るとニコ／＼と笑つた。

三

丁度その時、ルネ・ジャンは草鞋蟲の觀察の結果に満足して、ひよいと頭を上げ、「こいつは雌だよ」といつた。

ジョルジェットが聲を出して笑つたので、ルネ・ジャンもそれに釣込まれて笑つた。そのルネ・ジャンの笑ひ聲はまたグロ・ザランを笑はせた。

ジョルジェットが兄さん達と一緒になつたので、銃眼の中は小さな應接間のやうになつた。

だが、お客の草鞋蟲はいつの間にもやう姿を消して終つた。ジョルジェットの笑聲を利用して、床の孔へもぐり込んだのだ。草鞋蟲がなくなると、今度はまた別な出来事が起つた。

先づ、燕が數羽飛んで行つた。

燕の巢は覆ひかぶさるやうになつてゐる屋根の軒端にあるのだらう。スイ／＼と窓の直ぐ傍を飛

んでは、子供達の姿を見つけてちよつと吃驚したらしく、大空に舞ひ上つて大きな圓を描き、春の快い調を奏でゝゐる。その朗らかな聲に子供達は眼を上げた。そしていつの間にもやら草鞋蟲のことは忘れてしまった。ジョルジェットは燕を指して叫んだ。「ココ！」

ルネ・ジャンは嗤つて、「赤ちやん、ありやココ（鶏）ぢやないよ。鳥だよ」

「ゾゾ」ジョルジェットはいつた。そして三人ともチツと坐つたまゝ燕に見入つてゐた。すると、今度は蜜蜂が飛び込んで来た。

蜜蜂ほどよく人間の魂に似たものはない。蜜蜂は花から花へと移つて蜜を蒐める。丁度魂が星から星へと飛んで光を求めやうに。

蜜蜂は大きな翅音をたて、飛び込んで来た。それはかう挨拶してゐるやうに聞える。

「やあ今日は、私は今薔薇に會ひに行つて来ましたよ。それから、今度は子供さん達に會ひに来たんです。何か面白いことはありませんか？」

蜜蜂は主婦である。その歌は叱言をいつてゐるのだ。

蜜蜂が部屋の中にある間、子供達はちよつとも眼を放さずにそれを眺めてゐた。

蜜蜂は書庫の隅々まで隈なく探險して、自分の巢の中にでもゐるやうに悠々とあちこち飛び廻る。

そして翅の摺れ合ふ音も朗かに、書棚から書棚へと飛び移り、まるで心ある者のやうに、硝子戸越に本の表題を眺めては次から次へと飛んで行つた。蜜蜂は訪問が終ると窓の外へ飛び去つた。

「蜜蜂はお家に歸るんだよ」と、ルネ・ジャンがいつた。

「ありや動物だよ」グロ・ザランがいつた。

「違ふよ、ありや蠅だよ」と、ルネ・ジャンがまた押返す。

「ミュシユ」ジョルジェットが廻らぬ舌で兄さんの口眞似をする。

床の上に一本の繩が落ちてゐた。その繩の一端には結び目がついてゐたが、それを見つけたグロ・

ザランはその結び目と反對の端を拇指と人指指で摘み上げ、それを風車のやうにぐるぐる振り廻してその廻るところを熱心に眺めてゐた。

ジョルジェットはジョルジェットで、またもとの通りの四匐になり、氣の向くまゝに、床の上をあちこちと匍ひ廻つてゐた。その中に蠱孔だらけになつた綴錦の古い肱掛椅子を見つけた。中に詰込まれた馬の毛があつちこちの孔から喰み出してゐる。ジョルジェットはこの肱掛椅子の前で止まつた。そして指を突込んで孔を大きくし、一生懸命に長い馬毛を引張り出してゐる。

突然赤坊は指を上げた。ちよつとお聞きよ」といひたげな様子である。

二人の小さい兄は顔をあげて耳を済ました。ぼんやりとした遠い物音が、外の方から聞えて来た。それは攻圍軍が森の中で何かの行動を起してゐる物音であらう。馬は嘶き、太鼓の音は響き、彈藥車は軋み、鎖はガチャン／＼と鳴り、互に呼び交ふ聲、答へる聲が雜然としてゐる。この野蠻な物音の錯綜は、一種の諧調をなして響いて来る

のだ。子供達は嬉しさに聞き惚れてゐる。
「あれは神様の御業だよ」と、ルネ・ジャンがいつた。

四

物音は止んだ。ルネ・ジャンはぼんやり夢のやうな氣持になつてゐた。

こんなたいけな者の脳髓の中で、どうして考へが消えてしまつたり、また組立てられたりするのだらう？ あんな掻き亂され易い、短い記憶の神祕的な動機は何であらう？ 彼の考へ深い、柔らかな頭腦の中には様々の幻影が渦巻いてゐた、——神様のこと、お祈りのこと、掌を合せた幻影、今はどこかへ消え失せて、もう見ることの出来なくなつた優しい微笑の輝き、——ルネ・ジャンは小さな聲でいつてみた。——「お母ちゃん」

すると、グロ・ザランも後についていつた。——「お母ちゃん」

「ママ」——ジョルジェットも同じやうに……

そのうちにルネ・ジャンが跳ね始めた。それを見てグロ・ザランも跳ねた。

グロ・ザランはルネ・ジャンのすることなら、身振りに至るまですつかり眞似をするが、ジョルジノトはさうは行かなかつた。三歳の子は四歳の子のすることを眞似るが、二十ヶ月の子は獨立を守つてゐるのだ。ジョルジェットはえんこしたまゝ、時々連絡のない單語を並べてゐる。ジョルジェッ

トは文章に纏めることは出来なかつたが、根は中々の思想家で、單綴音の單語を並べては、格言のやうなことを喋つてゐるのだ。

けれども暫くするうちに、兄さん達のお手本が傳染つて来て、赤坊もその方に引込まれてしまつた。そして片言を止めて兄さん達の仲間入をし始めた。小さな裸足が六本、磨きのかゝつた檜の床の塵埃の中で、ダンスをしたり、大理石の胸像の下を、跳ね廻つたりよろけたりし始めた。高い所には難かしい顔をした大理石の胸像が幾つも立つてゐる。ジョルジェットは時々おどろした眼差でその像を盗み見では、「レ・モモンム！」とつぶやいた。

ジョルジェットが「モモンム」といつたのは、それが人のやうに見えたからであるが、赤坊が人といふのは實際の人ではなくて、實はお化けといつたやうな觀念の第一歩なのであらう。

ジョルジェットは、ヨタ／＼と兄さん達の後を追つかけてゐたが、一番得手な姿勢は矢つ張り四匍であつた。

窓際に近づいたルネ・ジャンはひよいと頭を上げたが、また直ぐに引込めて、急に窓の銃眼の隅つこに隠れた。誰か自分の凝視してゐるのに氣がついたからであつた。それは高臺に屯してゐた青軍の一兵士が、休戦を利用して、といふより寧ろ侵して、書庫の内部が覗ける溪谷の斜面の端までやつて来たのであつた。

ルネ・ジャンが隠れたのを見ると、グロ・ザランも隠れて、ルネ・ジャンの側へ縮こまつた。ジョ

ルジェットも兄さん達の後に隠れた。三人は黙つてヂツとしてゐた。ジョルジェットは指を唇にあてながら。暫くしてから、ルネ・ジャンは恐る／＼首を持ち上げた。兵士はまだ其處にゐた。彼は素早く頭を引込めた。それから子供達も息を殺して、随分長い間ヂツとしてゐた。とう／＼ジョルジェットは退屈して来た。そして恐ろしさも忘れて頭を上げて見た。兵士はもうゐなかつた。三人の子はまた飛んだり跳ねたりし始めた。

グロ・ザランは眞似事師で、ルネ・ジャンの崇拜者ではあつたが、たゞ一つ、物を見つけて出すといふ特殊の才能を持つてゐた。で、今も何處から見つけたものか、突然小さな四輪車を引張り出して来て、亂暴に飛廻り始めた。

この玩具の馬車は、先哲の著書や聖賢の像と竝んで、長いこと塵に埋れてゐたものであつた。それは多分ゴヴァンの幼い時分、玩具にして遊んだものであらう。

グロ・ザランは、先刻の繩を鞭代りにビシ／＼と鳴らして大得意であつた。発見者といふものはこんなものである。子供は小さな馬車を発見し、大人はアメリカを発見するが、その冒険心に於ては全く同じだ。

ところで、この掘出物も兄妹達と共同にしなければならなかつた。ルネ・ジャンは馬になりたがつた。ジョルジェットは馬車に乗りたかつた。

赤坊は匍つて来てうまく座席に上り込んだ。ルネ・ジャンは馬、グロ・ザランは馭者になつた。と

ころが肝腎の馭者が自分の職務を知らないので、馬の方が差圖をし始めた。

「ハイッ！ ていふんだよ」ルネ・ジャンが大きな聲を出す。

「ハイッ！」と、グロ・ザランがその通りにやる。

どうした機みか馬車がひつくり返つて、お客のジョルジェットは投げ出された。ジョルジェットはワーツと泣出した。子供の天使は泣くことも出来ると思える。

泣出した赤坊は、譯もなくいつまでも泣いてゐたくなつた。

「お嬢さん、あなたが餘り大き過ぎるからだよ」と、ルネ・ジャンがいつた。

「あなた、大きい」と、ジョルジェットがいつた。

そして、大きいといはれたのが嬉しくて、馬車から落つこつたことは直ぐ忘れてしまつた。

窓の外側の軒蛇腹は非常に廣く、高臺の叢から吹き上げて来る塵埃がそこに一杯溜つてゐた。この塵埃は雨が降ると土になつてしまふが、風に運ばれて来た木苺の種子がその浅い苗床に落ちて根を張つてゐた。この苺は狐苺といふ多年性苺の一種で、今は盛りの八月だから、黒い苺が鈴なりになつてゐる。見れば一本の枝は窓の中に差込んで、床とすれ／＼になるほど攪んでゐる。

グロ・ザランは繩を見つけ、馬車を見つけ、それから更にこの木苺を見つけて、その方に近づいた。そして、素早く一つちぎつて頬張つた。

「お腹が空いちやつた」と、ルネ・ジャンがいつた。

定的にする。

ルネ・ジャンは頁を繰った。聖バルトロミーの次には註釋者パンテニウスが現れた。彼はそれを引き裂いてグロ・ザランにやつた。

その中に、ジョルジュットはその大きな半切を二つに引き裂いた。それから更に四つにした。使徒の姿はいよ／＼細かに引きちぎられる。歴史家は、聖バルトロミーがアルメニアで皮を剝がれた後、ブルターニュでは手脚を引きちぎられたと書くかもしれない。

六

虐殺が終ると、ジョルジュットはルネ・ジャンの方へ手を延ばして、「もつとー」といった。

使徒と註釋者の次には註解書編纂者達の嚴めしい肖像が出て来た。第一番目はガヴァンチユスであつたが、ルネ・ジャンはそれをちぎつてジョルジュットに渡した。

「サン・バルテルミ」の註解者達は、みな順々に同じ運命に陥つた。

與へるといふことには優越感が伴ふ。ルネ・ジャンは自分の手には何も残してゐなかつた。グロ・ザランとジョルジュットは彼の方を眺めた。ルネ・ジャンはそれが嬉しかつた。二人を喜ばしてやつたといふことが何よりの報酬だつたのだ。

偉大な慈悲心を持つた齡達なルネ・ジャンは、グロ・ザランにフアブリシオ・ピニヤテリを、ジョ

ルジュットには神父スチルチングをやつた。次にはグロ・ザランにアルフォンス・トスタを、ジョルジュットにはコルネリウス・ア・ラピードを、それからまたグロ・ザランにアンリ・アモンを、ジョウーエー村の景色を寫した畫を添へてやつた。グロ・ザランが製紙業者の抗議文を貰ふと、ジョルジュットはグリフへの獻本の辭を貰つた。それから次が地圖の番だ。グロ・ザランにはエチオピアを與へ、リカノニアはジョルジュットの手に落ちる。みんなやつてしまふと、ルネ・ジャンは本を床の上突き落した。

それは恐ろしい瞬間であつた。グロ・ザランとジョルジュットは、面白いながらも怖々兄さんの仕種を眺めてゐる。ルネ・ジャンは眉をよせ、兩脚を踏張り、拳を握つて、この重い四つ折版の本を書見臺から突落したのだ。流石立派な古書も、かうなつては滲めなものだ。小さい手でグイと突落される、書見臺の端にひつかゝつて、ちよつとの間立直らうとするやうにためらつたが、遂にドーンと崩れ落ちて壊れ、皺くちやになり、裂け、留金は外れ、綴りは弛み、無慘にも床の上へたばつてしまつた。落ちた所は幸にも子供達の上ではなかつた。

下の二人は飛上るほど吃驚したが、潰されはしなかつた。征服の冒險といふものは、必ずしも都合よくばかりは行かない。

世のすべての光榮の如く、本は大きい響を發し、塵埃の雲を立てた。

本を突落してから、ルネ・ジャンは椅子を下りた。

沈黙と恐怖の瞬間が続いた。勝利は恐怖を伴ふものである。三人の子供は一所にかたまり、しつかり手を握り合して、遠くの方から老大な本の残骸を眺めてゐる。

が、それも束の間、グロ・ザランはツカ／＼とその残骸に近づいて、足で一蹴り蹴った。

たゞそれだけで澤山であつた。破壊慾は急に昂つた。ルネ・ジャンも蹴り、ジョルジュも小さい足をあげて蹴つた。が、弾みを喰つて尻餅をつくつと、今度はそれを幸ひ、いきなり「サン・バルテルミー」に飛びかゝつた。古書にこもる一切の罪文は完全に法力を失つた。ルネ・ジャンは聖者に飛びかゝり、グロ・ザランも續いてのしかゝつた。そして有頂天になつて、喜びながら、誇らかに、情容赦もなく、版畫を引き裂き、頁を破り、葉紐を引き抜き、装丁をバラ／＼にし、金粉を吹いた鞞革を剥がし、銀の留金を外し、羊皮紙を破り、貴重な本文を寸断々々にしてしまつた。手、足、爪、齒を使つて、笑ひながら猛烈に……。三人の破壊の天使は、身に寸鐵も帯びぬ宣教師を完膚なきまでに切刻んだ。

三人の子供達はこの聖者の遺跡を存してゐるアルメニヤ、ユダヤ、ベネベントを殲滅し、バルトロミと同一人だらうと看做されてゐるナタナエルと、「バルトロミー・ナタナエルの福音書」を贖物だと宣言した法皇ゲラシウス、あらゆる肖像、すべての地圖を一緒くたに根こそぎやつつけてしまつた。その時一匹の二十日鼠が飛び出して來てゐたのに、三人はそれにさへ氣がつかぬほどの熱心さで、

惨虐極りなき古書の虐殺に熱中してゐたのだ。

それは文字通り殲滅であつた。

歴史、傳説、科學、奇蹟——謠であれ、眞實であれ——、教會の羅旬語、迷信、狂信、神祕、かうしたすべてのものを引き裂き、あらゆる宗教を完膚なきまでに引き破るといふ仕事は、巨人が三人寄つたら或ひは出来るかも知れないが、しかし今三人の子供がそれをやつてのけたのだ。この仕事にかつてから餘程時間が経つた。しかし、三人は遂にそれを成就げた。今は「サン・バルテルミー」は見ると影もなくなつてしまつた。

三人がこの仕事を仕上げた時、最後の頁が引き裂かれ、最後の版畫が床の上に投げつけられ、さも立派な本が、僅かに装釘の骨組に本文と版畫の断片がくつついてゐるばかりの眼も當てられぬ姿になつた時、ルネ・ジャンは起ち上りざま、紙片で埋まつた床を眺めて手を拍つた。

グロ・ザランも同じやうに手をたゝいた。

ジョルジュは何かの頁を掴んで起ち上り、自分の顎ぐらゐもある窓によりかゝつて、それを引裂いては窓の外へ投げ始めた。

それを見たルネ・ジャンもグロ・ザランも同じ仕事を始めた。二人は拾ひ集めては小さく引き裂き、捨てゝは裂きして、ジョルジュの眞似をしてみんな窓の外へ投げた。かくてこの貴重な古書も、恐怖といふものをしらぬ指先で引ちぎられ、殆んど乗す所なく風に吹き飛ばされてしまつた。

「蝶々！」といった。
ジョルジェットは風に弄ばれて散つて行く白い紙片を不思議さうに眺めながら、

かくして、澤山の小さい亡霊が青空の中に消え失せてしまつたのを最後として虐殺は終つた。

七

聖バルトロミは、かくして二度も殉教者になつたのだ。初めて虐殺されたのは西暦四十九年であつたが。

やがて夕方になつた。暑さは加はり、空気が如何にも睡さうになつた。ジョルジェットの眼は重くなつて来た。ルネ・ジャンは自分の揺籃の方に行き、枕の代りにしてゐた藁袋を引きずり出して窓際へ持つて行つた。そしてその上に寝そべつて、「寝ようよ」といつた。

グロ・ザランはルネ・ジャンの身體に頭をのつけ、ジョルジェットはグロ・ザランの上を枕にして、三人の悪黨はすやくと眠に落ちた。

生暖かい風が開けつ放しの窓越しに吹き込んで来る。野生の花の香りが溪谷や丘から運ばれて来て、夜の呼吸の中に漂つてゐる。自然は穩かに、慈悲に満ちてゐた。輝けるすべてのものは、平和と愛に包まれてゐた。

太陽は光といふ愛撫をあらゆるものに投げかけた。そしてあの生なきものゝ得もいはれぬ美しさか

ら奏でられる階調はあたりをこめて、耳に響き、胸に感じられた。

無限の世界には母性といふものがある。創造は咲き亂れた奇蹟である。そしてその慈愛に満ちた心で、創造はその偉業を成就げるのだ。

うとくと睡氣を誘ふやうな平和な景色の中に、光と影が交るゝ動いて、野の面、川面に美しい木理のやうな模様を浮出させてゐる。霧は、夢の世界に誘はれて行く幻想のやうに雲に向つて立ち昇つてゐる。鳥の群は姦しい音を立てながら、ラ・トゥールグの上を舞つてゐた。燕は窓越しに覗き込

んでは、子供達がゲッスリ寝込んでゐるかどうか確めるやうな様子をしてゐた。子供達は三人とも可愛らしくかたまり、折り重なつたまゝチツとして、半裸體の、小さいキューピッドのやうな恰好をして眠つてゐる。ほんたうに可愛らしい純な姿だ。三人の年をみんな併せたところで九つにもならない。天國の夢でも見てゐるのか、口のあたりには時々仄かな微笑が漂つてゐる。神様が子供達の耳に囁いてゐるのかも知れない。この子供こそ、すべての人類が、弱者ではあるが恵まれた者と呼ぶ種類の人間であつた。無邪氣なるが故に、かくも嚴かなものになるのだ。

子供達の周圍には物音一つしない。その優しい胸から洩れる呼吸が宇宙の営みそのものであり、萬物がみなそれを聞かうと耳を澄ましてゐるやうに。——木の葉は揺がず、草もそよがなかつた。星をちりばめた大空は、この天使のやうな子供達の安らかな眠を妨げるのを恐れて、チツと息を殺

してゐるかのやうであつた。この小さき者達の前に捧げられた自然の神々しい尊敬ほど崇嚴なもの

またとあるまい。

陽は白づいて、既に地平線にかゝらうとしてゐる。その時突然、この澄み切つた平和を破つて、物凄く稲妻が森の中から閃いた。續いて野蠻な轟音が起つた。大砲が一發發射されたのであつたと、凄じい反響が起つて、地獄のやうな恐ろしい響が擴がった。

唸りは股々として、山から山へと物凄く傳はつて行つた。ジョルジェットはその物音にふと眼を醒ました。そしてちよつと頭を擡げたが、小さな指を立て、
「ブーム！」といつた。
やがて響は止んだ。そしてすべてはもとの沈黙に歸つた。ジョルジェットはグロ・ザランの身體に頭をのつけて、再び眠に落ちた。

第四篇 母親

一、死が通る

その日も夜になつた時には、あの母親——まるで行方も定めず歩いてゐる姿を村人がよく見かけたあの母親は、もう一日中歩き通してゐたのであつた。しかし、それは来る日も来る日も彼女が繰返してゐる日課なのだ。そして傍目もふらず、一休みもせず、顔の向いた方に歩き續けて行つたのだ。彼女にとつては、疲れて眠る——どこといふ當もなく、行き當りばつたり手近な所にごろ寝するといふことも、休息といふ休息にはならなかつた。また、鳥が餌をついばんで歩くやうに其處こゝで拾つて食べたものは、營養といふ營養にはならなかつた。彼女の食つたり眠つたりするのは、僅かに行倒れにならずに濟むといふ程度に過ぎなかつたのだ。前の晩に彼女が夜を明かしたのは、人の棄て、行つた物置小屋であつた。内亂のお蔭でこんな空小屋が到る處に出來てゐる。開つ放しの戸からはひつて見ると、中はガランとして壁が突立つてゐるばかり、その他には破れた屋根の下に薬が少しばかり棄て、あるだけであつた。彼女は薬と垂木との間にはひつて眠つた。一晩中、薬の下で鼠がゴソ／＼する、屋根の大穴からは星のきらめきが露はに見える。ものゝ四五時間も眠ると、夜中もいとはず起き上つて、あまり暑さがひどくならないうちに、出來るだけ先に行つておかうとまた歩みを續けた。眞夏に跣足で旅するものにとつては、日中よりは夜中の方がずつと樂なのだ。

彼女は一生懸命にヴァントルトの百姓から教はつた道順を急いだ。そして西へ西へと一直線に歩いた。途中で彼女と擦れ違つた人でもあつたら、間斷なく口を動かしながら、小聲で「ラ・トゥールグ、——ラ・トゥールグ」と繰返して行くのを聞いたであらう。

三人の愛し兒の名の外には、彼女はこの言葉より外なんにも知らなかつたのだ。

女は歩きながらぼんやりと夢を見てゐた。自分がこれまでで營めて來たいろ／＼な艱難、様々な辛苦、堪忍で來たことの數々を思ひ出した。途中で會つたいろ／＼な人、様々な腹立たしい思ひ、いろ／＼と難題を吹掛けられたことなどを、或ひは一夜の宿を求め、一切のパンを貰ふために、時にはたゞ

道を教へて貰ふだけのために、いろ／＼な條件を持出され、しかもそれに應じなければならなかつたことなど、——それを彼女は泌々と考へながら歩いた。おちぶれた女といふものは尾羽打からした男よりももつと惨めなものだ。女は快樂の道具になるからである。ほんとに思ひ出してもゾツとする流浪の旅！ しかし、どんな辛い思ひでも、子供さへ見つかつて呉れれば、彼女にはなんでもないので。

その日彼女が初めて人に出會つたのは、とある村に差蒐つた時であつた。その時、日は將に昇らうとしてゐたが、あたりにはまだ夜の暗かりが残り、残惜しさに漂つてゐた。本通の家はあちらこちら戸を半分開けて、窓からは怪訝さうな顔が幾つも覗いてゐる。村人達は蜂の巣をつゝいたやうに騒いでゐるのだ。それは車輪の音や鎖の音が聞え始めたからであつた。

教會堂の境内には、おど／＼した村人の一團が群がつてゐた。そして一齊に顔を上げて、村に通ずる山路を高い山の上から下つて来るものを眺めてゐる。それは鎖でつないだ五頭の馬にひかせて来る四輪荷馬車であつた。馬車の上には、長い木の柱を積かさねたやうに高くなつてゐる部分があり、その高い部分の眞中にはまた異様な恰好をしたものが載つてをり、全體は柙衣のやうな大きな覆で包まれてゐた。馬車の前後には十人づゝ騎馬の者がついてゐる。その人達は三角帽をかぶり、肩の上からは劍附鐵砲のやうなものが突き出てゐた。この行列は地平線の上にくつきりと浮出して、徐かに進んで來た。馬車も黒く見えた。その上の荷も黒く見えた。騎士もまた眞黒に見えた。そして、その

背後からは、曉の光が輝き始めた。

行列はつひに村の中に入り、教會堂の廣場の方へ進んで來た。

馬車が山を下つて來る間に日は高く昇つて、行列の姿もはつきり見えるやうになつた。列中の者誰一人として聲を出すものもないので、まるで影の行列を見てゐるやうな氣がする。騎馬の人はみな憲兵で、手にはほんたうの拔身の劍を握つてゐた。覆をかけた馬車は眞黒であつた。

あの流浪ひ歩く哀れた母親は、行列とは反對の方角から村にはひつて來た。そして憲兵と馬車とが廣場についた頃、彼女もまたこの百姓達の集つてゐる所に來かゝつた。村人達は小聲でいろ／＼な噂をし合つてゐる。

「ありや一體何だらう？」

「斷頭臺のお通りだよ」

「どこから來たもんだらう？」

「そりや、フージェールからさ」

「どこへ持つて行くんだらう？」

「そいつはわからねえ。が、なんでもパリニエの近所のお城へ持つて行くんだつてことだぜ」

「パリニエの方？」

「好きな所へ持つて行くがよいだ。この村へ止りさへしなけりや！」

柩衣らしいものに包まれた荷を運ぶ大荷馬車、一團の馬、憲兵、鎖の音、人々の沈黙、そしてほのぼのと明け行く空、——すべての物が一幅の妖怪畫めいてゐる。行列はやがてこの廣場を過ぎて、村を出外れてしまつた。この小村は山と山との間の凹地に在つたので、それから十五六分も経つた頃には、呆氣にとられて突立つてゐた百姓達は、この不氣味な行列が西の方の山の頂上に登りつゝいたのを見た。重い車輪は太い轍を残しながら軋み、鎖は朝風の中でガチャ／＼と鳴り、劔は朝日に映えてキラ／＼と輝いてゐたが、そこで路は曲り、行列は見えなくなつてしまつた。それは丁度あの書庫の中で、ジョルジェットがまだ眠つてゐる兄さん達の傍で眼を醒まし、獨りで薔薇色のあんよにお早うをいつてゐる時であつた。

二、死が語る

母親はこの不思議な行列の通るのを見てゐたが、それが何であるかも知らなかつたし、考へて見ようともしなかつた。それは、もつと他の幻影が眼にちらつてゐたからだ、——懐かしい愛兒、暗闇に紛れて行方知れずになつた愛兒の幻影か。彼女もまた村を通り抜け、行列の後の憲兵から少し後れて同じ路を辿つて行つた。その時ふと「斷頭臺」といふ言葉が頭の中に、甦つて來た。「斷頭臺！」と彼女は獨り語ちて見たが、この素朴な百姓女ミシエル・フレシヤールには、それが何のことだか一向解らなかつた。しかし、蟲の知らせとい

ふものか、何といふことなしに身軀ひを感じた。そしてこの得體の知れぬ代物の後からついて行くのが何となく恐ろしくなつて來たので、道路を左へ切れて、密林の中へ入り込んだ。この森こそフリードリッヒの森であつたのだ。

暫くさまよひ歩いた擧句、向うの方に鐘樓と人家の屋根がチラホラするのを見つけた。これは森の中の空地に在る村の一つである。彼女はその方に向つて歩いて行つた。その時はもう随分腹が減つてゐた。この村にも共和黨軍の駐屯軍が置いてある。女はやがて村役場の前の廣場に出た。

この村もまた恐怖と不安にざわついてゐた。役場の入口の石段の前に村人が澤山集つてゐた。その石段の一番上には、兵士達に護衛された一人の男が大きな布告を掲げて差上げてゐる。その男の右側には鼓手が立つてをり、左側にはピラ張人夫が糊壺と刷子とを持つて控へてゐる。

戸口の上の露臺には、百姓着の上に三色の綬をかけた村長が出て來た。掲示を持つた男はお布告の役人であつた。彼は小さな鞆をぶら下げた皮紐を肩からかけてゐるが、この地方一帯に布告すべき達を持つて、村から村を巡り歩いてゐるのだといふことはこれで判る。ミシエル・フレシヤールがそこに近づいた時には、彼がその布告を繰捲けてしまつて、將に文句を讀み始めようとすると、そこであつた。彼は大きな聲で讀みあげた。

「一にして不可分の佛蘭西共和國」
大鼓が勢よく鳴らされた。群集の間には動搖の色が現れた。或るものは頭布をそつと脱ぎ、他の

者は鍔廣の帽子を一層眼深に引下げた。その當時、特にこの地方では、帽子によつて大體その政治的意見が判つたものだ。即ち鍔廣帽子は王黨眞、頭布は共和派といふことになつてゐた。騒々しいざわめきはこの時パツタリ止んで、誰も彼も熱心に聴耳を立てた。お布告役人は更に先を朗讀する。

「……派遣代表に傳達されたる命令と、公安委員より委任されたる權限によつて、……」
再び太鼓の音が高く鳴る。お布告役は讀み續ける。

「——且つ、捕縛されたる武装叛徒に對する法律の保護を褫奪し、またかくの如き叛徒を庇護し或はその逃走を幫助せるものは極刑に處すべき事を規定せる國民議會の決議を執行し、……」
一人の百姓が小聲で隣りの男に訊ねた。「ありや何だい、……そのう、極刑つて奴は？」

隣りの男は答へた。「俺や知らねえよ」

役人は布告をバタ／＼と振つた。

「——叛徒の處分に關して代表及び副代表に全權を賦與する事を規定せる四月三十日公布の法律第七條の規定により、法律の保護を褫奪されたる者の……」

役人は一息ついて、すぐまた續けた。

「——姓名又は通稱は左の如し。……」

群衆は一人残らず屹となつて耳をそばだてた。役人の聲は雷のやうに響いた。曰く、

「——賊徒ラントナック」

「今のは殿様のことだぞ」と、一人の百姓がつぶやいた。すると、そのつぶやきは隅から隅まで傳はつて、誰も彼も「今のは殿様のことだぞ」と私語した。

役人はその後を續けて讀み上げる。

「——賊徒ラントナック元侯爵、賊徒イマニユス……」

二人の百姓が顔を見合せていつた。「ありやゲージユ・ル・ブリユアンだ」「さうだ、『青軍の粉碎者』だ」

役人はドシ／＼人名表を讀み上げて行く。

「——賊徒گران・フランクフル……」

群衆はまた私語した。「ありや坊様だな」「さうだ。チュルモ一司祭だ」「さうだ、なんでもシャベルの森の近くの坊さまだよ」「そして賊徒なんだ」と、頭布をかぶつた男がいつた。

役人はまた讀み上げる。

「——賊徒ボアヌーヴォー、——賊徒ビツク・アン・ボア兄弟二人、——賊徒ウーザール……」

「今のはド・ケラン様のことだよ」と、一人の百姓がさ／＼やく。

「——賊徒パニエー……」

「ありやフェー様だ」

「——賊徒ブライス・ネット……」

「今のはジャモア様だ」

百姓達の私語には少しも氣づかず、役人は悠々と読み續ける。

「——賊徒ギユイノアツ、——通稱ロビ事賊徒シャトネー……」
一人の百姓は小聲でいつた。

「ギユイノアツ、つてのはル・ブロンと同じ人間だ。シャトネーはサン・トゥーアンの生れだ」

「——賊徒オアスナール……」
群集の中からいろ／＼な聲が聞えて来る。「今のリュイエ生れの間だよ」。「うん、さうだ。ありやプランシユ・ドール（金の枝）のことだ」

「あの人の舎弟はポントルソンの攻撃で討死したつてな」。「さうだ、オアスナール・マロニエールてんだ」。「十九になつたばかりの立派な若い者だつたがなあ」

「聴け！」と、役人は怒鳴つた。「人名表はもう直ぐにお終ひになる……」
「——賊徒ベル・ヴィーニユ、——賊徒ラ・ミュゼット、——賊徒サーブルツ、——賊徒ブランダムール（戀の芽生え）……」

一人の若い者が隣の小娘の肩を突つた。小娘はニッコリと笑つた。

「——賊徒シャント・アン・ニヴェール、——賊徒ル・シャール……」
「あゝ、ムーラールのことだ」一人の百姓がいつた。

「——賊徒タブーズ……」

「今のはゴーフルのことだよ」と、別の百姓がいつた。

「だけど、ゴーフルさんにも二人あるからね」と、一人の女が口を入れた。

「どつちにしろ、好い男に違ひないよ」と、年の若い男がいつた。

役人はこゝでまた布告をバタ／＼いはした。大鼓がドーンと鳴る。

お布告役人は一段と聲を厲まして、

「——前記の者は、その捕縛されたる場所の如何を問はず、本人なること確證されたる場合には直ちに死刑に處せらるべきものとす」

この時、群集の間にはどよめきが起つた。役人は委細かまはず読み續ける。

「——右の者を庇護し、或ひはその逃走を幫助したる者は、軍法會議に附したる上死刑に處す、署名者……」

沈黙は忽ち深刻になつた。

「——署名者、公安委員會特派代表シムールダン」

「あ、坊さんだ」と、一人の百姓がいつた。

「さうだ。元のバリニエの坊さんだ」と、他の者がつけ足した。

「チュルモーとシムールダンか。青軍の坊さんと、白軍の坊さんだ」と、町の人がいつた。

「両方とも腹黒さ」と、もう一人の町の男が吐出すやうにいつた。
露臺の上に立つてゐた村長は帽子を高くあげて叫んだ。「共和国萬歳！」
太鼓の音が長く響いたので、まだ布告が終つてゐないことが判つた。役人は手を振つて相圖をしてゐる。

「みんなよく聴け。政府の布告はまだ四行残つてゐる。この布告には北海岸討伐隊司令官ゴーヴァン閣下の署名があるんだ」

「謹聴々々！」群集の中から何人かの聲が起つた。そして役人はまた續けた。
「——死刑の嚴罰を課し、……」

皆水をうつつたやうにヒツソリとなつた。

「——右の命令に従つて、ラ・トゥールグに包圍されつゝある前記十九名の者に援助又は援軍を與ふることを嚴禁す」

「なんですつて？」突然一つの叫聲が起つた。

それは女の聲であつた。紛れもないあの母親の聲である。

三、百姓達のつぶやき

ミシエル・フレシヤールは群衆の中に紛れ込んでゐた。彼女は何も聞いてはゐなかつたが、聞いて

ゐなくとも自然と耳に入つて來ることがある。彼女は「ラ・トゥールグ」といふ言葉が聞えたので、思はず顔を上げて、「何ですつて？ ラ・トゥールグですつて？」と繰返した。

みんなは彼女の方をふり返つた。見たところ、まるで放心したやうな面持の、襷縷をまとつた女である。

「あの女こそ賊徒らしいぢやないか」と、人々は小聲でつぶやいた。

蕎麥パンの籠を下げた一人の百姓女が、彼女の傍へ近寄つて來て小聲でいつた。

「靜かになさいよ」

ミシエル・フレシヤールは氣拔けのしたやうにその女を見返した。その時、彼女の頭の中はまた譯が解らなくなつてしまつた。ラ・トゥールグといふ名前が稻妻のやうに通り過ぎてしまふと、その後はまたもとの暗闇に閉ざされてしまつた。彼女には何も訊ねる權利がなかつたのかしら？ またそんなにじろくと眺められるほどのことを仕出來したのかしら？

だが、この時最後の太鼓が鳴つて、ピラ張り人夫は布告を張りつけた。村長は役場の中に引込んでしまひ、お布告の役人は次の村へ出發してしまつた。そして群集は思ひ／＼に散らばつてしまつた。それでも、掲示の前にはまだ一團の人が残つてゐた。ミシエル・フレシヤールもその集團の中へ入つて行つた。

人々はたつた今、法律の保護の褫奪を宣言された人達のことをいろ／＼と噂し合つてゐる。

その中には百姓と町のブルジョアがゐた。つまり王黨と共和黨の二派があつたのだ。

「結局のところ、まだ誰も捕まへてやしねえんだ。十九人といやあ、矢つ張りたゞの十九人ぢやねえか。プリューも捕まつちやあねえし、バンジヤマン・ムーランも、アンドイエ教區のグーピルもよ」一人の百姓がいつた。

「モンジャンのロリユールもさ」他の一人がつけ加へる。他の者も交るゝいひ出した。

「ブリス・ドニーもよ」。「フランス・デュドエだつてまだだ」。「さうだ、ラヴァールのな」。「ローネー・ヴィリエのユエだつてもさ」。「グレジだつてさうだ」。「ピロンだつても」。「フィリユールだつて」。「メニサンも」。「ゲアレーもだぜ」。「ロジュレーの三人兄弟だつてさうだ」。「ピエールヴィルのルシャンドリエ様もまだだ」

「この馬鹿者ども！ ラントナックさへ捕へりやあ、みんな捕へたも同然ぢやないか」と、難かしい顔つきをした白髪の老人がいつた。

「あの人もまだ捕まつちやあねえだ」若い男がつぶやくやうにいつた。

老人はまたかういつた。「ラントナックが捕まつたら、魂が捕まつたんだ。ラントナックが死んだら、ヴァンデーも破滅ぢや」

「で、そのラントナックつていふのは一體何者ですか？」と、一人の紳士が訊ねた。

「元の侯爵さ」別な紳士が答へた。

「ありや女を銃殺した仲間だぜ」と、もう一人の人が説明した。

「それはほんとの事ですよ」ミシエル・フレシヤールは、その言葉をきくと思はず口を出した。みんなはその聲の方をふりかへつた。

女は言葉を續けて、「だつて、あの人はわたしを銃殺したんですもの」

これは、生きてる女がわたしは死んだといつてゐるやうなもので、頗る妙な話である。

集つた人達はちよつと迂散臭ささうな顔つきをして、女の方を眺め始めた。

それも無理のない話で、彼女は全くギョツとさせるやうな様子をしてゐた。何を見ても身軀ひする、おどろくする、怖毛をふるふ、畏にかゝつた野獸のやうに恐怖してゐるので、反つて見てゐる方で氣味悪くなるぐらゐであつた。絶望し切つた女の弱さの中には、反つて一種の凄味があるものだ。彼女は實に運命のどん底に落ちた人間であつた。だが、百姓などはそんな細かなところまで氣がつくものではない。一人の百姓は口の中でいつた。

「ひよつとすると、この女は間諜かも知れねえぞ」

「餘計なことをいはないで、さつさへ行つちまつたがいよ」先刻話しかけた親切さうな女が低い聲で注意した。が、ミシエル・フレシヤールは平氣でいつた。

「わたしは何も悪いことなんかしやしません。わたしは自分の子供を探してゐるんですよ」親切な女は、ミシエル・フレシヤールを見据ゑてゐる人達の方を流し目に見ながら、額に手をあて

て眼ばたきをして見せた。「こりや少し足りないんだよ」

そして彼女をわきの方へ連れて行つて、蕎麥パンを一つやつた。ミシエル・フレシャールは有難うともいはず、そのパンにむしやぶりついた。

「なるほどなあ、まるで獸のやうな食ひ方だ。白痴に違ひないわい」百姓達がさういつた。

そして最後まで残つてゐた人達も一人去り二人去り、やがてみんな思ひ／＼に散つてしまつた。

ミシエル・フレシャールはパンを食べてしまふと、そのおかみさんにいつた。

「おいしいね、もう食べちやつたよ。それで、ラ・トゥールグつてどつちの方なの？」

「また始まつたよ！」百姓女が大きい聲を出した。

「わたしはラ・トゥールグへ行かなくちやならないの。ラ・トゥールグへ行く道を教へて下さいよ」

「そんな馬鹿なことを！」百姓女は聲を張り上げた。

「お前さんは殺されに行きたいのかい、え？ それに、わたしや道順も知らないんだしさ。ねえ、まあ、お前さんはまるで氣狂ひぢやないかね。お聞きよ、お前さんはひどく疲れてゐるらしい。わたしの家へ来て一休みして行つたらどうだね」

「わたしは休んでゐる暇なんぞありません」と、母親は答へる。

「それに、まあ、足は傷だらけだ」と、百姓女は氣の毒さうにつぶやした。

ミシエル・フレシャールはまたいひ出した。

「今もいつたやうにさ、わたしは子供を盗られちやつたんだよ。女の子が一人と男二人をね。わたしは森の中の穴小屋から出て来たんだよ。乞食のテルマルシュに訊けば、わたしのことは何でもわかるよ。それから、あつちの畑の中で出會した人に訊いてもね。わたしの病氣を癒してくれたのはその乞食よ。何でもどこかの骨が折れてゐたらしいの。ひどい目に會つたつていふのはそれだけのことだけだね。それからまだラドゥーブ軍曹がある。その人に訊いたつていふよ、あの人なら何でも話して呉れるから。さうだ、その人だよ、わたし達親子が森の中で出會したのは。三人で、さうだ、三人の子供なんだよ。一番上のがルネ・ジャンていつてね。お前さんには洗ひざらひいつちまはう。もう一人がグロ・ザラン、それから小ちやい女の兒はジョルジュットつていふのよ。配偶は亡くなつちまつてね、人に殺されちやつたのよ。家の人はシスコアニールの百姓だつたの。お前さんは親切さうな人だね。道を教へておくれよ。わたしや氣狂ひぢやないのよ。——子供の母親なんだから。子供を盗られたので、一生懸命に探してゐるの。たゞそれだけのことだよ。どつちの方角から来たかもハツキリ覚えてないけどね。昨夕は物置小屋の藁の上で寝たのよ。ラ・トゥールグ——さうだ。わたしの行かうつてのはそこよ。わたしや泥坊ぢやないよ。本當のことをいつてることが、お前さんにはお解りだらう。ねえ、後生だから、子供を見つけるお手傳ひをしておくれ。わたしやこの近所の者ぢやないのよ。わたしや一度鐵砲で射たれたんだけど、どこを射たれたのかも覚えてちやゐないよ」

百姓女は頭をふつていつた。

「まあ、お聞き、旅の衆や。革命がはやつてゐる時にや、人の合點の行かないやうなことはいいはないこつたよ。でないよ、取提まつてひどい目に遭ふからね」

「だつて、ラ・トゥールグへ行かなくつちや」母親はまだ止めない。

「ねえ、おかみさん。天に在します御子エス様とマリア様の御名にかけて、あなたにお願ひするのよ。

ねえ、おかみさん、頼みます。拜みます。どうぞ、ラ・トゥールグへ行く道を教へて下さいよ」

百姓女はとうとうカッとなつて、

「知らないつたらさ。たとへ知つてたからつて、そんなことを教へてやれるもんかね。そこは碌な所ぢやないんだよ。そんな所へ行くなんて全く気が知れないよ」

「でも、わたしは行かなくちやあ」と、母親はいつた。

そして、彼女はまた歩き始めた。百姓女はその後姿を見送つてゐたが、「でも、何か食べるものがなくつちや堪るまいにねえ」とつぶやいた。

そしてミシエル・フレシヤールの後を追掛けて行つて、黒パンを一つ持たせてやつた。

「これでも晩御飯になさいよ」

ミシエル・フレシヤールは渡されるまゝにその蕎麥パンを受けとつた。が、何の挨拶もせず、ふりむきもしないで、サツサと歩いて行つた。

彼女はやがて村を出外れた。村端れの家の邊まで来た時、三人の襪縷を着た素足の子供達に會つ

た。女は子供達の方に近寄つて、「これは女二人に男一人だね」といつた。

三人の子供達が自分の持つてゐるパンをジロ／＼眺めてゐるのに気がつくつと、彼女はそれを子供達にやつてしまつた。子供達は貰ふには貰つたが、何となく氣味悪さうにしてゐた。

彼女は眞直ぐに森の中にはひつて行つた。

四、間 違 ひ

その同じ朝、まだ夜の明け放れぬ頃のことであつた。ジャヴネからレクスに通ずる十字路に沿つた森の暗がりの中で、かういふ事件が起つた：

森の國の道路は、どれもこれも高い堤に狹まれて切通しのやうになつてゐるが、ジャヴネからレクスを経てバリニエに出る道はそれが一番甚だしい上に、ひどく曲りくねつてゐた。道路などいふよりは溪谷といつた方がいゝぐらゐである。右も左も茂みで眞暗になつてゐるので、伏兵をするにはこの上もない場所であつた。

その朝、丁度ミシエル・フレシヤールがこの森の反對の側を通つて第一の村に入り、そこで憲兵に護衛された妖怪のやうな行列に出會した時から一時間ほど前のことである。

ジャヴネ街道がクエノン河の橋を渡つてすぐの所にある密林の中に、大勢の人が集つてゐた。が、木の枝のお蔭で、外部からは少しも分らないやうになつてゐる。その人達はみんな百姓で、グリゴと

いふ手皮の上衣を着けてゐた。この上衣は六世紀頃にはブルターニュの王様が着てゐたもので、百姓達が着るやうになつたのは十八世紀になつてからのことである。或る者は鐵砲を、或る者は鉞をといふ風に、手に、武器を握つてゐた。そして鉞を持つてゐる連中は丸太を伐り倒し、枯枝をあつめて森の空地に積上げ、いつでも火をつけられるやうに用意してゐた。鐵砲を持つた者どもは、道の兩側に分れて何かしきりに見張をしてゐる様子である。もしその時、木の葉を透してその一部分でも覗くことが出来たとしたら、その人々がみんな引鐵に指をかけ、木の股に銃をもたせかけて、茂みの隙間から照準を定めてゐる様子が眼に入つたことであらう。この人々はみな待伏してゐたのであつた。銃先は一齊に道路の方に向けられてゐる。その道路は、今しも曉の靄が霽れてほのくと白みかゝつてゐる。

この夜明けの薄明りの中で、あたりを憚る小さな聲が囁き合つてゐる。

「そりや確かな話かい？」

「確かにさうだつてことだ」

「で、それはこゝを通るつてんだね？」

「なんでも、その邊まで來てゐるつて話だ」

「ぢやあ、どうしたつてこゝを通すわけにや行かねえ」

「焼き棄てつちまはなくぢやならねえさ」

「そのために、かうして三ヶ村總出つてことになつたんだからな」

「さうだとも。ところでその護衛の奴等は？」

「護衛の奴等あ殺つつけてしまふさ」

「だが、肝腎の先生はこの道をとほると決つてゐるのかね」

「といふ話だ」

「すると、奴等あヴィトレから來るんだな？」

「勿論さ、どうしてだね？」

「だつてよ、誰かヴィジェルから來るつていつてたからな」

「ヴィジェルからしる、ヴィトレからしる、とにかく惡魔の手から來るのにや違ひあるめえ」

「さうだ、さうだ」

「だからよ、元の惡魔の所へ返してやらなきあ」

「さうだとも」

「で、そいつはパリニエへ行くんだね？」

「どうもさうらしい」

「そんなものを通して堪るか」

「なに、やるもんか」

「なに、通すもんか。金輪際通しつこはねえ」

「しつ！」

四邊はだんく明るくなつて来た。静かにして、用心しなければならぬ時刻だ。突然、待伏の連中は息を殺した。憂々として馬の蹄と車輪の響が聞えて来た。枝の間から覗くと、微かながら、細長い馬車と騎馬の護衛兵と馬車の積荷が、切通しのやうな道を次第に近づいて来るのが見える。

「とうとうやつて来たぞ！」頭と覺しき男がいつた。

「さうだ、護衛がついてるぞ」見張の役が答へる。

「何人ある？」

「十二人」

「二十人だつてことだつたが」

「十二人が二十人でも構ひやしねえ。皆殺しにしてやるから見てゐろ」

「もつと照準の利くやうになるまで待てよ」

暫くして、荷馬車と護衛兵は道の曲角までやつて来た。

「國王萬歳！」百姓軍の頭が出し抜けに叫んだ。

百挺もの鐵砲が一時にぶつ放された。

煙硝が消えた後を見ると、護衛兵の姿も消えてしまつてゐた。七人の騎馬兵はそこに倒れてをり、

五人は逃げてしまつたのだ。百姓達は馬車に向つて突進した。

「待て！こりや斷頭臺ぢやない。たゞの梯子だ」と、頭はいつた。

馬車の上には全く梯子の外何もなかつた。

馬は二頭傷ついて倒れてゐた。狙つたわけでもなかつたが、馭者も彈丸に中つて死んでゐた。

「兎も角もだ、護衛附の梯子だなんて頗る怪しいぞ。行く先はパリニエの方だつたんだ。さうだ、ラ・トゥールグの城壁を乗越すための梯子に相違ない」と、頭はいつた。

「こんな梯子は焼いぢまへ」と、百姓達は叫んだ。

そして、寄つてたかつてその梯子を焼いてしまつた。

ところが彼等の待設けてゐた死の荷馬車は、この特別の道を通つて、二里ほども先になるあのミシエル・フレシャールが夜明けに出會した村に入つてゐたのであつた。

五、密林の叫び

ミシエル・フレシャールは三人の子供にパンをやつてから、森の中を足に任せて歩いて行つた。

誰も教へてくれる者が無い以上、自分で道を見つけるより外はなかつた。歩み疲れては所嫌はず地面に坐り込んだ。それから起ち上つて歩き出した。かと思ふと、やがてまた崩れるやうに坐り込んで

しまつた。彼女は恐ろしい疲労に襲はれてゐた。最初は筋肉を犯し、遂には骨までもしみこむ奴隷と同じやうな疲労であつた。彼女は實際のところ奴隷であつた。失くした子供等の奴隷だつたのだ。草を分けて、可愛い子供等を見つけ出さずにはおかれやうか。かうしてゐる間にもどんな災難が降りかゝつてゐるかも知れない。この女のやうな義務を負ふ者には、權利などいふものは與へられてゐない。息を入れるために一休みする暇さへないのだ。それにしても彼女はひどく疲れてゐた。こんなにへト／＼になつてしまふと、もう一步先へ行くことさへ危なくなつて来る。一體こんなになつてもまだ歩けるものだらうか。彼女は、あれから村一つ家一軒ない森の中を、一日中を歩き續けたのだ。最初の中は本當の道を通つてゐたが、やがて道を間違へて、遂には日の目も見えぬ迷路の中へ迷ひ込んでしまつた。そこはどつちを見てもみんな同じやうで、まるで見當がつかない。一體彼女は目的地の方へ近づいてゐたのであらうか？　もう精も根も盡き果てたのだらうか？　何となく最後の、永遠の休息が迫つて来たやうな氣がしてならなかつた。あゝ、このまゝ行倒れになつてしまふのではなからうか？　どうかすると、もう一步も歩けさうもない氣持になる瞬間もあつた。太陽は西に傾きかゝつてゐる。森は益々暗くなつて来た。道は草に隠れて皆目判らない。彼女は全く頼りない身になつてしまつた。かうなつては神様にお頼りするより外はない。彼女は大聲で呼んでみた。しかしそれに答へる者はなかつた。

女は途方に暮れて四邊を見廻した。すると森の茂みの間に、僅かな隙間が出来てゐるのに氣がついた。

た。思切つてそつちの方へ歩いて行くと、急に前が開けて森の端れに出た。

前には細長い藪のやうな溪が延びてゐて、その底には綺麗な水が小石の上を流れてゐる。それを見ると急に咽喉が乾いて来たので、彼女は流の傍へ下りて行つて膝をつき、流に口をつけて水を飲んだ。そして跪いた序にお祈りを捧げた。

やつと立ち上つてから、方角を見定めて、流を涉つて行つた。流を越した向う側は、見渡す限り灌木に蔽はれた高地になつてゐた。高臺は流の岸から起つて爪先上りの坂をなし、遙かに地平線までも掘つてゐた。森の中では獨りぼつちであつた。この高地にはまるで人の氣配がしない。森の中では何處の茂みの蔭でも人に會へたかも知れないが、高臺の上では眼の届く限り何物も見えない。鳥が五六羽、何かに驚いたらしく荒れ果てた高臺の上を飛び去つた。

この恐ろしい無人の境の中に立つた時、足は感覺を失つて利かなくなつてしまつた。そしてこの大きな孤愁を破つて、急に氣でも狂つたやうに妙な叫び聲を上げた。――「どなたかお聞きませんか？」

そして彼女は答へを待つてゐた。――答はあつた。低い餘韻のある聲が聞えて来た。その聲は地平線の果から起り、反響に反響して雷鳴か大砲の音のやうに聞えた。しかし折が折なので、丁度この母親の叫びに「あるよ」とでも答へたやうに思はれた。けれども、沈黙は再び一切を閉込めてしまつた。

母親は勢づいて起ち上つた。誰か向うの方にゐる。話相手になつて貰へる人があるのだといふ

氣持が、母親の胸に湧いて来た。丁度水を飲んで神様にお祈りした擧句だったので、氣力も大分ついて来た。彼女は大きな遠雷のやうな音が聞えて来た方角に向つて、高臺の傾斜を上り始めた。上つて行く中に、突然地平線上にそり立つ大きな塔が見えた。満目荒涼たる中に、眼を遮るものとしてはその塔だけである。塔の頂は、夕陽が照り映えて眞紅の色に染まつてゐる。しかしそこまではまだ一里の餘もあつた。塔の背後には、一帯の緑林が霧にかすんで廣々と擴がつてゐた。それこそフージェールの森であつた。

今し方の返事のやうな恐ろしい音は、その塔から起つたやうに思はれてならなかつた。あの塔がほんたうに返事して呉れたのかしら？

ミシエル・フレシャールはとうとう高臺の頂上まで登り詰めた。が、眼の前には見渡す限りの原つば以外なんにもなかつた。彼女は塔の方へ向けて歩いて行つた。

六、形勢

その瞬間は遂に來た。

刻薄無情の手は無慈悲な者を捉へてゐた。

シムールダンはラントナックを袋の中の鼠にしてゐたのだ。

この王黨の老叛逆者は自分の城の中に追ひ込められてしまつた。かうなつては、幾らジタバタした

つて逃げることは出來ない。シムールダンは其處で、侯爵自身の領内で、その所有地の中で、その立籠つた城の中で、眼のあたり祖先傳來の居城を見せつけながら、侯爵の首を刎ねようとしてゐた。それは、この封建時代の城砦にその封建時代の領主の首の落ちるところを見せて、永くその處刑を記念しようといふのであつた。

さういふ考へから、わざ／＼斷頭臺をフージェールから取寄せることになつた。先列村の人達が見た怪しい荷物は、それを運搬する途中だつたのだ。

ラントナックを殺すことはヴァンデーを殺すことであり、ヴァンデーを殺すことは佛蘭西を救ふことなのだ。シムールダンは少しも躊躇しなかつた。彼の良心は頗る冷靜なのだ。彼は義務の觀念に促されて、平然と殘虐な行爲を敢行しようといふのだ。

侯爵の没落はもはや免れ難い形勢になつて來た。その點については、シムールダンは安心し切つてゐた。が、たゞ一つ氣掛りでないことがあつた。といふのは、どうしても戦闘は非常に激烈なものになるに相違ない。ゴージェアンは指揮官であるが、恐らく自分から戦線に乗出さだらう。この青年司令官は精悍な軍人氣質で固つてゐるのだ。彼はどんな激戦の中へでも身を挺して跳込まうといふ部類の人間である。もし彼が戦死するやうなことがあつたら、——この愛兒、ゴージェアンが！ゴージェアンこそは、この地上で愛してゐる唯一の人間だ。今までは幸運がこの青年に恵まれてゐた。しかし、幸運といふものは飽きが來まいものでもない。シムールダンは思はず身軀ひした。數奇な運命

は彼を二人のゴイヴァンの間に挟んでしまつた。そしてその一人に對しては死を希ひ、他の一人には生を願つてゐるのだ。

ジョルジェットを搖籃の中で眼を覺ませ、その母親を淋しさのどん底から招き寄せたあの大砲の音は、なほそれ以外のことをも仕出來してゐた。ほんの偶然からか、それとも砲手が故意と惡戯をしたのか、たゞ警告だけに止める筈であつた砲弾は、塔の一階の大きな銃眼の外覆になつてゐる格子に命中し、それをヘシ折つて半分ほど吹飛ばしてしまつた。籠城軍はその破損を修復してゐる暇もなかつた。

城内の人々は盛に氣勢をあげてはゐたものゝ、彈藥は残り少なくなつてゐた。籠城軍の形勢は實のところ攻圍軍の想像以上に危急を告げてゐたのだ。もし彈藥さへ豊富にあつたら、敵が城内に雪崩れ込んで來た時には、敵軍諸共塔を爆破してしまふことも出來るのだ。これは籠城軍が夢想してゐたことであつたが、事實火藥の豫備はもう盡きてゐたのだ。彈丸は一人當り三十發しか残つてゐない。鐵砲や廣口銃やピストルは澤山あつたが、如何せん彈藥箱が心細くなつてゐたのだ。それでも出來るだけ射撃の勢を衰へさせないために、小銃にも、廣口銃にも、ピストルにも、みんな彈丸をこめておいた。が、その射撃の勢はいつまで續けられるであらう？ 籠城軍は是非とも節約しなければならぬ資本を湯水のやうに費はなければならぬのだ。それは何よりも困難な仕事である。たゞ幸運なことには、——何といふ幸運だらう——戦闘は大體人と人との白兵戦になるらしい。飛道具よりは劍

や短刀の方が役に立つやうになるだらう。戦闘は鐵砲の射ち合ひよりは七首で渡り合ふ決闘の形になりさうだ。籠城軍の頼みの綱はたゞそれだけである。

塔の内部は容易に陥ちさうもなかつた。坑道の爆破口に當る下の廣間には防塞が築造してある。それはラントナック自身が差圖して造つた非常に巧妙なもので、嚴重に廣間の入口を固めてゐる。その退障の後には長い卓子があつて、その上にはちやんと裝填した銃器が据ゑてある。——廣口銃や騎銃、小銃に、劍、鉞、短刀まで並べてある。爆藥がなくて塔を爆破することが出來ないので、密牢につかはれてゐた岩窟は不用になつた。で、侯爵はその入口の扉を閉めさせた。一階の廣間の上には圓形の部屋があつて、そこへは狭い曲りくねつた階段を通らなければ上れないやうになつてゐる。この部屋にも下の部屋と同じやうに、すぐ使へるやうになつた武器が澤山卓子の上に並べてあつた。部屋の内部には銃眼から明りが差込んでゐる。今いつた鐵格子を吹飛ばされた銃眼がそれである。この部屋から螺旋階段を通つてもう一階上ると、鐵の扉を取りつけた入口から橋城へ行けるやうになつた圓い部屋がある。この室は鐵扉の間とか鏡の間とか呼ばれてゐた。それは小さな鏡が澤山、露出した壁石に錆びた古釘でとめてあつたからで、室内は荒涼たる廢墟に優雅さをつきませた、いかにも怪奇な風情を呈してゐた。

これから上の方の室々が十分な防禦が出來ないため、この鏡の間は、城廓研究の權威マネッソンのマレの所謂「籠城軍の降服する最後の場所」になつてゐた。今まで述べて來た戦闘といふのも實は包

團軍をこゝまで入り込ませないがための努力なのだ。

この三階の圓い廣間も銃眼から明りをとるやうになつてゐるが、今は松明が赤々と點されてゐる。松明に火を點したのはイマニユスであつたが、そのすぐ傍にはちやんと硫黄火繩の端が置いてある。それは恐ろしい用心振りだ。

一階の廣間の奥には、細長い机上に一枚の板が置いてあり、その上にはホーマー時代の洞窟のやうに食物が用意してある。大皿に盛つた米の飯、黒麥のお粥、贅肉の煮付、ビスケット、果物の蒸焼、それから林檎酒の壺などがあつて、誰でも勝手に飲食の出来るやうになつてゐた。

砲聲が響いたので、城内の人は一齊に引締つた。平和の時は後三十分しか残つてゐないのだ。イマニユスは塔の頂に起つて、寄手の近附いて来るのを見守つてゐた。ラントナックは攻圍軍が前進して來ても射撃してはならないと命令した。

「敵は四千五百人からゐる。奴等を城外で殺さうとしたつて、とても追つつきやしない。しかし、城内に飛込んだとなりやあ、いよく平等の五分々々だよ」

さういつて、笑ひながら「平等博愛か」といつた。

敵が行動を開始したら、イマニユスが角笛を吹いて知らせることに打合せが出来てゐた。

城内の小部隊は黙々として、入口の退障の後や階段の上に身構へ、片手に銃、片手に數珠を握つて敵の押寄せるのを待つてゐた。

この形勢は果して何を語つてゐるか？

即ち、攻圍軍としては、まづ裂け目から城壁内によち登る、防塞を突破する、三層の部屋を奪取するために全力をあげ、彈丸雨飛の中を、曲りくねつた二つの階段を一段々と攻め上つて行かねばならないといふことである。そして籠城軍にとつては、たゞ一死あるのみだ。

七、戰圍準備

ゴーヴァンの方ではまたしきりと攻撃の準備を整へてゐた。彼は最後の命令をシムールダンに傳へた。シムールダンの任務は、——これはよく記憶しておいて貰はねばならないが、たゞ高臺を守るといふことだけなのだ。森の中の陣地で主力を率ゐて待機することになつてゐるゲシャンにも命令を下した。この森の掩護を受ける砲兵隊も、高臺に露出してゐる砲兵隊も、籠城軍が突出するか逃走を企てるかするまでは、決して發砲しないといふことに打合せて置いた。ゴーヴァン自身は坑道から突撃する部隊を指揮する手筈になつてゐる。シムールダンが心配してゐたのはその事だつたのだ。

夕陽は今しがた没したばかりである。

ゴーヴァンは突貫、小刀、ピストル、拳骨、そして齒——それ以外の方法を以てしてはラ・トゥールグを陥落させる方法はないと思つてゐた。敵と敵とが顔をつき合せて殺し合ふ——これほど殘虐な戦争はない。彼は子供の頃この塔の中に住んでゐたので、内部の恐ろしい仕掛はよく知つてゐた。

ゴーヴァンは深い黙想に耽つてゐる。

數歩離れた所には彼の片腕副官ゲシャンが立つてゐて、手にせる望遠鏡でパリニエの方角の地平線をしきりと物色してゐた。と、突然彼は大聲をあげた。「あゝ、いよゝく来た！」

この聲にゴーヴァンも黙想から呼び醒まされた。「何だね、ゲシャン？」

「梯子が參りました、閣下」

「救助梯子だな」

「さうです」

「なんだい、まだ着いてゐなかつたのかい？」

「まだゞつたんです、閣下。それで大分心配してゐたのです。私がジャヴネへやつた傳令は先刻歸つて參りました」

「そりや知つてゐる」

「傳令の報告によりますと、ジャヴネの大王のところまで丁度適當な梯子を見つけ、それを徵發して荷馬車に積ませました。そして騎馬の護衛を十二人つけ、その荷馬車と護衛と梯子が、パリニエに向けて出發するのを見届けた上で、全速力で引返して參つたのださうです」

「傳令が附加へていふには、馬はいゝし、出發は夜中の二時頃だつたんだから、遅くも日の入り前までには着かにやならん筈だつていふんだ。俺はすつかり聞いて知つてゐる。それでどうしたんだ？」

「それで閣下、もう日は暮れたのに、その梯子を積んだ荷馬車はまだ着かないのです」

「そんな筈はないがな。しかし、何にせよ攻撃は開始しなきゃならない。もうその時刻なんだから。猶豫しやうものなら、城内の奴等は氣遅れでもしてゐるかと思ふだらう」

「攻撃はいつでも開始出來ます、閣下」

「しかし救助梯子がなくちゃ駄目だ」

「それはさうです」

「ところが、まだそれが來てゐない」

「いや、もう手に入りました」

「どうして？」

「私が今、あゝいよゝく来たといつたのはそれなんです。荷馬車が着かないので望遠鏡でパリニエからラ・トゥールグに來る街道の方を眺めてゐますと、閣下、やつと私は安心致しました。荷馬車と護衛とが向うからやつて來てゐるんです。今、山を降りて來るところですよ。お見えになるでせう」

ゴーヴァンは望遠鏡をとつて眺めた。

「なるほど、やつて來るな。暗いんで、はつきりとは判らないが、しかし護衛兵は見える。確かにあれに相違ない。たゞ護衛兵の數がお前のいふより多いやうだがね、ゲシャン」

「私もさう思つてるところですが」

「もう十町ほどしかない」

「閣下、救助梯子はもう十五分もすれば此所へ着きます」

「よし、これでいよいよ攻撃出来るやうになつた」

近づいて来たのは荷馬車には違ひなかつたが、實は二人の思つてゐた荷馬車とは別物だつたのだ。

ゴーヴァンがふとふり返つて見ると、そこには軍曹ラドゥーブが直立不動の姿勢で、俯目になつて
擧手の禮をしてゐた。

「何だ、ラドゥーブ軍曹」

「司令官殿、私ども赤頭布大隊の者は閣下にお願ひ致したい儀がございます」

「何だ？」

「死なして頂きたいのであります」

「えつ！」と、ゴーヴァンはいつた。

「お聴入れ下さるでせうか？」

「うむ、そいつは場合によつてだな」と、ゴーヴァンが答へた。

「お聴き下さい、閣下。ドールの戦争以來、閣下は私どもにお目を掛け過ぎていらつしやいます。私どもはまだ十二人揃つてゐるんです」

「それで？」

「情ないことだと思つてゐるんであります」

「お前達は豫備隊だ」

「なんとかして前衛隊にしていたゞきたいのです」

「しかし戦争の終になつて、いよいよ勝利を決するといふ時にお前達が必要なんだ。そのために後方部隊に残しておくのだ」

「いゝ加減しびれが切れつちまひます」

「いゝや、お前達も攻撃部隊に入つてゐるんだ。一緒に進軍するんぢやないか」

「後の方からでせう。巴里は先頭に立つ權利を持つてゐるんです」

「そのことは考へて置かう、軍曹」

「閣下、只今直ぐお考へ下さい。眼の前に機會が來てゐるんです。直ぐ猛烈な腕づくの戦争が始まるんでせう。随分な激戦だらうと思ふんであります。ラ・トゥールグは觸る者の手を焼くことであります。私どもはその隊の中に加へていたゞきたいのであります」

軍曹は一息ついて口髭をひねり、急に調子を變へていつた。

「その上閣下、あの塔の中には私どもの小さな子供がをります。あそこに私どもの大隊の子、私どもの三人の子供がゐるんです。あの『青軍の粉碎者』のイマニユスの畜生、ゲージュ・ル・ブリュアンだか、ゲージュ・ル・グリユアンだか、フリージュ・ル・トリユアンだか知らないが、鬼のやうなガリ